財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書202集

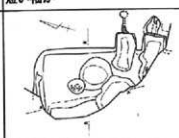
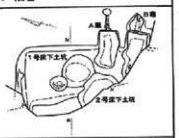
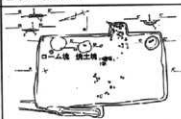
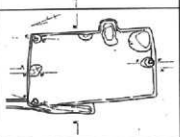
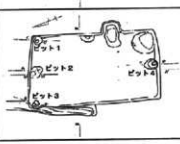
上大塚南原遺跡
鮎川藤ノ木遺跡

(主)前橋長瀞線・地方道路交付金事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

2007

藤岡土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

「上大塚南原遺跡・鮎川藤ノ木遺跡」正誤表

頁	段・行	誤	正
例言	3行	群馬藤岡市	群馬県藤岡市
3	土層注 2行	参加鉄分	酸化鉄分
6	キャプション	「群馬県10万分の1地質」図	「群馬県10万分の1地質図」
13	右段 6行	のであるが。	のであるが、
16	左段 5行	東河の	東側の
30	右段 5行	短い袖が	短い袖を
45	第42図		
62	右段 1行	思われるが、	思われる。また
62	第54図		
64	第56図		
64	右段 9行	見られたが、	有り、
69	左段 9行	特定時なかった	特定できなかった
87	下表左 5欄 I区北部上層	須恵器甕 32g	須恵器甕 42g

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第392集

上大塚南原遺跡
鮎川藤ノ木遺跡

(主)前橋長瀞線・地方道路交付金事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

2007

藤岡土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

調査区全景（北より）

上大塚南原遺跡遺物包含層出土の須恵器坏と漆紙文書

序

県都前橋を基点とし群馬県南部を縦貫して埼玉県長瀞に至る県道13号線（前橋長瀞線）は主要地方道路として交通量も多く、地域の幹線道路としてその担ってきた役割には大きなものがあります。しかしその交通量の多さは各所で交通渋滞を招き、県南部の主要都市藤岡市街地に於いても交通渋滞は恒常的になっておりました。群馬県ではその緩和と、県内どこからでも30分程度で高速道路のインターチェンジや新幹線に乗り入れることのできる30分構想支援道路として前橋長瀞線の藤岡バイパス建設を計画しましたが、既に一般国道17号線から一般国道254号線バイパスの間と東平井地区の一部を開通させ、共用もされています。

さてここに、前橋長瀞線藤岡バイパスの第２期工事として着工されている藤岡市上大塚、鮎川地内の建設予定地で平成17年度に実施致しました上大塚南原遺跡と鮎川藤ノ木遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書を刊行することとなりました。両遺跡共に調査範囲は決して広いものではありませんでしたが、いずれも２面の調査面を対象に発掘調査が行われ、江戸時代の浅間焼けのときの災害復旧工事の跡や、奈良・平安時代の竪穴住居、平安時代頃の遺物包含層などを発見、調査しました。特筆すべきは上大塚南原遺跡の上下の調査面の間にあった古代の遺物包含層から出土した漆紙文書であります。この漆紙文書の遺存状態は決して良好なものではありませんでしたが、帳簿・記録類と推定されるものでありました。

こうした調査成果が掲載された本報告書が考古学研究者に限らず、郷土史を研究される県民の皆様に活用されることを期待しております。

最後になりますが、群馬県県土整備局、藤岡土木事務所、群馬県教育委員会文化課、藤岡市教育委員会文化財保護課、並びに関係者各位に厚く御礼申し上げる次第です。また発掘調査及び整理業務に携わった関係者の労をねぎらい序とします。

平成18年10月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　高橋勇夫

例　言

1．本書は（主）前橋長瀞線建設に伴い事前調査された上大塚南原遺跡（遺跡略号　KOM）と鮎川藤ノ木遺跡（遺跡略号　AYF）の発掘調査報告書である。

2．上大塚南原遺跡は群馬藤岡市上大塚、鮎川藤ノ木遺跡は同市鮎川に所在する。

3．発掘調査及び整理事業は藤岡土木事務所の委託を受けた財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が行い、群馬県教育委員会がその調整を行った。

4．発掘調査の期間は次の通りである。

　発掘調査　平成17年11月１日～平成18年１月31日

　整理期間　平成18年７月１日～平成18年９月30日

5．発掘調査及び整理事業体制

　事務担当　小野宇三郎、高橋勇夫、木村裕紀、津金澤吉茂、矢崎俊夫、萩原　勉、西田健彦、宮前結城雄、関　晴彦、笠原秀樹、竹内　宏、石井　清、國定　均、斉藤恵利子、須田朋子、吉田有光、今泉大作、柳岡良宏、栗原幸代、佐藤聖行

　今井もと子、内山佳子、本間久美子、北原かおり、若田　誠、狩野真子、武藤秀典

　調査担当　石守　晃、渡會未央

　整理担当　石守　晃

7．本書作成の担当は次の通りである。

　編　　集　石守　晃

　執　　筆　第５章：高島英之

　　上記以外：石守　晃

　遺構写真撮影　各発掘調査担当及び株式会社シン技術コンサル（航空写真撮影）

　遺物写真撮影　佐藤元彦

　金属器処理　関　邦一、土橋まり子、小材浩一、津久井桂一、多田ひさ子、長岡久幸

　整理作業　伊東悦子、伊藤幸代、根井美智子、中橋たみ子、真庭和子、福島瑞希

　機械実測　田中精子、小菅優子

8．保管については、出土遺物は群馬県の所有に帰し、遺構実測図・遺構写真等は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の管理に於いて、共に群馬県埋蔵文化財調査センター内に収納される。

9．本書の作成に於いては以下の方々にご協力・ご指導戴いた。記して感謝の意を表します。

（敬称略）藤岡市教育委員会、伊藤　実、桜井　孝、志村　哲、田野倉武男、寺内敏郎、中島　誠、古郡正志、丸山治雄、山崎　悟、地元関係各位

凡　例

1　挿図中に使用した方位は、座標北を表している。

2　遺構断面実測図、等高線に記した数値は標高を表し、単位は“m”を用いた。

3　国家座標位置は上大塚南原遺跡ではX＝26365～26435、Y＝－70165～－70200、鮎川藤の木遺跡ではX＝26230～26275、Y＝－72275～－70320の中に在るが、その位置はそれぞれ下３桁で表記している。

4　遺構名称、遺構番号は調査段階のものをそのまま踏襲した。遺跡別の遺構では上大塚南原遺跡の土坑のみ１面と２面のものがあるが、特に面による表記上の区別は行わなかった。

5　本書に於けるテフラ（火山噴出物）の略号は以下の通り

As－A：浅間山噴出Ａ軽石（天明３年/1783）　As－B：浅間山噴出Ｂ軽石・火山灰（天仁元年/1108）

As－C：浅間山噴出Ｃ軽石（３世紀末葉）

6　遺構実測図の縮尺は下記を基準としているが、例外としたものは各図に記載している。

竪穴住居１／60　　竈１／30　　溝・道１／80

土坑・ピット１／60

7　遺物実測図の縮尺は下記を基準としている。

土器・陶磁器等　：　甕・壺・内耳鍋等１／４　　碗・坏・高坏・皿等１／３

石器・石製品等　：　紡錘車・台石・こもあみ石等１／４

石製品模造品等１／２　　石鏃４／５

金属製品　：　刀子・鎌・包丁等　１／３

8　土層注記中の土色には農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を参考に記載している。

9　スクリーントーンは焼土を表す。

目　次

口絵
序
例言　凡例
目次……i
挿図目次……ii
表目次……ii
本文中写真……iii
写真図版目次……iii

第1章　発掘調査のはじまりとその経過……1
第1節　発掘調査にいたる経過……1
第2節　発掘調査の経過……2
第3節　発掘調査の方法……4
第4節　基本層序……5
第2章　遺跡を取り巻く環境……6
第1節　地理的・地質的環境……6
第2節　歴史的環境……7
第3章　上大塚南原遺跡で発見された遺構と遺物……9
第1節　1面の遺構と遺物……9
（1概要‥9／2土坑‥9／3災害復旧溝群‥10／4畠（サク群）‥14）
第2節　遺物包含層……21
（1概要‥16／2時期‥17／3出土遺物‥20／4出土地域‥21）
第3節　2面の遺構と遺物……43
（1概要‥22／21号住居‥22／32号住居‥24／43号住居‥29／
54号住居‥33／65号住居‥38／76号住居‥39／87号住居‥39／
91号竪穴‥46／102面（Ⅱ区）の溝群‥46／112面の土坑・ピット群‥48
／12遺構外の出土遺物‥57）
第4章　鮎川藤ノ木上遺跡で発見された遺構と遺物……46
第1節　1面の遺構と遺物……46
（1概要‥58／2道路遺構‥58）
第2節　2面の遺構と遺物……50
（1概要‥61／21号住居‥61／32号住居‥64／41・3号見座‥66／
52号溝‥69／62面の土坑群‥69／7遺構外の出土遺物‥72）
第5章　考　察……73
第1節　上大塚南原遺跡出土漆紙文書について……73
おわりに……76

挿図目次

第１図　上大塚南原遺跡・鮎川藤ノ木遺跡位置図……１
第２図　前橋長瀞線バイパス路線と
試掘調査トレンチ配置図……２・３
第３図　調査区範囲と調査区の設定……４
第４図　上大塚南原遺跡Ⅱ区西壁の土層断面……５
第５図　遺跡周辺の地質図……６
第６図　周辺遺跡分布図……７
第７図　上大塚南原遺跡１面全体図……９
第８図　１面の土坑群……９
第９図　災害復旧溝群……10～12
第10図　畠（サク群）北部部分・断面図……13
第11図　畠（サク群）……14・15
第12図　遺物包含層出土遺物分布図と
出土遺物（その１）……16
第13図　遺物包含層出土遺物（その２）と
詳細分布図（その１）……17
第14図　詳細分布図（その２）と
遺物包含層出土遺物（その２）……18
第15図　遺物包含層出土遺物（その４）……19
第16図　遺物包含層出土遺物（その５）……20
第17図　遺物包含層遺存幾土……20
第18図　遺物包含層出土遺物（その６）と
詳細分布図（その３）……21
第19図　Ⅰ区２面遺構全体図……22
第20図　１号住居床上と住居出土遺物（その１）……23
第21図　１号住居掘り方……24
第22図　２号住居床上と住居出土遺物（その１）……25
第23図　２号住居竈と住居出土遺物（その２）……26
第24図　２号住居竈掘り方と住居出土遺物（その３）…27
第25図　２号住居掘り方と住居出土遺物（その４）……28
第26図　２号住居出土遺物（その５）……29
第27図　３号住居床上……30
第28図　３号住居竈と住居出土遺物（その１）……31
第29図　３号住居掘り方と住居出土遺物（その２）……32
第30図　３号住居カマド掘り方……33
第31図　４号住居床上と住居出土遺物（その１）……34
第32図　４号住居竈とカマド掘り方……45
第33図　４号住居掘り方と住居出土遺物（その２）……36
第34図　５号住居床上と住居出土遺物……37
第35図　５号住居竈……38
第36図　５号住居竈掘り方……39
第37図　６号住居床上と住居掘り方及び住居出土遺物…40
第38図　６号住居竈と住居竈掘り方……41
第39図　７号住居床上と住居出土遺物（その１）……42
第40図　７号住居竈（Ａ竈・Ｂ竈）……43
第41図　７号住居竈掘り方（Ａ竈・Ｂ竈）と
住居出土遺物（その２）……44
第42図　７号住居掘り方と住居出土遺物（その３）……45
第43図　１号竪穴と出土遺物……46
第44図　２面（Ⅱ区）溝群……47
第45図　Ⅰ区２面の土坑・ピット群（その１）……48・49
第46図　Ⅰ区２面の土坑・
ピット群（その２）と出土遺物……50・51
第47図　Ⅰ区２面の土坑・ピット群（その３）……53・54
第48図　Ⅰ区２面の土坑群（その４）と
Ⅱ区２面の土坑・ピット群（その１）……55
第49図　Ⅱ区２面の土坑・ピット群（その２）……56
第50図　Ⅱ区２面遺構外の出土遺物……57
第51図　１面全体図と出土遺物……58
第52図　１・２号道……57・58
第53図　２面全体図……61
第54図　１号住居床上と住居出土遺物（その１）……62
第55図　１号住居竈・竈掘り方と
住居出土遺物（その２）……63
第56図　１号住居掘り方……64
第57図　２号住居床上と住居出土遺物……65
第58図　２号住居竈・竈掘り方・住居掘り方……66
第59図　１・２・３号溝……67～68
第60図　２面の土坑群（その１）……70
第61図　２面の土坑群（その２）……71
第62図　２面南東部遺構外の出土遺物……72

表目次

表１　周辺遺跡一覧……８
表２　Ⅰ・Ⅱ区土坑・ピット土層観察記録一覧……50
表３　Ⅰ区２面土坑一覧……52
表４　Ⅰ区２面ピット一覧……54
表５　Ⅱ区２面土坑・ピット一覧……54
表６　２面土坑一覧……72
表７　上大塚南原遺跡出土遺物観察表（その１）……77
表８　上大塚南原遺跡出土遺物観察表（その２）……78
表９　上大塚南原遺跡出土遺物観察表（その３）……79
表10　上大塚南原遺跡出土遺物観察表（その４）……80
表11　上大塚南原遺跡出土遺物観察表（その５）……81
表12　上大塚南原遺跡出土遺物観察表（その６）……82
表13　上大塚南原遺跡出土遺物観察表（その７）……83
表14　上大塚南原遺跡出土遺物観察表（その８）……84
表14　上大塚南原遺跡出土遺物観察表（その８）……85
表15　鮎川藤ノ木遺跡出土遺物観察表（その９）……86
表16　鮎川藤ノ木遺跡出土遺物観察表（その10）……87
表17　未掲載遺物一覧（その１）……87
表18　未掲載遺物一覧（その２）……88

本文中写真

写真１　漆紙文書赤外線写真……75

写真図版目次

口　絵　須恵器坏と漆紙文書
図版１　調査区全景　調査区全景
図版２　１面全景　３号土坑全景
図版３　Ⅰ区中央部遺物包含層遺物出土状況
Ⅰ区中西部遺物包含層遺物出土状況
遺物包含層遺物出土状況　遺物包含層遺物出土状況
遺物包含層漆紙文書入り須恵器坏
遺物包含層漆紙文書出土状況
遺物包含層遺物（＃＃）出土状況　遺物包含層焼痕跡断面
図版４　遺物包含層出土遺物（1）
図版５　遺物包含層出土遺物（2）
図版６　遺物包含層出土遺物（3）
図版７　遺物包含層出土遺物（4）
図版８　遺物包含層出土遺物（5）
図版９　遺物包含層出土遺物（6）
図版10　２面航空写真
１号住居全景及び出土遺物　１号住居掘り方
２号住居床上全景及び出土遺物　２号住居掘り方全景
図版11　２号住居竈遺物出土状況　２号住居竈掘り方全景
３号住居床上全景　３号住居掘り方全景
３号住居竈全景　３号住居竈掘り方全景
３号住居竈煙道断割状況　３号住居貯蔵穴
図版12　４号住居全景及び遺物出土状況　４号住居掘り方
４号住居竈全景及び遺物出土状況　４号住居竈掘り方
５号住居全景　５号住居床面除去状況
５号住居竈　５住居竈掘り方
図版13　６号住居全景及び遺物出土状況　６号住居掘り方全景
６号住居竈遺物出土状況　６号住居竈掘り方
７号住居全景　７号住居掘り方全景
７号住居竈　７号住居柱穴
図版14　７号住居Ａ竈　７号住居Ａ竈掘り方
７号住居Ａ竈煙道部分
７号住居Ｂ竈煙道出口部分
７号住居Ｂ竈　７号住居Ｂ竈掘り方
１号竪穴覆土中礫出土状況　１号竪穴全景
図版15　Ⅰ区２面北西部土坑群　Ⅰ区２面中部２号住居付近土坑群
Ⅰ区２面南部土坑群
Ⅰ区２面東部（工事用道路下）土坑群
Ⅰ区２面１～３号土坑分布状況　2-15号土坑全景
2-16号土坑全景　2-41号土坑・2-44号ピット全景
図版16　2-42・５号土坑全景　2-44号土坑全景(南より)
2-45・46号土坑全景　2-60号土坑全景(東より)
2-61号土坑土層断面　2-67号土坑土層断面（南より）
Ⅰ区２面作業風景　ⅠⅠ区調査区西壁土層断面
図版17　１号住居出土遺物　２号住居出土遺物（1）
図版18　２号住居出土遺物（2）
図版19　２号住居出土遺物（3）　３号住居出土遺物（1）
図版20　３号住居出土遺物（2）　４号住居出土遺物（2）
図版21　４号住居出土遺物（2）　５号住居出土遺物
６号住居出土遺物（1）
図版22　６号住居出土遺物（2）　７号住居出土遺物（1）
図版23　７号住居出土遺物（2）　１号竪穴出土遺物
遺構外出土遺物　Ⅱ区１面出土遺物
図版24　１面全景（南より）
１号道全景（東より）　１号道西端土層断面（東より）
２号道全景（西より）　２号道東端土層断面（西より）
図版25　２面航空写真
１号住居遺物出土状況　１号住居全景
１号住居竈遺物出土状況　１号住居竈掘り方
図版26　１号住居ローム塊土層断面　１号住居掘り方全景
２号住居全景　２号住居掘り方全景
２号住居竈遺物出土状況　２号住居竈掘り方
１号溝全景　１・３号溝調査風景
図版27　１・３号溝全景　２号溝全景
３・４号土坑　７・８・16号土坑
14号土坑　20号土坑
図版28　１号住居出土遺物　２号住居出土遺物（1）
図版29　２号住居出土遺物（2）２面東部出土遺物
遺構外出土遺物
工事中の鮎川藤ノ木遺跡　竣工後の上大塚南原遺跡

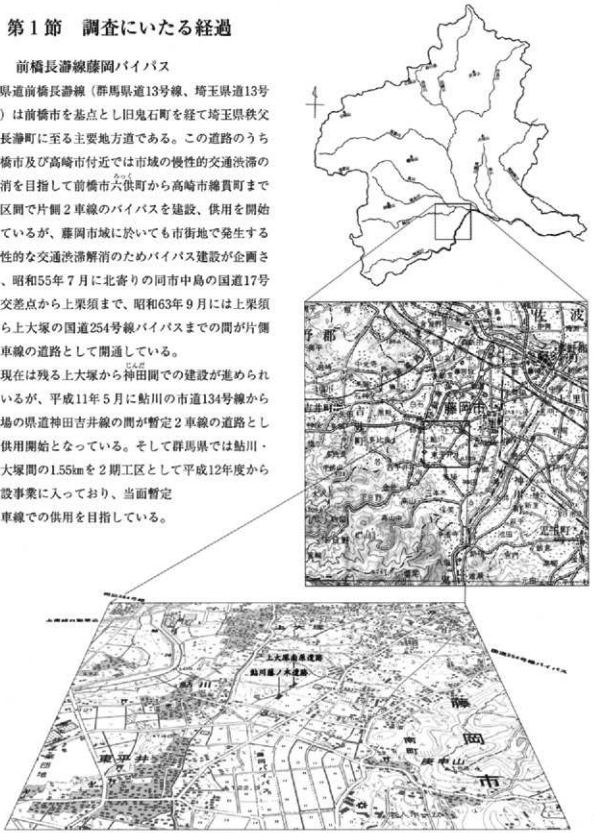
第１章　発掘調査のはじまりとその経過

第１節　調査にいたる経過

１　前橋長瀞線藤岡バイパス

県道前橋長瀞線（群馬県道13号線、埼玉県道13号線）は前橋市を基点とし旧鬼石町を経て埼玉県秩父郡長瀞町に至る主要地方道である。この道路のうち前橋市及び高崎市付近では市域の慢性的交通渋滞の解消を目指して前橋市六供（ろっく）町から高崎市綿貫町までの区間で片側２車線のバイパスを建設、供用を開始しているが、藤岡市域に於いても市街地で発生する慢性的な交通渋滞解消のためバイパス建設が企画され、昭和55年７月に北寄りの同市中島の国道17号線交差点から上栗須まで、昭和63年９月には上栗須から上大塚の国道254号線バイパスまでの間が片側２車線の道路として開通している。

現在は残る上大塚から神田（こうだ）間での建設が進められているが、平成11年５月に鮎川の市道134号線から矢場の県道神田吉井線の間が暫定２車線の道路として供用開始となっている。そして群馬県では鮎川・上大塚間の1.55kmを２期工区として平成12年度から建設事業に入っており、当面暫定２車線での供用を目指している。



第１図　上大塚南原遺跡・鮎川藤ノ木遺跡位置図　（国土地理院「宇都宮」（1/20万）、「高崎」（1/2.5万）使用）

(S=1/1600)

第２図の１　前橋長瀞線バイパス路線と試掘調査トレンチ配置図

２　試掘調査から本調査へ

前橋長瀞線の藤岡バイパス２期工区の建設に伴って藤岡土木事務所長の協議を受けた群馬県教育委員会文化課(以下「文化課」)とする)は試掘調査の必要を認め、遺構検出面認定、遺構の有無と出土遺物確認を目途に、鮎川地内では平成14年９月18・19日に対象地約9,600㎡の凡そ2.6％、上大塚地内では対象地約9,500㎡の凡そ3.2％に対して平成16年１月14・15日、同年12月９日及び平成17年７月22日の３回に分けて土木機械の使用を伴うトレンチ掘削法による試掘調査を実施している。この結果、遺構・遺物は多くのトレンチで確認できなかったものの、平成14年度調査で13トレンチ中２本のトレンチから古代の溝１条とピット３基と土師器片２片を、平成15年度調査では18トレンチ中６本のトレンチからカマドと思われる焼土遺構４ヵ所と近世以降の溝３条、平成17年度調査ではピット５基と竪穴住居状の落ち込み１箇所を確認したのである。

文化課では一連の試掘成果に鑑みて平成14年度試掘調査範囲の一部（鮎川地内960.51㎡）と平成15年度調査範囲の一部及び平成17年度試掘調査範囲（上大塚地内1,990.90㎡）に対して本調査が必要という所見を藤岡土木事務所長に通知する一方で、平成17年７月29日に財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下「事業団」とする）に対して調査依頼を行っているが、同年８月４日の試掘所見を受けた藤岡土木事務所は同年９月５日に事業団に対し本調査を依頼し、同月15日、事業団による上大塚南原遺跡、及び鮎川藤ノ木遺跡に対する発掘調査の実施が決まることとなったのである。

第２節　発掘調査の経過

発掘調査は平成17年11月１日より平成18年１月31日にかけて実施したが、以下にその概要を記す。尚、記載していないが調査開始時点で既に周囲のバイパス建設工事は進行しており、工事側と緊密に連絡を取り年作業を実施した。また調査期間中は例年にない寒波に襲われた。

（平成17年）

11月１日　担当２名着任。

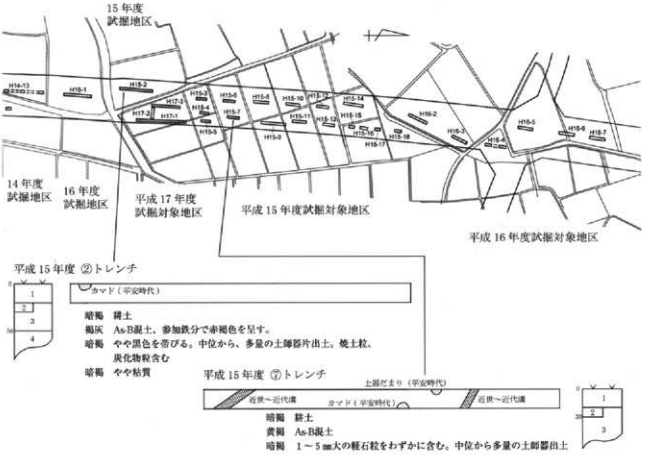
４日　現地打ち合わせ。上大塚南原遺跡（以下本節では「南原」とする）の東端に工事用道路を確保し、後日切り替えして同部分を調査する旨を約す。

９日　現地事務所設置。

11・12日　発掘資材搬入。

14日　南原Ⅱ区北寄りから機械による表土掘削開始。（南原１面調査開始）

15日　安全対策として南原調査区木杭等を用いた柵を囲繞。



第２図の２　前橋長瀞線バイパス路線と試掘調査トレンチ配置図

16日　南原Ⅰ区（農道東側）・Ⅱ区（農道西側）遺構確認、Ⅱ区遺構掘削開始。

17日　南原Ⅱ区遺構記録（遺構図作図・写真撮影）開始。

18日　南原Ⅰ区遺構掘削開始。

22日　南原表土掘削完了。引き続き鮎川藤ノ木遺跡（以下本節では「藤ノ木」と標記する）で表土掘削（１面調査開始）開始。藤ノ木調査区を木柵等で囲繞。

25日　藤ノ木１面遺構掘削、遺構記録開始。表土掘削完了。

30日　高所作業車使用により南原・藤ノ木全景写真撮影。

12月１日　藤ノ木２面への建設機械による掘削開始。遺構確認作業着手。

５日　藤ノ木２面遺構掘削、記録作製開始。

６日　南原２面、機械掘削開始。この後暫く１・２面間の遺物包含層掘削。

12日　南原Ⅱ区で遺構掘削作業開始。

13日　南原Ⅰ区遺構掘削開始。

15日　南原Ⅱ区、遺構記録作製開始。

26日　南原Ⅰ区遺物包含層遺物取上げ開始。漆紙文書発見さる。

27日　平成17年作業終了。

（平成18年）

１月５日　作業再開。

６日　南原Ⅰ区遺構記録開始。

18日　南原・藤ノ木空中写真撮影。藤ノ木第２面完了。即日引き渡し。

19日　安全柵移設。工事用道路西側に移設し旧道下掘削開始。隣接部の状況に鑑み２面のみの調査とする。

23日　南原Ⅰ区工事用道路下（以下「道路下」とする）遺構確認作業開始。

25日　道路下遺構掘削開始。南原Ⅱ区７号住居部分拡張作業着手。
26日　道路下遺構記録作製開始。
30日　南原（道路下・Ⅱ区）空中写真撮影。
31日　南原第２面調査完了。引渡し。
２月１日　資材搬出。
２日　現場事務所撤去。

第３節　発掘調査の方法

１　区域の区分と設定

① 上大塚南原遺跡の調査区は、調査区南西寄りを走る農道（市道5138）を境に以東を「Ⅰ区」、以西を「Ⅱ区」とした。「グリッド」は設定しなかった。

また鮎川藤ノ木遺跡は調査範囲が限定的だったため区域を区分することはなく、「グリッド」も設定しなかった。

② 尚、出土遺物は取り上げの都合上、遺跡或いは区に於ける所在方向や、調査前の旧状等を記載したものもある。

２　遺跡略号と遺構番号

① 上大塚南原遺跡の遺跡略号は「KOM」、鮎川藤ノ木遺跡の遺跡略号は「AYF」である。

② 遺構番号は原則として遺構の種別毎に通し番号で付し、複数面に有るものは区・面、ハイフォン（－）、番号・遺構種別の順で表記した。
（例　Ⅰ区１面１号溝：Ⅰ１－１号溝、）

３　掘削と断面観察

① 表土及び調査面間の層の掘削は、調査の効率化を図るため掘削機械を使用した。

② 遺構の掘削は人力で行ったが、遺物包含層の掘削は掘削機械を併用した。

③ 遺構断面の観察は適宜行った。

４　記録

① 遺構などの記録は、測量と写真撮影によった。

② このうち測量は航空写真測量と地上測量を併用し、適宜１/10、１/20、１/40、１/100、１/200縮尺の実測図を作成した。

③ 実測図には遺跡名、図名称・縮率・実測者・レベル高等を併記した。

④ 写真撮影はプローニ及び35㎜のモノクロ及びカラーフィルムを用いて適宜行い、空中写真撮影も委託により実施した。

５　出土遺物

① 出土遺物は出土位置を記録し、適宜写真撮影を行って取り上げ、遺構毎、種別毎に分別して収納ケースに保管した。

② 漆紙文書は乾燥させないようにした。

③ 出土遺物の洗浄及び注記については、調査終了後委託して当該作業を実施した。

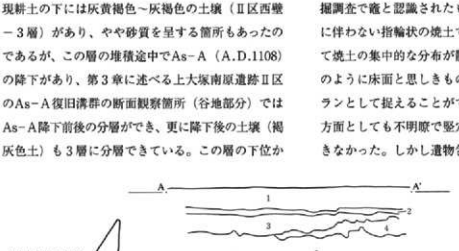
第３図　調査区範囲と調査区の設定　(S=1/1000)

第4節　基本層序

発掘調査開始以前の調査区付近は田畠の区画に伴う段差があるものの、全体としては北側に緩やかに傾斜する地形であった。しかし発掘調査によって上大塚南原遺跡中程に東西走行の谷地形が確認され、鮎川藤ノ木遺跡南西部では下位面が表出するなど凹凸があって、土層堆積にも変化が見られた。しかし大半の地域では近似した堆積状況が見られたため、上大塚南原遺跡Ⅱ区西壁土層断面（以下「Ⅱ区西壁」とする）を例として標準的な層序を示すこととする。

本遺跡の基盤層は次章に述べるように藤岡台地形成層（砂礫層）であり、この上に藤岡粘土層が乗るのであるが、今回調査区域の大方の遺構確認面、遺構の壁・底面の土壌は概ね藤岡粘土層に含まれるものであった。ところで表層は褐灰色の土壌で現耕作土（Ⅱ区西壁－1）であるが、その下位には乾田耕作に伴う酸化鉄の凝集層（Ⅱ区西壁－2）も見られた。現耕土の下には灰黄褐色～灰褐色の土壌（Ⅱ区西壁－3層）があり、やや砂質を呈する箇所もあったのであるが、この層の堆積途中でAs－A（A.D.1108）の降下があり、第3章に述べる上大塚南原遺跡Ⅱ区のAs－A復旧溝群の断面観察箇所（谷地部分）ではAs－A降下前後の分層ができ、更に降下後の土壌（褐灰色土）も3層に分層できている。この層の下位からは粘性の強い土壌の堆積層となるが、As－B（A.D.1108降下）を含む黒褐色粘質土（Ⅱ区西壁－4層）が堆積し、その下位に平安時代と思しき時期の遺物包含層となる灰褐色～黒褐色を呈する粘質土（Ⅱ区西壁－5層）が残されている。更に遺物包含層の下位には暗い褐灰色～黒褐色を呈する粘質土（Ⅱ区西壁－7層）が在って、漸移的に浅黄色～黄褐色を呈する粘質土（Ⅱ区西壁－8層）に変化している。この土壌はロームに比定されるが、これは鮎川藤ノ木遺跡南西部に表出する砂礫層上に見られるローム質土壌の上位層と見られるものである。

尚、Ⅱ区西壁－5層（遺物包含層）中には指輪状の平面形態を成す焼土が所々に見られた。土壌が粘土質のため焼土化し易いため良く残っていたのであるが、多くは20頁に示したようなもので、竪穴住居の煙道と特定できた箇所は多くなかった。そして試掘調査で竈と認識されたものの多くはこうした住居に伴わない指輪状の焼土であった。また断面に於いて焼土の集中的な分布が散見され、Ⅱ区西壁－6層のように床面と思しきものも見られたが、何れもプランとして捉えることができず、床面、或いは掘り方面としても不明瞭で竪穴住居と認定することはできなかった。しかし遺物包含層中に何軒かの住居の在った可能性は否定できないので記しておく。



1：褐灰色砂質土（10YR6/1）：現耕作土
2：褐灰色砂質土（10YR5/1）：酸化鉄含む。現代の金床
3：灰黄褐色土（10YR4/2）：As-A・As-B混入
4：黒褐色粘質土（10YR2/2）：As-B混入。
5：灰褐色粘質土（7.5YR4/2）：やや多くの4層土混入。遺物包含層。住居覆土か
6：灰褐色粘質土（5YR5/2）：浅黄色土（2.5Y7/3）小ブロックとに近い黄褐色土（2.5Y6/3）混入。住居床か
7：褐灰色粘質土（7.5YR4/1）：8層土の小ブロック混入
8：浅黄色粘質土（2.5Y7/3）：7層土の小ブロック入る

第4図　上大塚南原遺跡Ⅱ区西壁の土層断面（S=1/60）

第２章　遺跡を取り巻く環境

第１節　地理的・地質的環境

上大塚南原遺跡と鮎川藤ノ木遺跡は群馬県南部の藤岡市街地の南西部に位置する上大塚及び鮎川地内、群馬県庁（前橋市）の南南西27㎞、藤岡市役所の南西３㎞ほどの地点に位置している。藤岡市（平成18年１月に藤岡市、多野郡鬼石町が合併）は群馬・埼玉県境に在る人口71,113人（平成18年５月１日現在）の地方都市であり、東は埼玉県児玉郡上里町、同郡神川町、南に多野郡神流町、埼玉県秩父市、西に多野郡吉井町、甘楽郡下仁田町、同郡甘楽町、北に高崎市（旧高崎市、多野郡新町）と接している。概して市域の北寄りは平坦地であるが大半は山間地となっており、群馬、埼玉の県境である。市域の南から東にかけては神流川が東～北流し、市南部の旧鬼石町域で三波石で有名な三波川が東流して流れ込む。また市北側には北から来る烏川とこれに西から合流する鏑川が東流するが、鏑川には市南西の日野地区から北流する鮎川が合流する。

上大塚南原、鮎川藤ノ木両遺跡は藤岡市北寄りの平坦地、藤岡台地上に立地する。藤岡台地（Fj）は４～２万年前に形成されたと考えられる河川成の礫層群で、上位にシルトや粘土で構成される藤岡粘土層が乗っている。両遺跡の大半は藤岡粘土層中での調査となったが、鮎川藤ノ木遺跡の南西隅では礫層が表出していた。何れも新生代第三期後期の層で、礫岩、砂岩、シルト岩なる板鼻層（It）が両遺跡の東側に在る庚申山や南の東平井に、これより古い原市層（Hi）が庚申山の南端部に見られる。また両遺跡西側の鮎川沿いは沖積層（A）であり、これに伴う自然堤防堆積物（Nl）も見られる。

さて、上大塚南原、鮎川藤ノ木両遺跡の位置する付近は農村地帯であるが、住宅街も形成されつつあり、工場も見られる。両遺跡は集落からやや離れた位置に在って田畑に囲まれており、上大塚遺跡の東側には特産品である藤岡瓦の関連施設も見える。地域は近世脇往還であった現在の国道254号線から南に入った閑静な地域であったが、北西に上信越道が開通し、北に国道254号線のバイパスが整備され、南には県道神田吉井線のバイパスが開通して一部供用開始となっている前橋長瀞線バイパスに接続するなど、この20年ほどの間に道路整備が著しく進み、昔日の面影を残しつつも景観が一変しつつある。

第５図　遺跡周辺の地質図　（国土地理院「高崎」と「群馬県10万分の１地質」図を加工）

第2節　歴史的環境

現時点で旧石器時代の遺跡は藤岡市68包蔵地(11)に確認されているに過ぎない。

縄文時代では前期の集落が東平井中道B遺跡(51、諸磯c式)、中期の集落が白石大御堂遺跡(9)、緑埜水押遺跡(12)、大歩遺跡(29)、平地前(35、加曽利E式)、道者道遺跡(42、加曽利E式)で調査されている。一方、緑埜押出シ遺跡(13、堀之内式)や鍛冶谷戸遺跡(15、加曽利B式)では後期の墓域が調査され、晩期の遺構が大御堂遺跡(8)、遺物が白石大御堂遺跡(9)で確認されている。

弥生時代の遺跡は少なく、白石大御堂遺跡(9)で初頭の遺物が出土したものの、遺構は緑埜水押遺跡(12)や緑埜押出シ遺跡(13)で中期後半～後期のものが確認されているに過ぎない。

一方、古墳は上大塚南原・鮎川藤ノ木遺跡の南西に東平井古墳群が在り、74包蔵地(23)では位置を図示できなかったものも含め9基の古墳を、また平地前遺跡(35)でも23基の古墳を調査している。鮎川の対岸(西側)では白石古墳群が分布する。片や白石大御堂遺跡(9)で前期の遺物が出土するが、集落では緑埜水押遺跡(12)で中期の、鍛冶谷戸B遺跡(14)や道者道遺跡(42)で後期のものが調査されている。しかし水田等の耕作遺構は現段階では確認されていない。

律令期では奈良時代のものは周辺域でははっきりしないが、平安時代の集落遺跡が緑埜押出シ遺跡(13)、鍛冶谷戸B遺跡(14)、出口遺跡(19)、大歩遺跡(29)、官正前遺跡(41)、道者道遺跡(42)、薬師遺跡(48)、東平井中道B遺跡(51)、東平井遠東遺跡(54)、鮎川上天水遺跡(56)、東平井天水遺跡(58)、矢場境Ⅱ遺跡(60)、六反田遺跡(69)などで確認され、平安時代末のAs－B降下時点(A.D.1108)の水田址が緑埜地区水田址群(11)、藤岡平地区水田址天水地点(57)や、同水田址下田地点(59)などで調査されている。

中世の遺跡は本調査区南方の東平井地区を中心に多い。鎌倉街道関連遺構が傳鎌倉街道関連遺跡(50)で調査され、大御堂遺跡(8)では14世紀の建物群が、東平井中道A遺跡(44)、薬師遺跡(48)、東平井中道B遺跡(51)でも中世の集落、東平井遠東遺跡(54)では溝が調査されている。一方、白石大御堂遺跡(9)では13世紀中頃から14世紀と考えられる園池を伴う寺院址が調査され、寺院に伴う火葬墓、土葬墓、火葬土坑も確認されている。埋葬関連遺跡としては鍛

第6図　周辺遺跡分布図　(国土地理院「高崎」加工し群馬県情報システムWEB版情報を加味)

冶谷戸B遺跡(14)で弘安9年(1287)銘の板碑を伴う集石墓、官正前遺跡(41)や東平井藤岡道A遺跡(53)で土壙墓、薬師遺跡(48)、平井中道B遺跡(51)では火葬墓や土壙墓が出ている。第6図の範囲外だが、鮎川藤ノ木遺跡の南西3.2kmの藤岡市西平井には（関東管領）山内上杉氏の居城平井城があった。上大塚南原・鮎川藤ノ木遺跡の周辺では平井城の砦と認識される方75mで単郭の上大塚城(22)が、また上杉氏の家臣小林氏の居城と目される250×200mの囲郭式の鮎川城がある。

尚、薬師B遺跡(49)で溝が見付かるなど近世以降の遺跡も散見されている。

第1表　周辺遺跡一覧

No.	藤岡市遺跡No.	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	文献	備考
1		上大塚原遺跡						○		○		本報告書所収遺跡
2		鮎川藤ノ木遺跡						○		○		本報告書所収遺跡
3	第072	72号墳墳墓		○		○	○	○	○	○		
4	第039	39号墳墳墓		○		○	○	○				
5	第179	179号墳墳墓						○				
6	古154	(古墳)				○						昭和44年度調査
7	古155	(古墳)				○						
8	第305	大溝宝塔跡		○		○			○		(1)	14世紀の墓物群
9	第096	白石大洞宝塔跡		○	○	○			○	○	(2)	発掘を予ほ～14世紀の寺院址
10	第187	道下遺跡					○	○				昭和52・53年度砂利採取時市教委確認
11	第068	68号墳墳墓	○	○	○	○	○	○		○		
12	第100	縁禁光原遺跡		○		○		○			(3)	縄文中期、縄文中・後期集落
13	第099	縁禁押出ノ遺跡		○				○			(3)	縄文時代後期(堀之内)集落
14	第227	鹿沢谷戸B遺跡				○	○	○	○		(4)	古墳時代後期・平安時代集落
15	第102	鹿沢谷戸遺跡		○							(3)	縄文時代後期(加曽利B)集落
16	古209	(古墳)				○					(3)	
17	古210	(古墳)				○						
18	古212	(古墳)				○						
19	第191	出口遺跡						○			(5)	水田址
20	第070	70号墳墳墓		○								
21	城026	鮎川城							○		(6)	囲郭式。小林氏居城か
22	城027	上大塚城							○		(6)	平井城の砦
23	第074	74号墳墳墓		○		○	○	○				
24	古214	(古墳)				○						
25	第217	時沢遺跡				○		○				平成10年度調査
26	古215	(古墳)				○						
27	古216	(古墳)				○						
28	古217	金鶏ヶ塚				○						
29	第112	大歩遺跡		○				○		○	(7)	縄文時代中期、平安時代集落
30	第229	大歩B遺跡								○	(8)	中世小河川址西縁部、工業団地公園保存
31	古379	(古墳)				○						平成4年度調査、工業団地公園保存
32	古380	(古墳)				○						〃　〃　工業団地公園保存
33	古381	(古墳)				○						〃　〃　工業団地公園保存
34	古382	(古墳)				○						〃　〃　〃　〃
35	第230	平地原遺跡		○				○		○	(9)(10)	縄文時代中期(加曽利E式)集落、古墳群
36	古378	(古墳)				○						平成7・8年度調査
37	古410	(古墳)				○						
38	古409	(古墳)				○						
39	古422	(古墳)				○						
40	第087	87号墳墳墓					○	○	○			
41	第130	官正前遺跡						○	○		(11)	平安時代集落、中世土壙墓
42	第137	道者道遺跡						○	○		(12)	縄文時代中期(加曽利E式)集落跡
43	第181	181号墳墳墓						○	○			
44	第133	東平井中道A遺跡						○	○		(13)	中世集落
45	第180	180号墳墳墓		○				○	○			
46	第240	横沢口B遺跡		○							(8)	縄文時代中期(加曽利E式)土坑
47	第131	三反島遺跡		○					○	○	(7)	鉄鉱関近の焼打場造成跡
48	第132	薬師遺跡		○		○	○	○	○	○	(9)(10)(14)	平安時代集落、中世墓域
49	第241	薬師B遺跡								○	(8)	近世溝遺構
50	第222	藤縄舎宗道関連遺跡							○		(13)	渋道橋、藤舎街道関連遺構
51	第212	東平井中道B遺跡		○		○	○	○	○		(9)(10)(14)	縄文時代前期(諸磯c)、平安時代集落
52	第182	182号墳墳墓				○	○	○				
53	第221	東平井藤岡道A遺跡						○	○		(13)	中世土壙墓
54	第220	東平井道東遺跡					○	○	○		(13)	平安時代集落、中世溝
55	第183	183号墳墳墓		○		○	○	○			(15)	
56	第231	鮎川上大水遺跡						○	○		(13)	平安時代集落
57	第223	藤岡平地区水田址上天水地点						○			(13)	As-B下水田
58	第236	東平井天水遺跡						○			(13)	平安時代の溝、土坑など
59	第155	藤岡平地区水田址遺跡下田地区									(13)	As-B下水田
60	第156	矢場堀B遺跡						○	○		(12)	平安時代の井戸、土坑
61	第075	75号墳墳墓		○			○	○	○			
62	第077	77号墳墳墓		○		○						
63	第079	79号墳墳墓		○								
64	第095	95号墳墳墓		○		○						
65	第096	96号墳墳墓		○		○	○					
66	第097	97号墳墳墓		○		○	○	○				
67	古506	(古墳)				○						
68	古505	(古墳)				○						
69	第157	大反田遺跡						○			(12)	平安時代集落

第３章　発掘調査のはじまりとその経過

第１節　１面の遺構と遺物

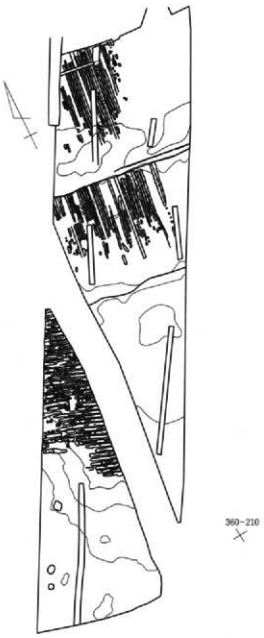
１　概要

上大塚南原遺跡の１面の遺構は面的には広い範囲で確認されたが、Ⅱ区南半部で時期不特定の土坑３基、Ⅰ区北半部で近世以降、Ⅱ区北半部で天明３年（1783）降下の溝を確認したに過ぎなかった。

尚、Ⅰ区東端は当初工事用道路とした。当該区域は隣接区域の状況と調査期間に照らして２面のみの調査としたが、機械掘削時に注意して観察したものの１面の遺構は認められなかった。

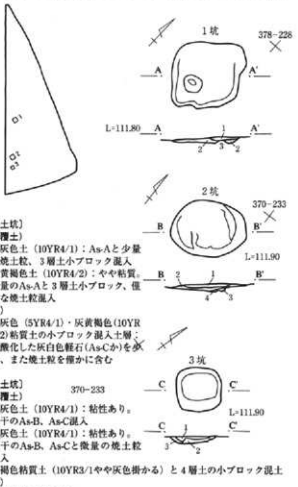
２　土坑　（第８図　図版２）

概要　Ⅱ区南半部でⅡ１－１～３号土坑の３基が確認



(S=1/500)

第７図　上大塚南原遺跡１面全体図



【１号土坑】
（土坑覆土）
１：褐灰色土（10YR4/1）：As-Aと少量の桃土粒、３層土小ブロック混入
２：灰黄褐色土（10YR4/2）：やや粘質。少量のAs-Aと３層土小ブロック、僅かな桃土粒混入
（地山）
３：褐灰色（5YR4/1）・灰黄褐色（10YR 5/2）粘質土の小ブロック混入土層；風化した灰白色軽石（As-C か）を多量、また桃土粒を僅かに含む

【２号土坑】
（土坑覆土）
１：褐灰色土（10YR4/1）：粘性あり。若干のAs-B、As-C混入
２：褐灰色土（10YR4/1）：粘性あり。若干のAs-B、As-Cと微量の桃土粒混入
３：黒褐色粘質土（10YR3/1やや灰色掛かる）と４層土の小ブロック混土
（地山）
４：１号土坑３層に同じ

【３号土坑】
（土坑覆土）
１：褐灰色土（10YR4/1）：粘性あり。少量のAs-C混入。
２：黒褐色粘質土（5YR2/1）：微量のAs-Cと3層土小ブロック混入
（地山）
３：１号土坑３層に同じ

(S=1/60)

第８図　１面の土坑群

されている。しかし何れの土坑も掘削意図を特定することはできなかった。

遺物　下位層の土師器片等が表出している以外、特段の出土遺物は認められなかった。

時期　覆土から何れも中世から近世の所産と認識されるが、１号土坑は近世後期以降の可能性があり、２号土坑は中世の可能性がある。

規模　１号土坑　径：117×105㎝　深さ：10㎝

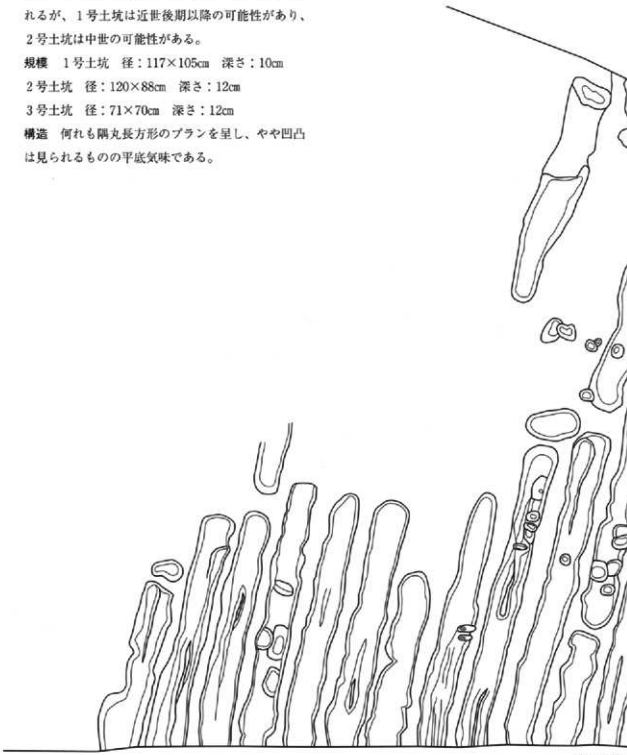
２号土坑　径：120×88㎝　深さ：12㎝

３号土坑　径：71×70㎝　深さ：12㎝

構造　何れも隅丸長方形のプランを呈し、やや凹凸は見られるものの平底気味である。

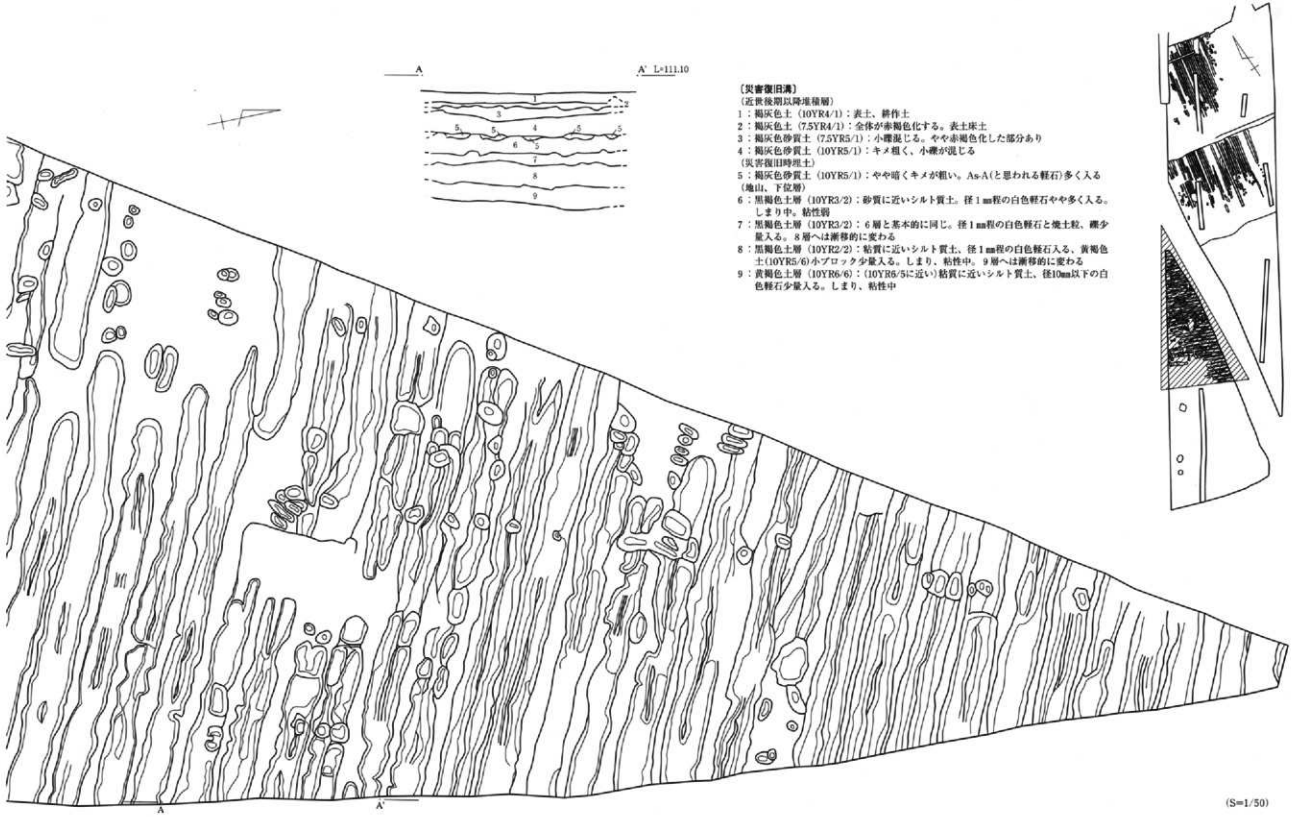
3　災害復旧溝群　（第９図　図版２）

概要　Ⅱ区北半部ではその殆どを埋めるように溝群が確認されているが、これらの溝群は形態的に畠のサクとは認められず、As－A降下後の災害復旧作業



(S=1/50)

第９図の１　災害復旧溝群



第９図の２　災害復旧溝群

に伴う、所謂天地返しの作業痕跡と判断されるものであった。こうした復旧遺構は本県玉村町の曲戸遺跡などに調査例が知られているが、本遺跡のものの遺存状況は全体として良好とは言い難いものであった。また、その状態はあまり良好ではなかったものの鋤先痕も確認されているのであるが、その観察から掘削作業は東方を向きながら行っていったものと想定され、遺構の密度から推して区画全体を意識した掘削であることが窺われた。

遺物　下位層の土師器片等の表出するものは見られたものの、特段の出土遺物を認めることはできなかった。

時期　覆土に多量のAs−Aが多く混入しているため、As−Aの降下した天明3年(1783)から余り経過しない時期の所産と判断される。

規模　範囲：23.5×9.4m

溝幅：52cm以下

深さ：7cm以下

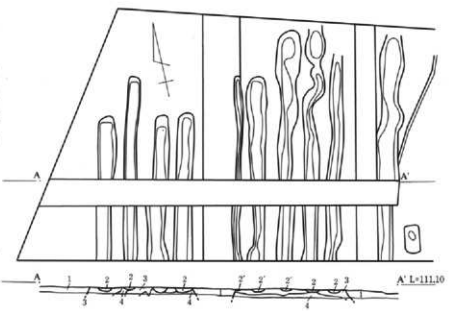
構造　上述のように本溝群(災害復旧遺構)の遺存状況は良好ではなく、断片的にしか残らない箇所があり、或いは鋤先痕の連続としてのみ確認される箇所も見られたのである。従って、その構造を明確することはできなかったのであるが、以下に述べるような若干の所見を得ることができた。

各溝の走行は直線的であり、その方向は、凡そN→Wで66°付近を向くものであった。また個別の溝の側壁のラインはやや蛇行するような形状を示していたが、一方で溝の底面は平底気味の形態を呈するものであった。

しかし鋤先痕の残る箇所も散見され、概して凹凸が目立つような印象であった。

尚、鋤先痕の観察から各溝は左右の2列に掘削されており、この2列の鋤先痕を1単位として1条の溝が掘削されていることが認められたのである。尤も1列毎に掘り進めたものか、左右交互に掘り進めたものかを特定することはできなかったのであるが。掘削時に作業者は東を向いていることが確認されたが、恐らくは西方向に下がりながら掘削していったものと推定される。

また、それぞれの溝と溝の間隔は十数cm以下と狭いものであり、箇所によっては重複するところも若干見られる。こうした状況から掘削（火山災害の復旧作業）時点では畠を区切ったのではなく筆全面を対象に作業が行われていたことが窺われるのである。



〔畠（サク状遺構）〕
（現代耕作土ートレンチャー掘削痕ー）
1：2～4層土や浅黄色（2.5Y7/4）・黄橙色（10YR7/6）ロームの小ブロック混土層
（近世後期以降サク埋土）
2：暗灰黄色土（2.5Y4/2）：粘性あるがやや砂質。As-Aをやや多く混入する
2′：2層だがAs-A少量
（地山）
3：暗灰黄色土（2.5Y5/2）：粘性あり。上位にAs-A若干混入し、下位に微量の焼土土粒や明黄褐色土（2.5Y7/6）小ブロック混入
4：黄灰色粘質土（2.5Y4/1）：風蝕化した軽石（As-Cか）を若干混入し、3層に近い位置で3層土小ブロック混入

(S=1/50)

第10図　畠（サク状遺構群）北部部分・断面図

4　畠（サク群）　（第10・11図　図版２）

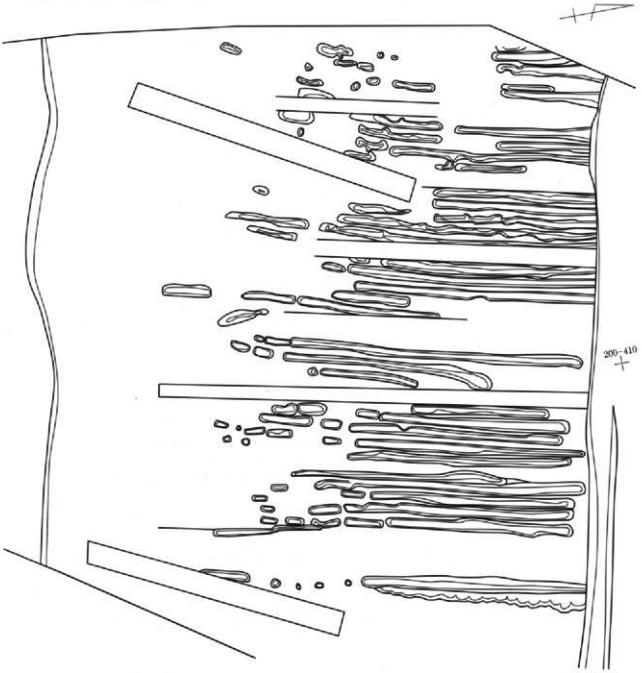
概要　Ⅰ区北半部には畠のサクと認識される溝群が確認されている。サクとサクの間隔は０～30cmと狭く、また覆土もAs−Aの多少が見られるため、これらの溝は並存したものではなく何回かの掘り直しが行われたものと判断される。

またこれらの溝群は概ね南北に連なる３筆の区画に別けられるものと判断される。

遺物　下位層の土師器片等の表出などは見られたが、図示すべきような出土遺物を認めることはできなかった。

時期　覆土の状態及び想定されるサクの長さや区画の規模から、本畠は近世以降の所産と判断される。

尚、全てのサクの覆土を観察することはしなかったのであるが、As−Aの多いものは、As−A降下時点に近い時期のものである可能性が高い。一方、覆



第10図の１　畠（サク状遺構群）

土は明らかに現在のものではないので、圃場整備前までの耕作の痕跡として認識される。

規模　範囲：14.7×29m

１群（北）　幅：9.4～10.9m　残長：9.0m

２群（中）　幅：6.5～7.0m　残長：7.7m

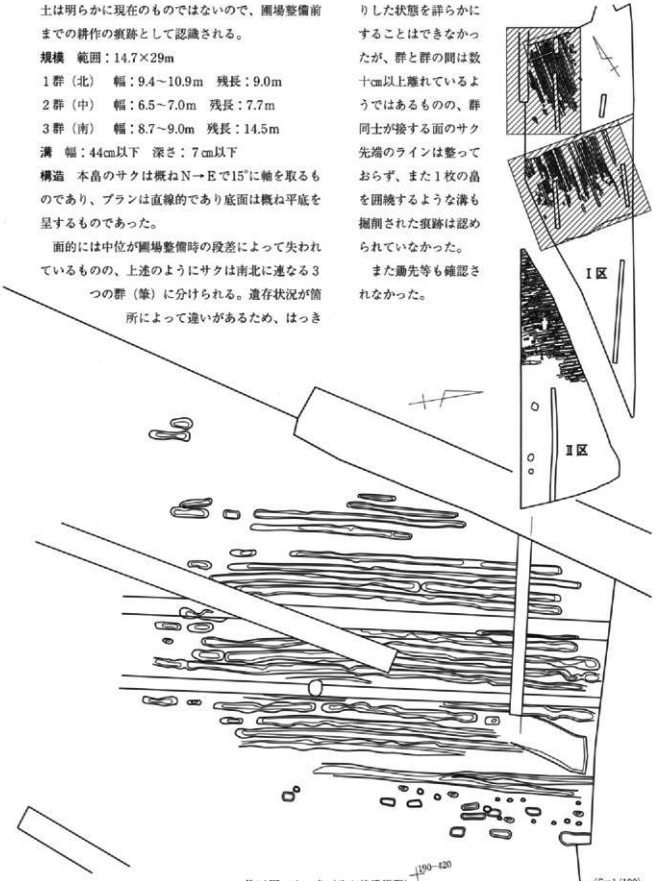
３群（南）　幅：8.7～9.0m　残長：14.5m

溝　幅：44cm以下　深さ：７cm以下

構造　本畠のサクは概ねN→Eで15°に軸を取るものであり、プランは直線的であり底面は概ね平底を呈するものであった。

面的には中位が圃場整備時の段差によって失われているものの、上述のようにサクは南北に連なる３つの群（筆）に分けられる。遺存状況が箇所によって違いがあるため、はっきりした状態を詳らかにすることはできなかったが、群と群の間は数十cm以上離れているようではあるものの、群同士が接する面のサク先端のラインは整っておらず、また１枚の畠を囲繞するような溝も掘削された痕跡は認められていなかった。

また畝先等も確認されなかった。



第10図の２　畠（サク状遺構群）

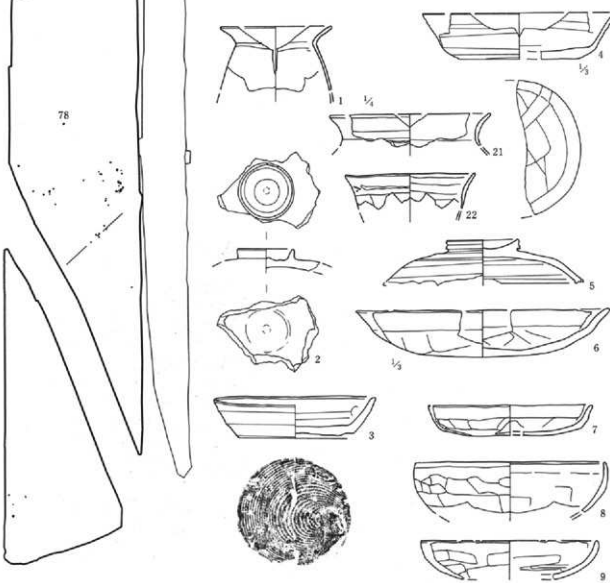
第２節　遺物包含層

１　概要（第11～16図、ＰＬ３～９）

上大塚南原遺跡では１面と２面の間に遺物包含層が遺存していた。その遺物分布には濃淡があり、Ⅰ区では中央部に濃く、その北西と南は薄く、北、南、東河の区域では浅薄であった。一方Ⅱ区では中西～南西部に分布が厚いものの、他の区域では薄かった。

また、包含層中には遺物の他に第16図に示したような竪穴住居の煙道と思しき焼土や、焼土塊の分布も見られたが、幾つかが竪穴住居に付随することが確認されたものの多くは付属する遺構を確認することができないものであった。

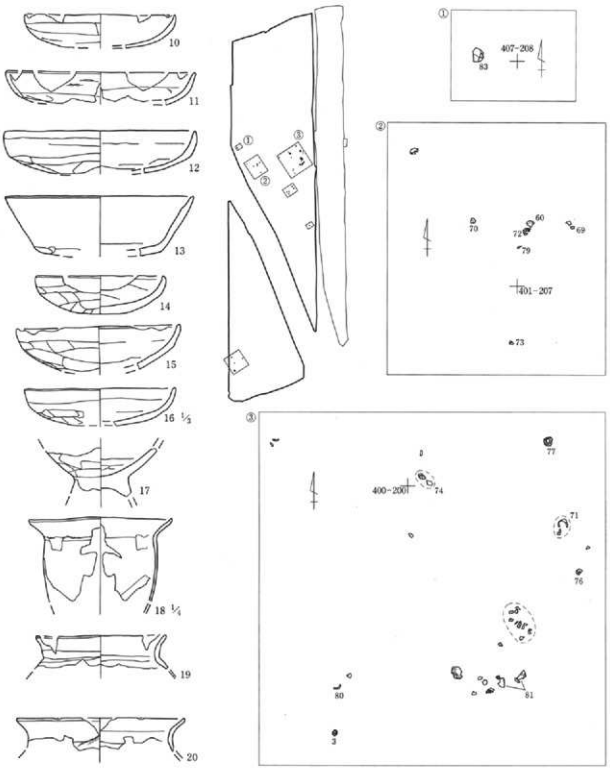
尚、本来ならば本包含層は人力掘削とし、詳細な遺構分布図等を作成すべきではあるが、調査期間に等に照らして機械掘削を伴っての調査とせざるを得ず、充分な調査ではなかったことを記しておきたい。



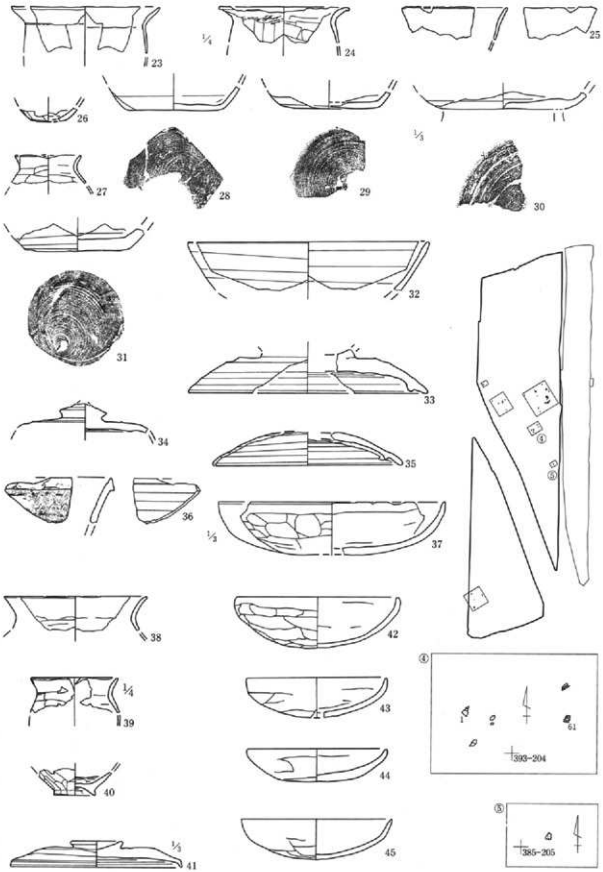
第11図　遺物包含層出土遺物分布図（S=1/500）と出土遺物（その１）

2　時期

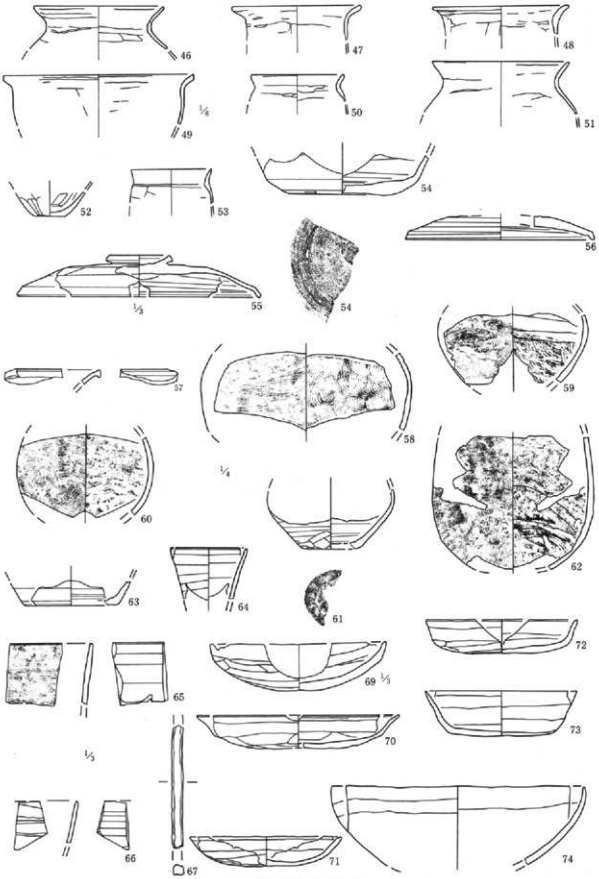
本包含層の形成期は明確にはできなかったが、出土遺物が古墳時代後期から平安時代にかけての所産であり、一部に後述するように竪穴住居の煙道が遺存していること。及び包含層中にAs－Bが含まれていることなどの状況に鑑み、概ね奈良時代終わりから平安時代頃に形成されたものとして認識するものであった。



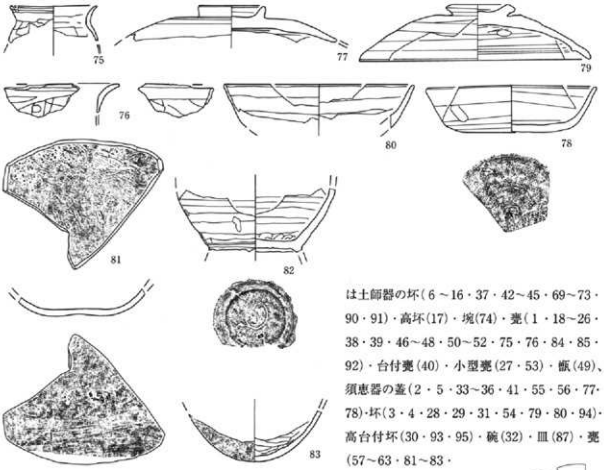
第12図　遺物包含層出土遺物（その2）と詳細分布図（その1）



第13図　詳細分布図（その２）と遺物包含層出土遺物（その３）



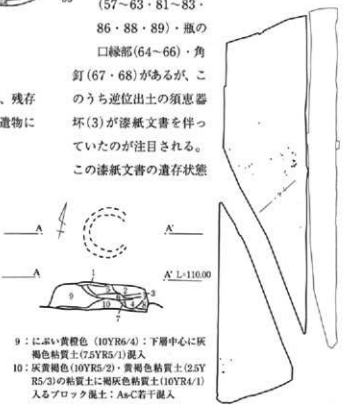
第14図　遺物包含層出土遺物（その４）



第15図　遺物包含層出土遺物（その5）

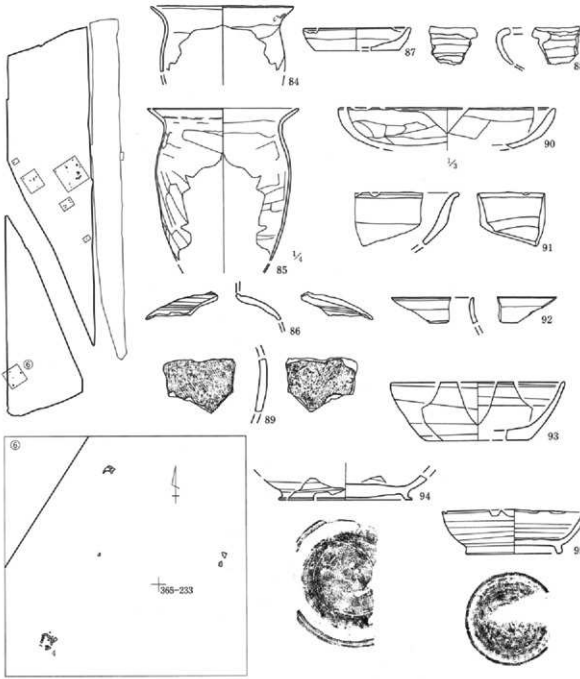
3　出土遺物

本包含層の出土遺物は土師器片を中心とし、残存率の高いものはあまりなかったが、取上げた遺物には土師器の坏（6～16・37・42～45・69～73・90・91）・高坏(17)・埦(74)・甕(1・18～26・38・39・46～48・50～52・75・76・84・85・92)・台付甕(40)・小型甕(27・53)・甑(49)、須恵器の蓋(2・5・33～36・41・55・56・77・78)・坏(3・4・28・29・31・54・79・80・94)・高台付坏(30・93・95)・碗(32)・皿(87)・甕(57～63・81～83・86・88・89)・瓶の口縁部(64～66)・角釘(67・68)があるが、このうち逆位出土の須恵器坏(3)が漆紙文書を伴っていたのが注目される。この漆紙文書の遺存状態



【遺物包含層遺存焼土】
（焼土層）
1：褐灰色粘質土（7.5YR4/1）：弱い焼土化。少量の焼土粒・微量の炭化物粒含む
2：褐灰色粘質土（7.5YR4/1）：弱い焼土化
3：褐灰色粘質土（5YR4/1）：弱い焼土化。焼土粒混入
（下位層1）
4：灰黄褐色粘質土（10YR5/2）：黒褐色(10YR3/1)・灰白色(2.5Y7/1)粘質土粒、黄橙色ローム粒(10YR7/8)含む。
5：灰黄褐色(10YR5/2)・にぶい黄橙色(10YR6/4)粘質土の混土：少量の焼土粒と6層土小ブロック混入
（準焼土層）
6：にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3)に褐灰色粘質土(7.5YR4/1)入るブロック混土：下層中心に焼土粒多し
（下位層2－自然堆積層）
7：4・10層土の混土
8：褐灰色粘質土（10YR4/1）：As-C若干混入
9：にぶい黄橙色（10YR6/4）：下層中心に灰褐色粘質土(7.5YR5/1)混入
10：灰黄褐色(10YR5/2)・黄褐色粘質土(2.5YR5/3)の粘質土に褐灰色粘質土(10YR4/1)入るブロック混土：As-C若干混入

第16図　遺物包含層遺存焼土



第17図　遺物包含層出土遺物（その6）と詳細分布図（その3）

はさして良好ではないが、強い粘質土に付着し、発見した時点で坏から外れた状態（PL3－右側3段目）で出土した。尚、漆紙文書については巻末第5章に高島英之による鑑定所見を掲載した。

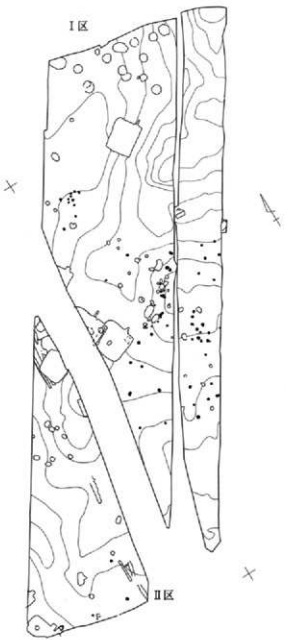
4　出土地域

本包含層出土遺物の分布状態は本節の当初に記載したが、このうち取り上げた遺物ではⅠ区の南部からは5・37～41が出土しているが後4者は下位層からの出土遺物である。また中部の上位層からは6～36、同下位層からは42～68、Ⅰ区全体としては69～83がある。これに対しⅡ区からは84～95が出土しているが、このうち87～89が南部、90～93は中部、94は北部、95は下位層からの出土遺物である。

第３節　２面の遺構と遺

１　概要

上大塚南原遺跡の２面ではⅠ・Ⅱ区を合わせた調査区の南部西寄りから北部東寄りかけて谷地形が通っていたが、谷地形の西寄りに竪穴住居４軒と竪穴遺構１基、溝２条、土坑１基が集中する区域があり、この集中域の東側には谷地形を跨ぐように北北西・南南東方向に土坑37基とピット34基が帯状の、西側には８基の土坑が集中的な分布が見られた。



第18図　Ⅰ区２面遺構全体図

谷地形両側には微高地が在り、北側微高地では南端に竪穴住居１軒、その西側と特に北側にかけて16基の土坑と小型ピット１基が分布するが、大型の土坑がこの区域に集中していた。一方南側の微高地では調査区南西隅部に竪穴住居２軒、その東に溝３条、土坑５基、ピット４基が分布する。尚、竪穴住居の分布域は西または南に広がるものと想定される。

さて２面の遺構の遺存状態は全体的に良好であったが、竪穴住居の煙道部が上位の遺物包含層中に出るケースがあったが、同層中ではプランを明瞭に捉えられずに調査に苦慮した。明瞭な確認面は包含層より20cm以上低い位置だったため、途中段階から敢えてこの面に確認面を移し、煙道部のみ残して調査を進めた住居もあった。

尚、中部東端の２－67号土坑の北側は北西－南東走行の近世以降の耕作溝で切られていた。この溝はⅠ区東部で１面での調査を行わなかったこともあって全容は不明である。本来前節に記載すべきであったが、67号土坑との関連から本項に記した。

２　１号住居（第19・20図、PL10・17）

概要　１号住居は谷地形西部の竪穴住居集中域に在るが、南東部分が東側の市道下に入るため調査できず全容を詳らかにできなかった。また当初遺物包含層下位におぼろげなプランを確認し掘削を開始したのであるが、この層でのプランは不明瞭だったため土層を確認し乍ら徐々に掘り下げて壁面を確認していった。尚、中・下位の遺存状況は良好であった。

また本住居は１・２号溝と重複関係にあったが、本住居は何れの溝にも切られていた。

遺物　本住居からは土師器片を中心に比較的多くの出土遺物を見たのであるが、この中には土師器の坏（１・２）や甕（３・４）、須恵器の蓋（４～７）や甕（８）があり、こも編み石（９・10）や磨石(12)、

鉄鎌(13)の出土も見られた。また天井石と認識される大型の河床石(11)の出土も見られた。

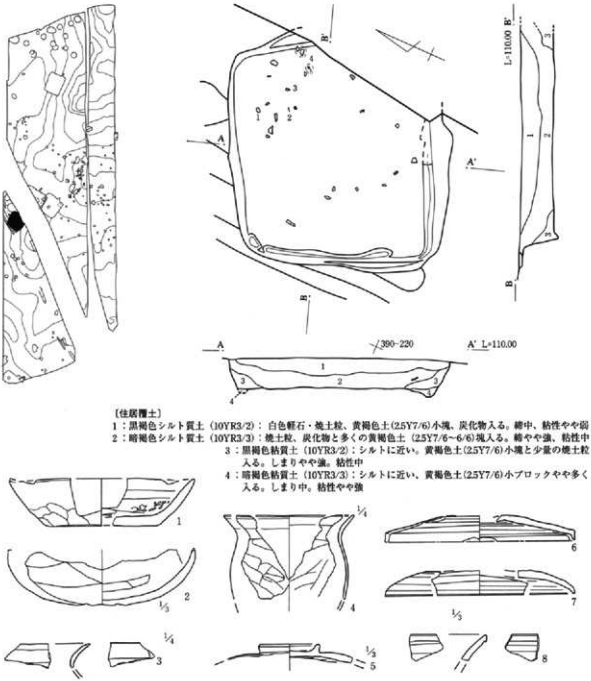
時期　これらの出土遺物から推して、本住居は概ね８世紀後半頃の所産と判断される。

規模　径：358×(374)cm　深さ：57cm

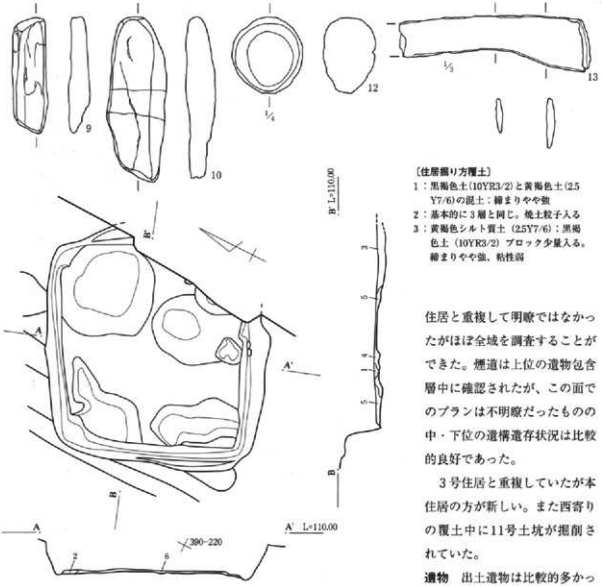
構造　上述のように本住居は南東部が調査区外に在るため全容は明らかでなかったが、全体に遺存状況は良好で一定の所見を得ることができた。

住居のプランはやや横長の隅丸方形で、四隅に径１m超のものを含む大型の楕円形様プランの土坑状の掘り込みを伴う掘り方を黄褐色粘質土（ローム）等で埋め戻ししっかりした床を作り出している。

床面の南壁及び西壁際には幅14cm、深さ７cm以下の周溝が廻っていたが、床面では見えなかったものの掘り方面では北・東壁際にも周溝が廻ることを確認した。尚、柱穴はなかったが、貯蔵穴は掘り方南



第19図　１号住居床上と住居出土遺物（その１）



第20図　１号住居掘り方

東隅に一部が見える掘り込みを想定している。

また、覆土中より天井石と思しき河床礫が出土することから竈を有した可能性が高いものと思われる。この場合、竈の設置位置は調査区外となる南東部に想定され、他の住居の状態から東竈であったものと推定している。

3　２号住居

（第21～25図、PL10・11・17～19）

概要　２号住居も谷地形西部の竪穴住居集中域の一画に在る。北西の一部が調査区外に出、北側が３号住居と重複して明瞭ではなかったがほぼ全域を調査することができた。燃道は上位の遺物包含層中に確認されたが、この面でのプランは不明瞭だったものの中・下位の遺構遺存状況は比較的良好であった。

３号住居と重複していたが本住居の方が新しい。また西寄りの覆土中に11号土坑が掘削されていた。

遺物　出土遺物は比較的多かったが、この中には土師器甕（１・２）や須恵器の蓋（３）・坏（５～10）・把手付坏(11)・甕(12・13)・瓶子(14)・壺(15)、石製紡錘車(16)、台石(17・18)、こも編み石(19～31)、刀子(36)が見られた。また竈には天井石(32)が設置された状態で残っていた。この他、黒曜石の石鏃(33)、石核(34)、剥片(35)も出土している。

時期　こうした出土遺物から推して、本住居は概ね９世紀前半頃の所産と判断される。

規模　径：(418)×433㎝　深さ：60㎝

竈　幅：127㎝　奥行き：127㎝（推定136㎝）

左袖　幅：35㎝　長さ：49㎝（推定68㎝）

右袖　幅：25㎝

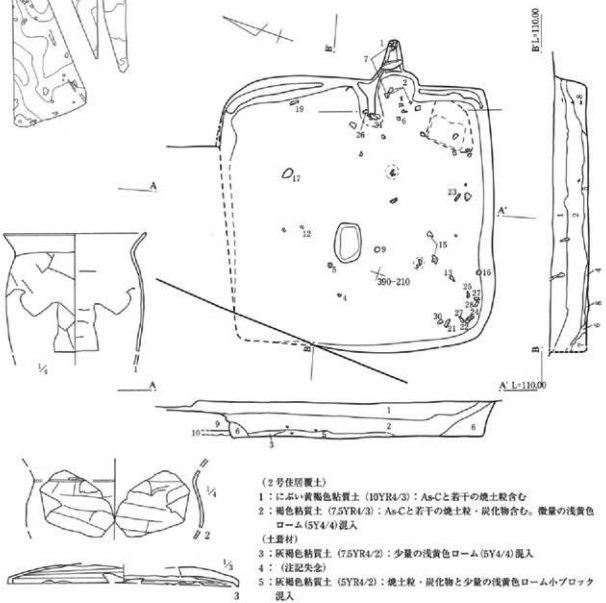
長さ：13cm
（推定31cm）
竈道　幅：30cm以下
長さ：65cm
貯蔵穴　径：75×70cm
深さ：24cm
床下土坑
径：142×118cm
深さ：18cm

構造　南東隅が調査できず３号住居と重複する北側も不明瞭だったが、ほぼ全容を把握できた。

本住居のプランは隅丸方形を呈する。

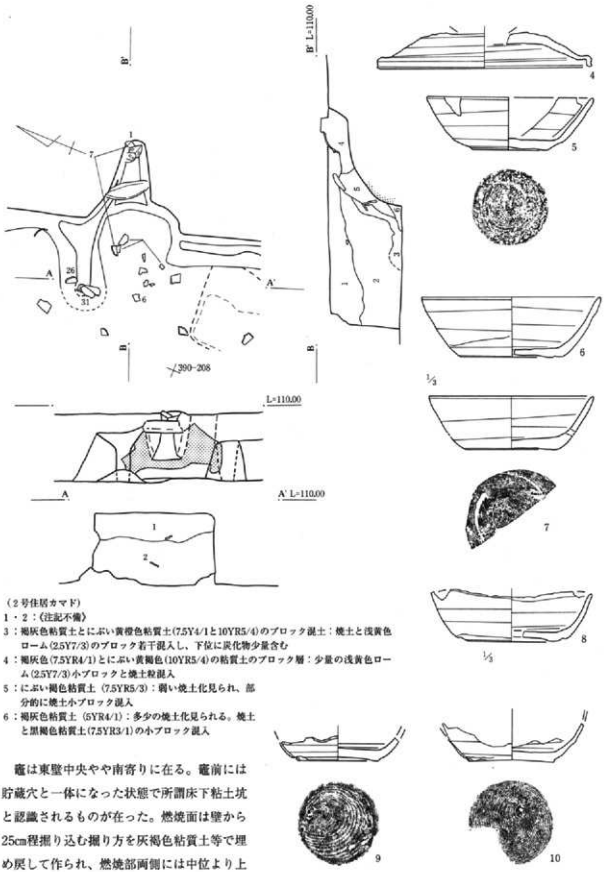
大型の掘り込みを伴う掘り方を有し、これを褐灰色やにぶい黄橙色の粘質土で埋め戻して床面を作り出している。

床面では本住居に伴うか否か不明の掘り込み（径64×42cm、深さ５cm）を見たが柱穴は確認できなかった。貯蔵穴は掘り方面の竈右側手前に長方形様プランと想定される痕跡を確認した。また東壁に図示される段差は壁面が不明瞭な上位と明瞭な中・下位との境が現れたもので棚状遺構ではない。



（２号住居覆土）
1：にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）：As-Cと若干の焼土粒含む
2：褐色粘質土（7.5YR4/3）：As-Cと若干の焼土粒・炭化物含む。微量の浅黄色ローム（5Y4/4）混入
（土師材）
3：灰褐色粘質土（7.5YR4/2）：少量の浅黄色ローム（5Y4/4）混入
4：（注記失念）
5：灰褐色粘質土（5YR4/2）：焼土粒・炭化物と少量の浅黄色ローム小ブロック混入

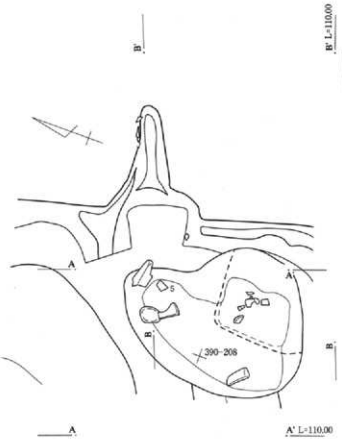
第21図　２号住居床上と住居出土遺物（その１）



（２号住居カマド）
1・2：《注記不備》
3：褐灰色粘質土とにぶい黄橙色粘質土(7.5Y4/1と10YR5/4)のブロック混土：焼土と浅黄色ローム(2.5Y7/3)のブロック若干混入し、下位に炭化物少量含む
4：褐灰色(7.5YR4/1)とにぶい黄褐色(10YR5/4)の粘質土のブロック層：少量の浅黄色ローム(2.5Y7/3)小ブロックと焼土粒混入
5：にぶい褐色粘質土（7.5YR5/3）：弱い焼土化見られ、部分的に焼土小ブロック混入
6：褐灰色粘質土（5YR4/1）：多少の焼土化見られる。焼土と黒褐色粘質土(7.5YR3/1)の小ブロック混入

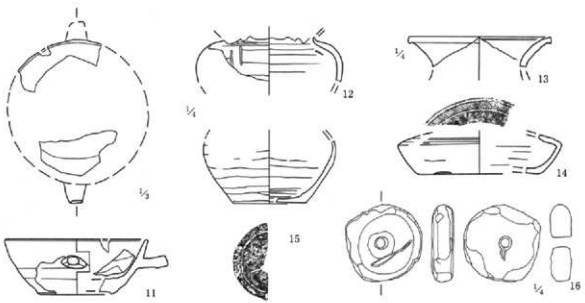
竈は東壁中央やや南寄りに在る。竈前には貯蔵穴と一体になった状態で所謂床下粘土坑と認識されるものが在った。燃焼面は壁から25cm程掘り込む掘り方を灰褐色粘質土等で埋め戻して作られ、燃焼部両側には中位より上の構造は確認できなかったがにぶい黄褐色粘

第22図　２号住居竈と住居出土遺物（その２）

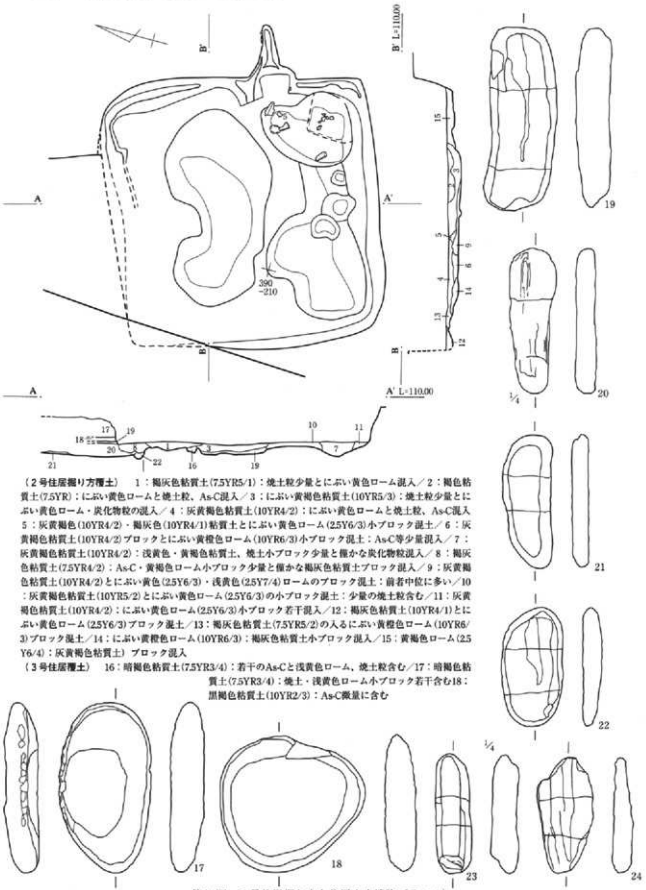


（裾）　1：にぶい黄橙色ローム（10YR7/4）：灰黄褐色粘質土(10YR6/2)入るにぶい黄橙色ローム(10YR7/4)小ブロック混土層：ごく弱く焼土化し、焼土小ブロック僅かに混入／2：褐色粘質土(7.5YR4/3)：弱い焼土化の見られる明黄褐色ローム(10YR7/6)小ブロックと焼土粒若干混入／3：明赤褐色粘質土（2.5YR5/8）：2層土ブロック混入／4：にぶい黄褐色粘質土(10YR5/4)：浅黄色ローム(5Y7/4)・焼土粒と少量の炭化物粒含む

（掘り方覆土）　5：灰褐色粘質土(5YR4/2)：焼土化見る。若干の焼土粒や焼土化見る明褐灰色ローム(5YR7/2)小ブロック混入／6：褐色粘質土(10YR4/4)：褐色粘質土(10YR4/4)：若干の焼土粒と炭化物粒混入／7：灰褐色粘質土(7.5YR5/2)：弱い焼土化見る。焼土(5YR6/6)ブロックと褐灰色粘質土(10YR4/1)の小ブロック混入／8：7層に似るが焼土粒多量に混入／9：褐灰色粘質土(5YR4/1)：やや焼土化が見る。焼土(5YR6/8、7.5YR7/8)粒と少量の炭化物粒含む10：褐色粘質土(7.5YR4/3)：焼土化見られる。焼土粒とローム粒(10YR6/4)を若干混入する／11：ベースは7層土に似るが、焼土粒を多く含み、炭化物と浅黄色ローム粒(2.5Y7/4)を混入する／12：にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)：少量の炭化物と褐灰色粘質土(7.5YR4/1)小ブロックを混入する／13：にぶい黄橙色粘質土(10YR6/3)：浅黄色ローム粒と少量の焼土粒混入／14：灰黄褐色粘質土(10YR6/2)：若干の焼土粒(5Y6/8)と暗褐色粘質土粒(10YR3/3)混入／15：焼土化身るにぶい赤褐色(5YR5/3)・褐色(7.5YR4/3)明褐灰色(5YR7/2)粘質土のブロック混土：浅黄色ローム(5Y7/4)や焼土の小塊・粒混入／16：褐灰色粘質土(7.5YR4/1)と若干焼土化る灰褐色粘質土(7.5YR5/2)の小ブロックの混土：焼土と若干の褐灰色粘質土粒(10YR5/1)を含む／17：暗灰黄色(2.5Y4/2)・灰黄褐色粘質土(10YR6/2)ブロック混土：にぶい黄色(2.5Y6/3)や浅黄色(2.5Y7/3)のローム や黒褐色粘質土(10YR3/2)の小ブロック混入／18：暗灰黄色粘質土(2.5Y5/2)：16層土小ブロック混入



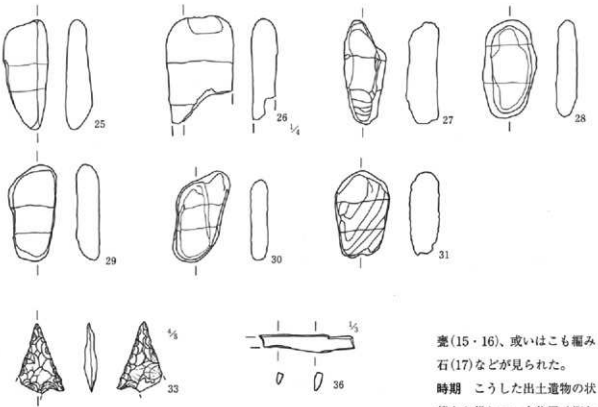
第23図　２号住居竈掘り方と住居出土遺物（その３）



（２号住居掘り方覆土）　１：褐灰色粘質土(7.5YR5/1)：焼土粒少量とにぶい黄色ローム混入／２：褐色粘質土(7.5YR)；にぶい黄色ロームと焼土粒、As-C混入／３：にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3)：焼土粒少量とにぶい黄色ローム・炭化物粒の混入／４：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)：にぶい黄色ロームと焼土粒、As-C混入５：灰黄褐色(10YR4/2)・褐灰色(10YR4/1)粘質土とにぶい黄色ローム(2.5Y6/3)小ブロック混土／６：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)ブロックとにぶい黄橙色ローム(10YR6/3)小ブロック混土：As-C等少量混入／７：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)：浅黄色・黄褐色粘質土、焼土小ブロック少量と僅かな炭化物粒混入／８：褐灰色粘質土(7.5YR4/2)：As-C・黄褐色ローム小ブロック少量と僅かな褐灰色粘質土ブロック混入／９：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)とにぶい黄色(2.5Y6/3)・浅黄色(2.5Y7/4)ロームのブロック混土：前者中位に多い／10：灰黄褐色粘質土(10YR5/2)とにぶい黄色ローム(2.5Y6/3)の小ブロック混土：少量の焼土粒含む／11：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)：にぶい黄色ローム(2.5Y6/3)小ブロック若干混入／12：褐灰色粘質土(10YR4/1)とにぶい黄色ローム(2.5Y6/3)ブロック混土／13：褐灰色粘質土(7.5YR5/2)の入るにぶい黄橙色ローム(10YR6/3)ブロック混土／14：にぶい黄橙色ローム(10YR6/3)：褐灰色粘質土小ブロック混入／15：黄褐色ローム(2.5Y6/4)：灰黄褐色粘質土）ブロック混入

（３号住居覆土）　16：暗褐色粘質土(7.5YR3/4)：若干のAs-Cと浅黄色ローム、焼土粒含む／17：暗褐色粘質土(7.5YR3/4)：焼土・浅黄色ローム小ブロック若干含む18：黒褐色粘質土(10YR2/3)：As-C微量に含む

第24図　２号住居掘り方と住居出土遺物（その４）



第25図　2号住居出土遺物（その5）

質土等の土壌を左右両側から積み上げて袖を作っている。また煙道は緩傾斜で伸びるが、その手前には天井石が設置され、先端近くには縦方向横位に土師器甕が設置されていた。

4　3号住居（第26～29図、PL11・19・20）

概要　3号住居も谷地形西部の竪穴住居集中域の一画に位置している。過半が市道5138下に出ており、東部の一部を調査できたに過ぎなかった。また南側が2号住居に切られていたが、残存部の遺存状況は比較的良好で一定の所見を得ることができた。

本住居の竈煙道部も不明瞭ながら遺構包含層中に確認されていたが、早い段階で下位の明瞭な確認層まで下げて調査を実施した。

遺物　本住居からは調査範囲に比べては比較的多く、土師器片を中心とする遺物の出土が見られたのであるが、この中には土師器の坏(1～4)・甕(5～7)、須恵器の蓋(9～11)・坏(12・13)・高台付碗(14)・甕(15・16)、或いはこも編み石(17)などが見られた。

時期　こうした出土遺物の状態から推して、本住居は概ね8世紀後半頃の所産として認識される。

規模　径：(522)×(229)cm　深さ：68cm

竈　幅：135cm　奥行き：149cm

左袖　幅：41cm　長さ：34cm

右袖　幅：37cm　長さ：58cm

煙道　幅：25cm　長さ：105cm　高さ：28cm

元部径：25×33cm

先端部径：25×28cm

貯蔵穴　径：70×61cm　深さ：58cm

窪み　径：76×(70)cm　深さ：9cm

構造　本住居は上述のように東端近くのみの調査であったため全容は詳らかにできなかったが、概ね隅丸方形状のプランを呈すると想定される。

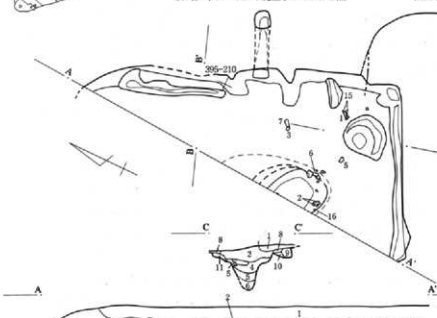
凹凸の激しい掘り方を有し、ローム等様々な土壌で埋め戻して床面を造っている。

床面では竈右側に貯蔵穴を確認した。明確な柱穴はなかったが、竈手前やや南寄りの調査区際に主に北～東側にかけて廻る幅82cm、高さ12cm以下の周堤を伴う浅い窪みが見られた。掘り方ではこの位置に

深い掘り込みがあったためここが柱穴であった可能性が思慮される。また南壁際と竈左側の東壁際に幅11～36cm、深さ10cm以下の周溝が掘られ、竈右側には問仕切り様の幅21cm、深さ６cm以下の短い浅い溝を確認した。

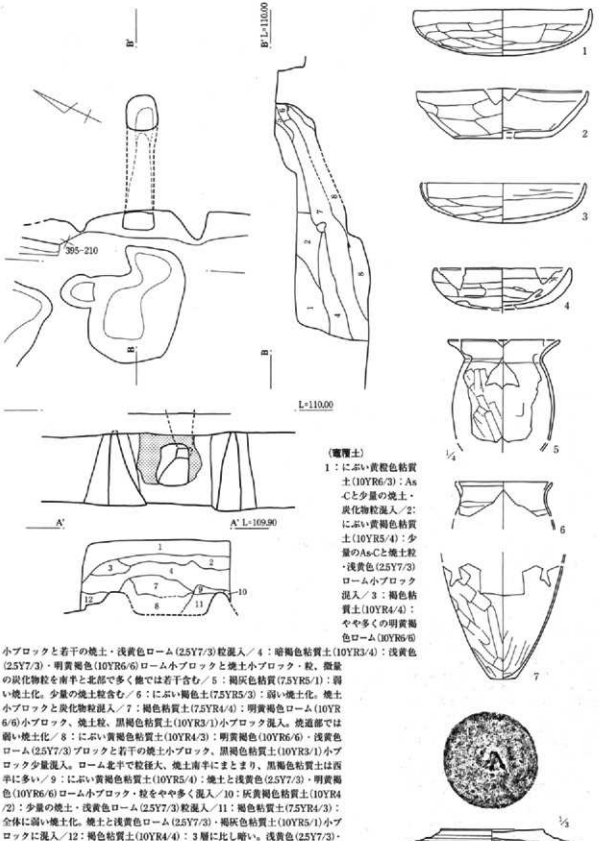
竈は東壁中央に設けられる。壁際の浅い掘り方を焼土を含む土壌で埋め戻した、この上の半ばまでを西側から床が貼って燃焼面としている。燃焼部両側には黄褐色粘質土等を積んで短い袖が設けているが、

（柱作土及び遺物包含層土）
1：オリーブ灰砂質色（2.5GY5/1）：As-A混入。現耕土。締まり弱
2：橙色砂質土（2.5YR6/8）：１層土に酸化鉄沈着
3：褐灰色砂質土（10YR6/2）：As-A混入する
4：褐灰色土（10YR5/2）：繊維若干混入。やや粗。やや締まる
5：黒褐色粘質土（10YR3/1）：As-C・As-Bやや多く入る。遺物包含層
（２・３号住居覆土）
6：にぶい黄褐色土（10YR4/3）：As-Cと若干の焼土粒含む。２号住居－１層に同じ
6′：５層土と６層土の混土
6″：６層土に炭化物小片多く入る
（２号住居覆土）
7：褐色粘質土（7.5YR4/3）：As-Cと若干の焼土粒、炭化物含み。微量の浅黄色ローム（5Y4/4）混入。２号住居－２層に同じ
8：暗褐色粘質土（7.5YR3/3）：若干のAs-Cと浅黄色ローム含む。２号住居－５層に同じ
（３号住居覆土）
9：褐色粘質土（10YR4/4）：浅黄色ローム（2.5Y7/4）の小ブロックと焼土粒含む
10：褐色粘質土（7.5YR4/4）：浅黄色ローム（2.5Y7/3）中ブロックや焼土小ブロックと黒色粘質土（10YR2/1）中ブロックやや多く、炭化物僅かに混入する
11：暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）：ローム粒や焼土小ブロック少量混入
12：褐色粘質土（7.5YR4/4）：ロームと黒色粘質土少量混入。焼土ブロックも入る。土葺き材の可能性あり
13：にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）：浅黄色ロームやや多く入り、焼土小ブロック混入
（３号住居三角堆積層）
14：にぶい黄褐色粘質土（10YR5/4）：浅黄色ローム（2.5Y7/4）多く混入
15：灰黄褐色粘質土（10YR5/2）：浅黄色ローム（2.5Y7/4）少量、炭化物僅かに混入する
16：灰黄褐色粘質土（10YR5/2）と浅黄色ローム（2.5Y7/4）の混土：にぶい黄褐色粘質土（10YR7/3）混入
17：灰褐色粘質土（7.5YR5/2）：焼土とロームを僅かに混入する
18：黒褐色土（10YR2/1）：17層土ブロック入る
19：暗褐色粘質土（10YR3/4）に黒褐色粘質土（7.5YR3/2）入るブロック混土：少量のロームと焼土小ブロック混入
（３号住居周溝覆土）
20：褐灰色粘質土（10YR4/1）：灰黄褐色ローム（2.5Y6/2）小ブロック混入



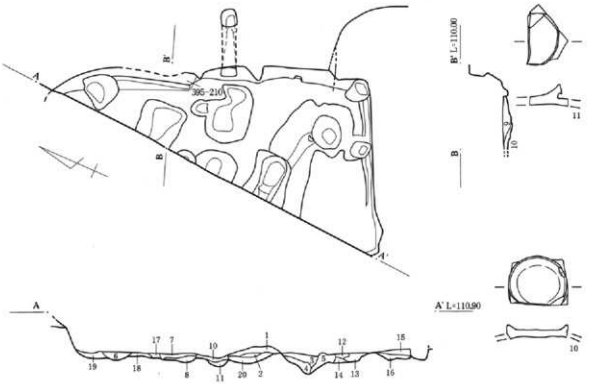
【貯蔵穴】
（２号住居）
１：褐灰色粘質土
（３号住覆土）
２：にぶい黄褐色粘質土／３：褐色粘質土
（３号住周溝）
４：褐色粘質土
（３号住貯蔵穴）
５：褐色粘質土（7.5YR4/3）：４層に似るが焼土と浅黄色ローム等の混入物多し／６：褐灰色粘質土（7.5YR5/1）：浅黄色ローム小ブロック多く混入／７：灰黄褐色粘質土（10YR4/2）：黒褐色粘質土・浅黄色ローム・灰白色ローム小ブロックと焼土粒混入／８：褐灰色粘質土（7.5YR4/1）：炭化物多く混入／９：黒褐色粘質土（10YR3/1）と褐灰色粘質土（10YR6/1）のブロック混土：炭化物少量混入
（３号住居掘り方覆土）
10：灰褐・褐灰色粘質土と浅黄色ローム小ブロック混土／11：暗褐色粘質土と灰黄褐色粘質土のブロック混土（土師器混入）

第26図　３号住居床上



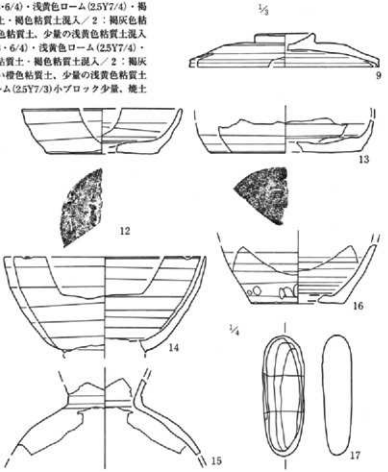
（竈覆土）
1：にぶい黄橙色粘質土(10YR6/3)；As-Cと少量の焼土・炭化物粒混入／2：にぶい黄褐色粘質土(10YR5/4)：少量のAs-Cと焼土粒・浅黄色(2.5Y7/3)ローム小ブロック混入／3：褐色粘質土(10YR4/4)：やや多くの明黄褐色ローム(10YR6/6)小ブロックと若干の焼土・浅黄色ローム(2.5Y7/3)粒混入／4：暗褐色粘質土(10YR3/4)：浅黄色(2.5Y7/3)・明黄褐色(10YR6/6)ローム小ブロックと焼土小ブロック・粒、微量の炭化物粒を南半と北部で多く他では若干含む／5：褐灰色粘質(7.5YR5/1)：弱い焼土化。少量の焼土粒含む／6：にぶい褐色土(7.5YR5/3)：弱い焼土化。焼土小ブロックと炭化物粒混入／7：褐色粘質土(7.5YR4/4)：明黄褐色ローム(10YR6/6)小ブロック、焼土粒、黒褐色粘質土(10YR3/1)小ブロック混入。焼道部では弱い焼土化／8：にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)：明黄褐色(10YR6/6)・浅黄色ローム(2.5Y7/3)ブロックと若干の焼土小ブロック、黒褐色粘質土(10YR3/1)小ブロック少量混入。ローム北半で粒径大、焼土南半にまとまり、黒褐色粘質土は西半に多い／9：にぶい黄褐色粘質土(10YR5/4)：焼土と浅黄色(2.5Y7/3)・明黄褐色(10YR6/6)ローム小ブロック・粒をやや多く混入／10：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)：少量の焼土・浅黄色ローム(2.5Y7/3)粒混入／11：褐色粘質土(7.5YR4/3)：全体に弱い焼土化。焼土と浅黄色ローム(2.5Y7/3)・褐灰色粘質土(10YR5/1)小ブロックに混入／12：褐色粘質土(10YR4/4)：3層に比し暗い。浅黄色(2.5Y7/3)・明黄褐色(10YR6/6)ローム多量に、焼土と黒褐色粘質土粒(10YR3/1)少量混入

第27図　3号住居竈と住居出土遺物（その1）

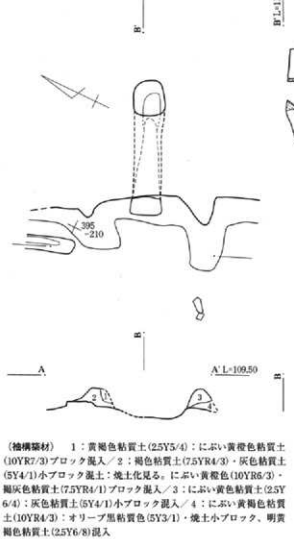


（**盛土層土**）　１：にぶい黄橙色粘質土(10YR7/3・6/4)・浅黄色ローム(2.5Y7/4)・褐灰色粘質土(10YR5/1)ブロック混土：褐灰色粘質土・褐色粘質土混入／２：褐灰色粘質土(7.5YR4/1)：にぶい黄橙色粘質土、にぶい橙色粘質土、少量の浅黄色粘質土混入

（**掘り方層土**）１：にぶい黄橙色粘質土(10YR7/3・6/4)・浅黄色ローム(2.5Y7/4)・褐灰色粘質土(10YR5/1)ブロック混土：・褐灰色粘質土・褐色粘質土混入／２：褐灰色粘質土(7.5YR4/1)：にぶい黄橙色粘質土、にぶい橙色粘質土、少量の浅黄色粘質土混入／６：灰黄褐色粘質土(10YR5/2)：浅黄色ローム(2.5Y7/3)小ブロック少量、焼土粒・橙色粘質土(5YR6/6)僅かに混入／７：灰褐色粘質土(7.5YR5/2)：黒褐色粘質土(7.5Y3/1)混入／８：褐灰色粘質土(7.5YR5/1)：明黄褐色粘質土(10YR7/6)・浅黄色ローム(2.5Y7.4)多く、橙色焼土(5YR6/8)少量含む／９：にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)：黒褐色粘質土(7.5YR3/1)と明黄褐色ローム(10YR7/6)のブロックと多くの浅黄色ローム(2.5Y7/4)と灰色粘質土(7.5Y4/1)ブロック混入／10：灰褐色粘質土(7.5YR4/2)：浅黄色ローム(2.5Y7/4)・東寄りでは明黄褐色ローム(10YR7/6)小ブロック多く、焼土(5YR6/3)少量混入　11：灰褐色粘質土(7.5YR4/2)：焼土と浅黄色ローム(2.5Y7/4)小ブロック混入する／12：にぶい黄橙色粘質土(10YR6/4)：褐灰色粘質土(10YR4/1)小ブロック混入／13：褐灰色粘質土(10YR4/1)：浅黄色ローム(2.5Y7/4)混入／14：黄褐色粘質土(2.5Y5/4)15：褐灰色粘質土(7.5YR5/1)：黒褐色粘質土(7.5YR3/1)・焼土・浅黄色ローム(2.5Y7/3)小ブロック混入／16：褐灰色粘質土(7.5YR4/1)：浅黄色ローム(2.5Y7/4)と焼土の小ブロック混入／17：７層に似るが混入するブロック多し／18：浅黄色ローム(2.5Y7/4)と灰黄褐色粘質土(10YR5/2)の大ブロックの混土／19：灰黄褐色粘質土(10YR5/2)：浅黄色ローム(2.5Y7/4)・黒褐色粘質土(5Y2/1)小ブロック多く混入／20：褐灰色粘質土(7.5YR5/1)・浅黄色ローム(2.5Y7/4)・にぶい黄橙色粘質土(10YR7/3)の小ブロックの混土：橙色焼土ブロック(5YR6/8)混入



第28図　３号住居掘り方と住居出土遺物（その２）



（袖構築材）　1：黄褐色粘質土(2.5Y5/4)：にぶい黄橙色粘質土(10YR7/3)ブロック混入／2：褐色粘質土(7.5YR4/3)・灰色粘質土(5Y4/1)小ブロック混土：焼土化見る。にぶい黄橙色(10YR6/3)・褐灰色粘質土(7.5YR4/1)ブロック混入／3：にぶい黄色粘質土(2.5Y6/4)：灰色粘質土(5Y4/1)小ブロック混入／4：にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)：オリーブ黒粘質色(5Y3/1)・焼土小ブロック、明黄褐色粘質土(2.5Y6/8)混入

（煙道部天井部）　5：にぶい橙色粘質土(2.5YR6/3)：地山層土だが焼土化が見られる／6：褐灰色土(10YR4/1)：粘性あり／7：橙色焼土（5YR7/6）／8：橙色焼土（7.5YR7/6）

（住居掘り方覆土）

9：にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3)：浅黄色ローム(2.5Y7/4)と黒褐色粘質土(10YR3/2)の小ブロック多量に混入。少量の焼土粒含む。住居床土／10：にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3)と浅黄色ローム(2.5Y7/4)と灰褐色粘質土(10YR6/2・明るい)のブロック混土：カマド掘り方燃焼面構築土

（カマド掘り方覆土）

11：灰黄褐色粘質土(10YR6/2)：焼土化。灰褐色(7.5YR6/2)になった部分多し。灰黄褐色粘質土(10YR5/2)小ブロック混入／12：灰褐色粘質土(7.5YR5/2・やや焼土化見られる)と褐灰色灰(10YR4/1)の混土：灰は層下位に多く、炭化物粒、浅黄色ローム(2.5Y7/4)粒含む／13：にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)：焼土粒と浅黄色ローム粒(2.5Y7/4)混入／14：褐灰色粘質土(5YR4/1)：橙色(5YR6/8)の焼土小ブロック多く混入。少量の黒褐色粘質土粒(10YR3/1)混入。全体に相応の焼土化見られる／15：暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)：にぶい黄橙色ローム(10YR6/3)小ブロックと風酸化した灰黄色(2.5Y6/2)軽石混入／16：灰褐色粘質土(7.5YR5/2・弱く焼土化)とにぶい黄色粘質土(2.5Y6/3)のブロック混土：下位中心に灰(7.5Y6/1)・焼土粒混入／17：暗灰黄色粘質土(2.5Y4/2)：にぶい黄橙色ローム(10YR6/3)小ブロックと風酸化した灰黄色(2.5Y6/2)軽石混入／18：灰黄褐色粘質土(10YR5/2)と浅黄色ロームのブロック混土：(2.5Y7/4)：焼土粒と27層土小ブロック若干混入／19：弱い焼土化の見られるにぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)：大きな焼土(5Y6/8)１ヶ底面に入り、26層土小ブロックと少量の炭化物粒混入／20：にぶい黄褐色粘質土：若干の焼土化見られ、焼土粒混入／21：黒褐色粘質土(7.5YR3/2)：若干の焼土化が見られる／22：褐色粘質土(10YR4/4)と浅黄色(2.5Y7/4・7/3)のブロック混土

第30図　３号住居カマド掘り方

天井部の状態は確認できなかった。煙道は完全なトンネルでやや上に傾くように横位に掘削され、１m程のところで垂直に立ち上げている。尚、燃焼面上位から煙道上半部は良く焼けていた。

5　４号住居（第31～33図、PL12・20・21）

概要　４号住居は谷地形西部の竪穴住居集中域東北隅部、上述の３号住居の北にこれと並ぶように単独で位置している。しかし多くが調査区外に在るため、南東部の一角を調査できたに過ぎなかった。

遺物　本住居では土師器片を中心とする遺物の出土があったが、この中には土師器坏（１～５）・甕（６～８）・胴張甕（９）、須恵器坏（10～12）などが見られた。

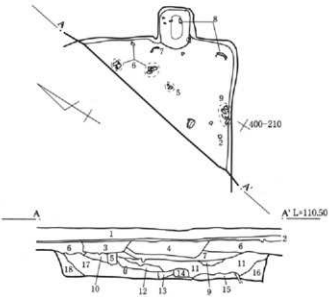
時期　こうした出土遺物から推して、本住居は概ね８世紀後半期の所産と判断される

規模　径：(255)×(214)cm　深さ：25cm

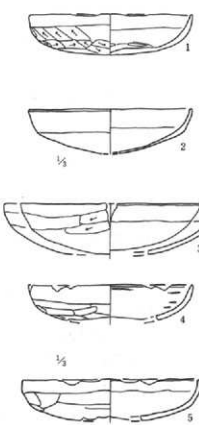
竈　幅：(77)cm　奥行き：66cm

左袖　幅：22cm　長さ：11cm

構造　部分的な調査であったため全容は把握できなかった。またプランも方形様と想定されるに過ぎなかった。



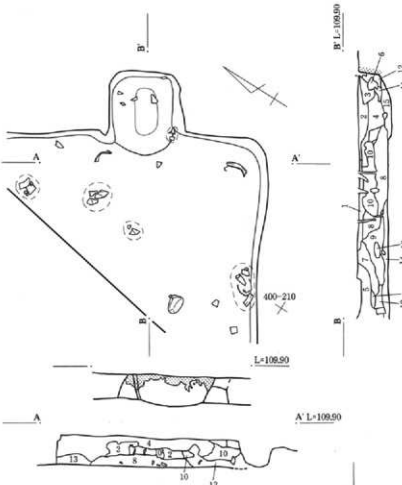
（耕作土）
1：灰色砂質土(5Y5/1)：現耕作土／２：１層土に酸化鉄沈着の層。締まりあり
（土坑覆土）
3：灰黄褐色砂質土(10YR4/2)：４層に比しやや灰色掃かる。As-Aやや多く混入。締まる沢根／４：灰黄褐色土(10YR4/2)：As-A多量に混入締まるが根
（中世前後の堆積層）
8：にぶい黄褐色粘質土(10YR4/2)：浅黄色ローム粒と若干の焼土・炭化物粒を混入
（ピット覆土）
5：にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)：若干の浅黄色ローム少量の焼土の小ブロック混入
（住居覆土）
6：褐灰色粘質土(7.5YR4/1)：浅黄色ローム(5Y7/3)と若干の焼土粒混入／７：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)：浅黄色ローム(5Y7/3)をやや多く混入／９：褐灰色粘質土(7.5YR5/1)：やや多くの浅黄色ローム(5Y7/3)小ブロックと少量の炭化物・焼土粒含む／10：灰黄褐色粘質土(10YR5/2)：多量の浅黄色ローム(5Y7/3)ブロックと少量の炭化物粒含む／11：灰黄褐色粘質土(10YR5/2)：10層に比しやや明るい。やや多くの浅黄色ローム(5Y7/3)と若干の焼土粒・炭化物粒混入／12：褐灰色粘質土(7.5YR4/1)：浅黄色ローム(5Y7/3)と若干の焼土小ブロック・粒混入／13：暗灰黄色粘質土(2.5Y5/2)：14層土と橙色焼土(5YR6/8～7/8)のブロック混土／14：一部浅黄色（5Y7/3）混じるにぶい黄色(2.5Y4/3)のロームブロック／15：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)：色調やや暗い。14層土小ブロックと炭化物粒を若干混入／16：黒褐色粘質土(10YR3/2)：14層土小ブロック（部分的にやや多い）と微量の焼土粒混入／17：褐灰色(7.5YR4/1)・灰褐色(7.5YR5/2)粘質土のブロック混土：14層土ブロック多く、焼土ブロック・粒、炭化物粒若干混入／18：灰黄褐色土(10YR4/2)：色調やや暗い。14層土小ブロック粒を混入し、微量の炭化物含む



第31図　４号住居床上と住居出土遺物（その１）

掘り方を有するが発掘時の掘り過ぎもあって正確な構造を把握することはできなかった。しかし全体としてはローム等で埋め戻して床面を形成していることが確認され、また一部に地床部分も残っていた。

床面・掘り方面双方に於いて柱穴　（38頁に続く）



（竈・住居覆土）

1：灰黄褐色粘質土(10YR5/2)：少量の浅黄色ローム(2.5Y7/3)と焼土の小ブロック混入／2：灰黄褐色粘質土(10YR5/2)：浅黄色ローム(2.5Y7/3)ブロックと少量の炭化物混入／3：浅黄色ローム(2.5Y7/3)に灰黄褐色粘質土(10YR5/2)入るブロック混土／4：灰褐色粘質土(7.5YR4/2)：弱い焼土化。浅黄色ローム(2.5Y7/3)ブロックと若干の焼土小ブロックと炭化物粒混入／5：灰黄褐色粘質土(10YR5/2)：浅黄色ローム(5Y7/4・2.5Y7/3)の小ブロック混入し、少量の焼土小ブロックと炭化物粒入る／6：5層に似るがローム多量に混入／7：にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3)：浅黄色ローム(5Y7/4)小ブロック多量に含み、焼土・炭化物粒若干混入する／8：にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)：浅黄色ローム(5Y7/4)小ブロックやや多く含み、焼土粒少量混入する／9：浅黄色ローム(5Y4/4多く2.5/7/3少ない)ブロック層：大ブロックには7層土小ブロックや焼土粒微量に混入／10：黄橙色焼土ブロック(7.5YR7/8)：部分的に周辺層土小ブロック混入／11：灰黄褐色粘質土(10YR5/2)ブロック／12：にぶい黄褐色土(10YR5/3)：弱く焼土化／13：灰褐色粘質土(7.5YR5/2)：炭化物やや多く混入。若干の浅黄色ローム(2.5Y7/3)小ブロックと微量の焼土粒混入。弱い焼土化見る

14：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)：浅黄色ローム(2.5Y7/3,5Y7/4)ブロック多く混入

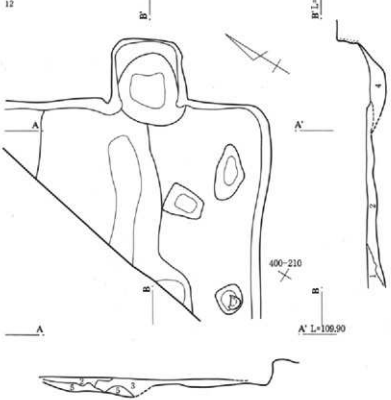
15：褐灰色粘質土(10YR4/1)と焼土の小ブロックの混土：焼土化見られる。12層土の小ブロック若干混入

（住居掘り方覆土）

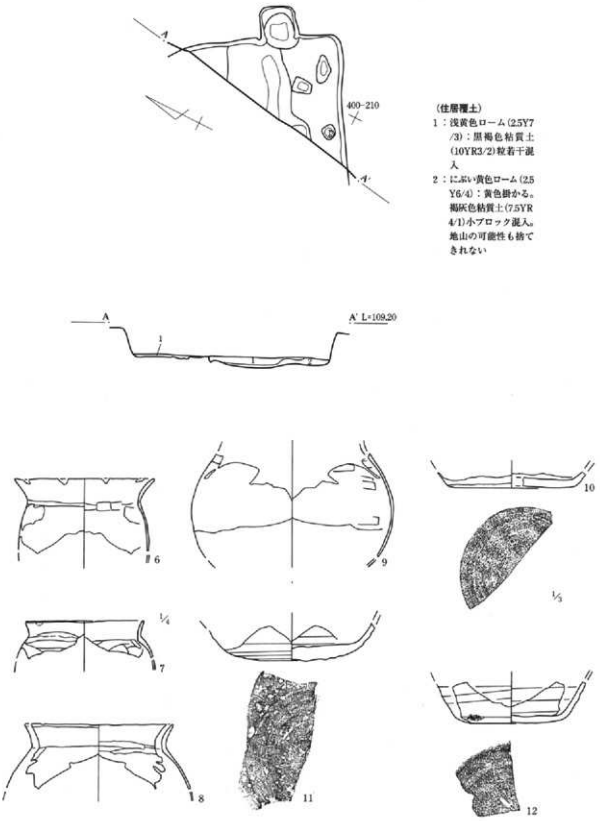
16：黒褐色粘質土(7.5YR3/1)と浅黄色ローム(2.5Y7/3)のブロック混土：少量の焼土粒含む

（竈掘り方覆土）

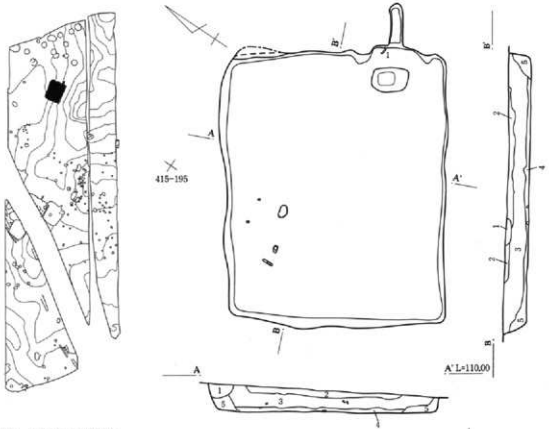
17：浅黄色ローム(2.5Y7/3)：黒褐色粘質土(10YR3/2)粒若干混入／18：16層土に似るが、ブロックの径大きくロームに黒褐色粘質土が入るブロック層。微量の炭化物含み、竈寄りに少量の焼土粒含む／19：灰オリーブ色ローム(5Y6/2)：褐灰色粘質土(7.5YR4/1)と少量の焼土ブロック混入／20：にぶい黄色ローム(2.5Y6/4)：黄色掛かる。褐灰色粘質土(7.5YR4/1)小ブロック混入。地山の可能性も捨てきれない



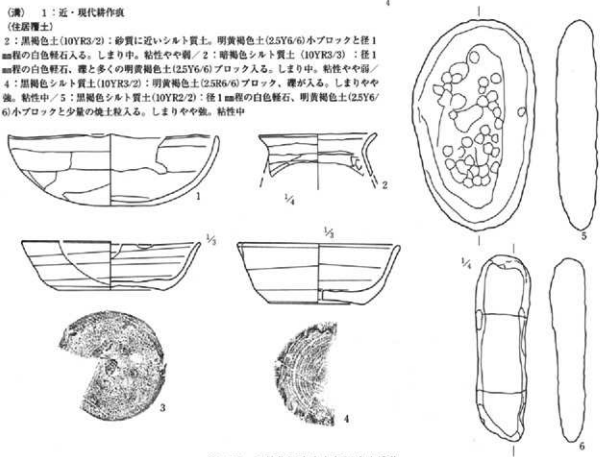
第32図　４号住居竈（上）とカマド掘り方（下）



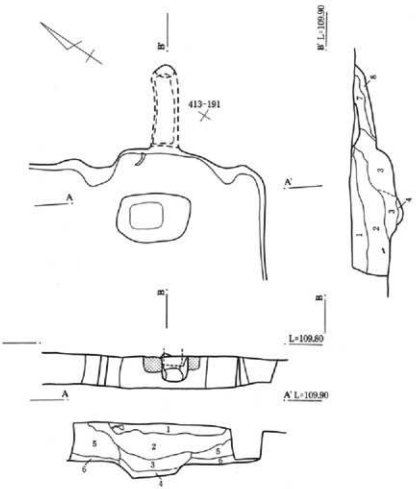
第33図　４号住居掘り方と住居出土遺物（その２）



(溝)　1：近・現代耕作痕
(住居覆土)
2：黒褐色土(10YR3/2)：砂質に近いシルト質土。明黄褐色土(2.5Y6/6)小ブロックと径1mm程の白色軽石入る。しまり中。粘性やや弱／2：暗褐色シルト質土（10YR3/3）：径1mm程の白色軽石、覆と多くの明黄褐色土(2.5Y6/6)ブロック入る。しまり中。粘性やや弱／4：黒褐色シルト質土(10YR3/2)：明黄褐色土(2.5R6/6)ブロック、覆が入る。しまりやや強。粘性中／5：黒褐色シルト質土(10YR2/2)：径1mm程の白色軽石、明黄褐色土(2.5Y6/6)小ブロックと少量の焼土粒入る。しまりやや強。粘性中



第34図　5号住居床上と住居出土遺物



〔竈覆土〕
1：褐灰色土(10YR4/1)：砂質に近いシルト質土。径１mm程の白色軽石、明黄褐色土(2.5Y6/6)小ブロック少量入る。しまり中。粘性弱
2：黒褐色シルト質(10YR3/2)：径１mm程の白色軽石と焼土粒入り明黄褐色土(2.5Y6/6)小ブロックやや多く入る。しまり中。粘性やや弱
3：黒褐色土(10YR2/3)：粘性に近いシルト質焼土ブロックが下方に入り明黄褐色土(2.5Y6/6)小ブロック少量入る。しまり中。粘性中
4：黒褐色シルト質土(10YR2/3)：地山の砂が混じり焼土粒・小ブロック少量入る。しまり中。粘性中
5：前貫住居－３層と基本的に同じ。焼土粒子極く少量入る。袖材の可能性残る
6：前貫住居－４層と基本的に同じ。袖材の可能性残る
7：暗褐色シルト質土(10YR3/3)土：焼土粒と極く少量の径１mm程の白色軽石入る。しまり中。粘性やや弱
8：黒褐色シルト質土(10YR3/2)：少量の明黄褐土(2.5Y6/6)粒、極く少量の焼土粒と径１mm程の白色軽石が入る。しまり中。粘性やや弱

第35図　５号住居竈

や貯蔵穴を確認することはできなかった。

竈は東壁に在り、中央より南に寄ると想定される。壁面を跨いで掘削した楕円形プランの掘り方をローム等で埋め戻して燃焼面を作っている。燃焼部は箱形で壁面の焼土化は顕著である。袖は左袖の削り残しが僅かに残る程度で構造は明らかにできなかった。尚、天井部は覆土の状態から浅黄色ロームで作られていた可能性を有する。

6　５号住居　（第34～36図、PL12・21）

概要　５号住居は本遺跡で唯一住居全体を調査できた竪穴住居跡で、谷地形北側に単独で位置していて、周辺部にも竪穴住居の分布も見られなかった。

竈前には本住居を切る長方形プランの土坑（径：59×40cm、深さ：10cm）が掘削されていた。

遺物　本住居では量としては多くなかったが土師器片を中心とする出土遺物があり、土師器の埦(１)・甕(２)、須恵器坏(３・４)の他、台石(５)、こも編み石(６)などが見られた。

時期　本住居の時期は出土遺物も少なくはっきりしないが、概ね８世紀前半頃の所産と認識される。

規模　径：366×442cm　深さ：57cm

竈　幅：134cm　奥行き：(97)cm

左袖　幅：37cm　長さ23cm

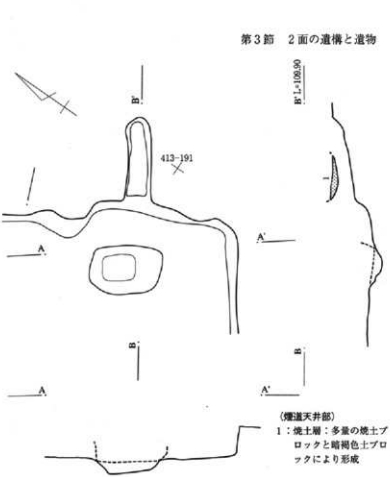
右袖　幅：26cm　長さ：18cm

煙道　幅：21cm　長さ：65cm

元部径：21×20cm

構造　本住居は縦長の長方形プランを呈している。表出する地山礫層を床として掘り方は持たず、また柱穴、貯蔵穴も確認することはできなかった。

竈は東壁南寄りに設けられている。この竈に掘り方はなく、掘削底面を燃焼部とするが、袖や天井の構造は不明。調査時点で煙道の天井が薄皮一枚残り、煙道が緩やかに上るトンネル構造で60cm程先でほぼ直上に抜けることを確認した。また燃焼部の上位から煙道天井部にかけては顕著な焼土化が見られた。



第36図　5号住居竈掘り方

7　6号住居（第37・38図、PL13・21・22）

概要　6号住居は谷地形南側、調査区の南西隅部に位置しており、他の遺構との重複関係はなかった。しかし殆どの部分が調査区外に出ていて南東隅の一部、竈付近が調査できたに過ぎなかった。

遺物　本住居からは土師器片中心の出土遺物があったが、須恵器の高台付碗（1）蓋（3）・甑（2・4）、こも編み石（5）なども見られた。

時期　出土遺物も少なく本住居の時期は特定できないが、概ね8世紀後半頃の所産と把握できるものと思われる。

規模　径：(162)×(142)cm　深さ：39cm

竈　幅：(85)cm　奥行き：92cm

構造　本住居は一部の調査に留まったため、プランも隅丸方形様と想定できるに過ぎなかった。尚、竈位置から小型の住居であった可能性を考えている。

掘り方を有し、これをローム等の土壌で埋め戻して床を作っているが、床、掘り方両面に於いて柱穴、貯蔵穴等を確認することはできなかった。

竈は東壁南寄りに位置し、壁面を40cm以上削り込む掘り方を褐灰色粘質土で埋め戻して燃焼面を作る。袖の状態は明確ではないが、右袖は灰黄褐色等の粘質土を盛り上げて造ったことが窺われる。天井構造は不明。燃焼部の壁面は上位を中心に強く焼土化する。また燃焼部東端より45cm位置の遺物包含層で土師器片のまとまりが見られたため、或いは煙道に土師器甕を用いた可能性も考慮される。

8　7号住居（第39～43図、PL13・22・23）

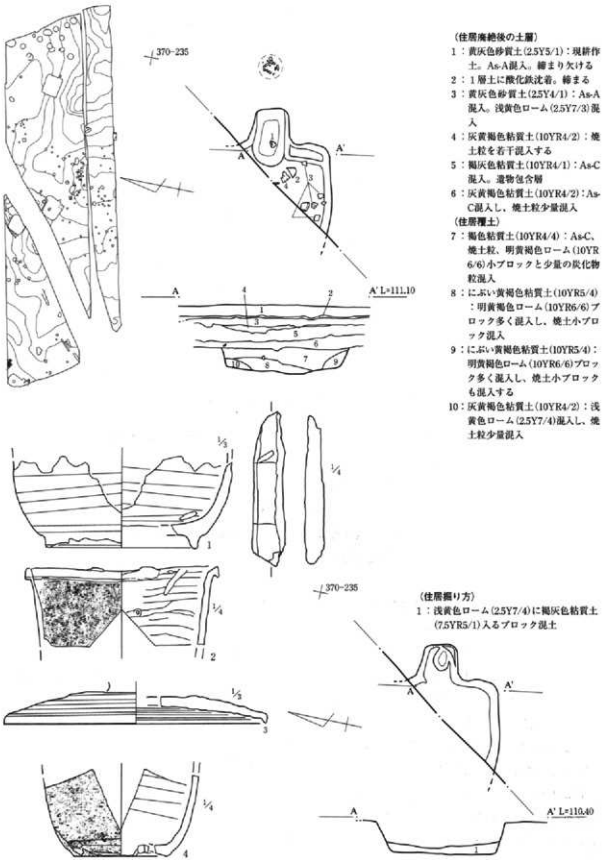
概要　7号住居は調査区南西隅部、6号住居の南に近接して位置し、他の遺構との重複関係はなかった。また西側と南側が調査区外に出ていて竈の過半を含む北東部を調査できたに過ぎなかった。尚、本住居の特徴は並存する2つの竈を持つことである。

遺物　土師器片を中心とした出土遺物があったが、この中には土師器の坏（1～3）・甕（4～10）、須恵器の蓋(10)・坏(11・12)・甕(13)・壺(14)やこも編み石(15～16)の出土も見られた。

時期　出土遺物から推して概ね本住居は概ね8世紀後半頃の所産と認識される。

規模　径：(434)×(248)cm　深さ：42cm

A竈　幅：(85)cm　奥行き：141cm（推定136cm）

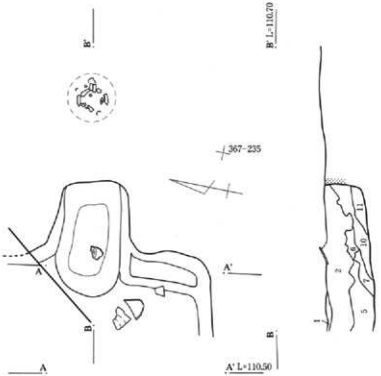


（住居廃絶後の土層）
1：黄灰色砂質土(2.5Y5/1)：現耕作土。As-A混入。締まり欠ける
2：1層土に酸化鉄沈着。締まる
3：黄灰色砂質土(2.5Y4/1)：As-A混入。浅黄色ローム(2.5Y7/3)混入
4：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)：焼土粒を若干混入する
5：褐灰色粘質土(10YR4/1)：As-C混入。遺物包含層
6：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)：As-C混入し、焼土粒少量混入

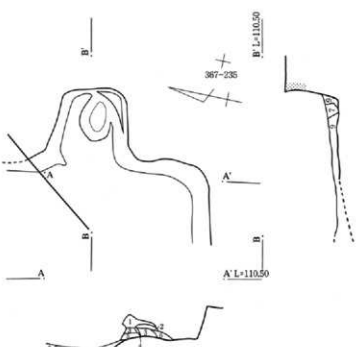
（住居覆土）
7：褐色粘質土(10YR4/4)：As-C、焼土粒、明黄褐色ローム(10YR6/6)小ブロックと少量の炭化物粒混入
8：にぶい黄褐色粘質土(10YR5/4)：明黄褐色ローム(10YR6/6)ブロック多く混入し、焼土小ブロック混入
9：にぶい黄褐色粘質土(10YR5/4)：明黄褐色ローム(10YR6/6)ブロック多く混入し、焼土小ブロックも混入する
10：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)：浅黄色ローム(2.5Y7/4)混入し、焼土粒少量混入

（住居掘り方）
1：浅黄色ローム(2.5Y7/4)に褐灰色粘質土(7.5YR5/1)入るブロック混土

第37図　6号住居床上（上）と住居掘り方（下）及び住居出土遺物



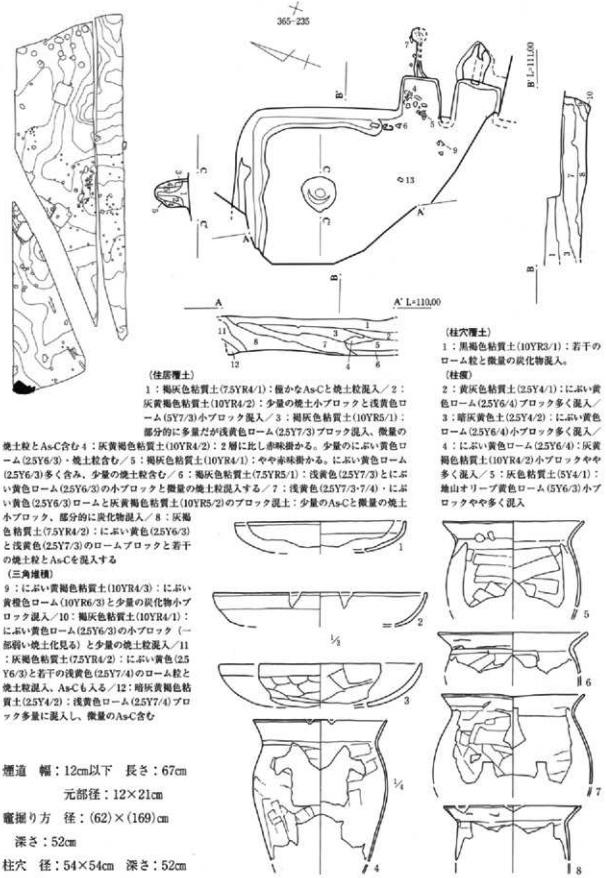
（カマド覆土）
1：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)：As-Cと少量の焼土粒混入
2：褐色粘質土(10YR4/4)：As-C、焼土粒、明黄褐色ローム(10YR6/6)小ブロックと少量の炭化物混入
3：褐灰色粘質土(7.5YR4/1)：焼土小ブロック少量混入
4：灰褐色粘質土(7.5YR4/2)とにぶい黄橙色ローム(10YR6/4)のブロック混土
5：にぶい黄褐色粘質土(10YR5/4)：明黄褐色ローム(10YR6/6)ブロック多く混入し、4層土と同じ焼土小ブロック混入
6：灰オリーブ色粘質土(5Y5/2)：焼土化見る。焼土小ブロックやや多く混入
7：褐灰色粘質土(10YR5/1)：カマド寄りに焼土ブロック(橙色5YR6/6)ブロック混入。浅黄色ローム(2.5Y7/3)ブロック混入
8：褐灰色粘質土(7.5YR4/1)：焼土小ブロック混入し、浅黄色ローム(2.5Y7/3)小ブロック若干混入。弱い焼土化見る
9：黒褐色粘質土(7.5YR3/1)とにぶい黄橙色ローム(10YR6/4)のブロック混土
10：褐灰色粘質土(5YR4/1)4層土と同じ焼土小ブロック多く入り、弱い焼土化が見られる



（袖材）
1：灰黄褐色粘質土(10YR5/2)ににぶい黄色ローム(2.5Y6/4)入るブロック層。As-C若干混入
2：灰褐色粘質土(7.5YR5/2)
3：褐灰色粘質土(7.5YR5/1)：浅黄色ローム(2.5Y7/4)粒と少量の焼土粒混入
4：灰黄褐色粘質土(10YR5/2)：少量の焼土粒混入
5：褐灰色粘質土(7.5YR5/1)：弱い焼土化見る。焼土小ブロック混入
6：明黄褐色(2.5Y6/6)と浅黄色(2.5Y7/3)のブロック混土
（６号住居・竈掘り方）
7：褐灰色粘質土(7.5YR5/1)：灰色粘質土(7.5YR4/1)小ブロックと少量の焼土・炭化物粒混入
8：細礫混じりの暗灰黄色ローム(2.5Y5/2)：黒褐色粘質土(10YR3/1)粒混入
9：浅黄色ローム(2.5Y7/4)に褐灰色粘質土(7.5YR5/1)入るブロック混土

第38図　６号住居竈（上）と住居竈掘り方（下）

右袖　幅：28cm　長さ：60cm（推定76cm）　　元部幅：18cm
竈掘り方　径：64×135cm　深さ：11cm　　B竈　幅：(92)cm　奥行き：142cm(推定136cm)
煙道　幅：18cm以下　長さ：77cm　　左袖　A竈右袖に同じ



（住居覆土）
1：褐灰色粘質土(7.5YR4/1)：微かなAs-Cと焼土粒混入／2：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)：少量の焼土小ブロックと浅黄色ローム(5Y7/3)小ブロック混入／3：褐灰色粘質土(10YR5/1)：部分的に多量だが浅黄色ローム(2.5Y7/3)ブロック混入、微量の焼土粒とAs-C含む 4：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)：2層に比し赤味強かる。少量のにぶい黄色ローム(2.5Y6/3)・焼土粒含む／5：褐灰色粘質土(10YR4/1)：やや赤味掛かる。にぶい黄色ローム(2.5Y6/3)多く含み、少量の焼土粒含む／6：褐灰色粘質土(7.5YR5/1)：浅黄色(2.5Y7/3)とにぶい黄色ローム(2.5Y6/3)の小ブロックと微量の焼土粒混入する／7：浅黄色(2.5Y7/3・7/4)・にぶい黄色(2.5Y6/3)ロームと灰黄褐色粘質土(10YR5/2)のブロック混土：少量のAs-Cと微量の焼土小ブロック、部分的に炭化物混入／8：灰褐色粘質土(7.5YR4/2)：にぶい黄色(2.5Y6/3)と浅黄色(2.5Y7/3)のロームブロックと若干の焼土粒とAs-Cを混入する

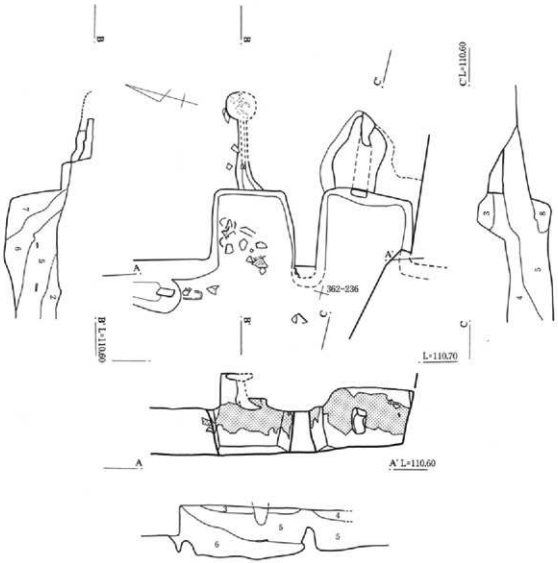
（三角堆積）
9：にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)：にぶい黄橙色ローム(10YR6/3)と少量の炭化物小ブロック混入／10：褐灰色粘質土(10YR4/1)：にぶい黄色ローム(2.5Y6/3)の小ブロック（一部弱い焼土化見る）と少量の焼土粒混入／11：灰褐色粘質土(7.5YR4/2)：にぶい黄色(2.5Y6/3)と若干の浅黄色(2.5Y7/4)のローム粒と焼土粒混入、As-Cも入る／12：暗灰黄褐色粘質土(2.5Y4/2)：浅黄色ローム(2.5Y7/4)ブロック多量に混入し、微量のAs-C含む

（柱穴覆土）
1：黒褐色粘質土(10YR3/1)：若干のローム粒と微量の炭化物混入。

（柱痕）
2：黄灰色粘質土(2.5Y4/1)：にぶい黄色ローム(2.5Y6/4)ブロック多く混入／3：暗灰黄色土(2.5Y4/2)：にぶい黄色ローム(2.5Y6/4)小ブロック多く混入／4：にぶい黄色ローム(2.5Y6/4)：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)小ブロックやや多く混入／5：灰色粘質土(5Y4/1)：地山オリーブ黄色ローム(5Y6/3)小ブロックやや多く混入

第39図　７号住居床上と住居出土遺物（その１）

煙道　幅：12cm以下　長さ：67cm
　　元部径：12×21cm
竈掘り方　径：(62)×(169)cm
　深さ：52cm
柱穴　径：54×54cm　深さ：52cm
床下土坑１　径：105×120cm



（7号住居カマド層土）
1：にぶい赤褐色粘質土の焼土(2.5YR5/3)と褐灰色土(10YR4/1)の小ブロックと橙色焼土の小ブロックの混土
2：にぶい黄褐色粘質土(10YR5/4)：若干の焼土・炭化物粒混入
3：褐灰色粘質土(7.5YR4/1)：弱い焼土化見る。にぶい黄色ローム(2.5Y6/4)と焼土の小ブロック・粒若干混入する
4：灰褐色粘質土(7.5YR4/2)：極く弱く焼土化。にぶい黄色ローム(2.5Y6/4)やこれの焼土化の見られるもののブロックや焼土粒、若干の炭化物粒混入
5：にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)：左側を中心ににぶい黄色ローム（2.5Y6/4）ブロックを若干含み、焼土・炭化物粒も少量含む
6：灰褐色粘質土(7.5YR4/2)ブロックと橙色焼土(5YR6/8)の小ブロックの混土
7：灰褐色粘質土(7.5YR4/2)：橙色焼土(5YR6/8)の小ブロックを多く混入する

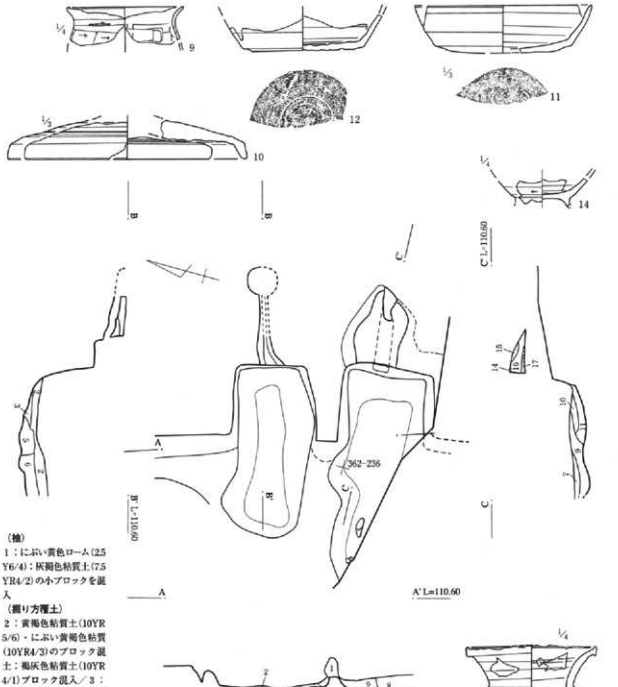
第40図　7号住居竈（左：A竈　右：B竈）

深さ：8㎝

床下土坑2　径：(87)×(137)㎝　深さ：18㎝

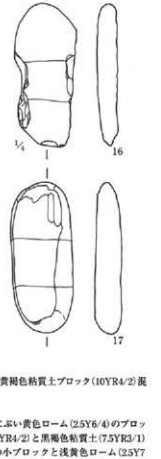
構造　本住居も北東部の調査に留まったため全容を詳らかにできなかったが、プランは概ね方形に近い隅丸方形状と想定される。規模は不明だが古墳時代の竪穴住居の規模と柱穴掘削位置との関係の調査成果（石守2000）から凡そ一辺4.4m程度の規模のものと推定される。

本住居は二つの床下土坑を伴う掘り方を有し、これを黒褐色粘質土等で埋め戻し床面が作られている。



（袖）
1：にぶい黄色ローム（2.5Y6/4）：灰褐色粘質土（7.5YR4/2）の小ブロックを混入
（掘り方覆土）
2：黄褐色粘質土（10YR5/6）・にぶい黄褐色粘質（10YR4/3）のブロック混土：褐灰色粘質土（10YR4/1）ブロック混入／3：にぶい黄褐色粘質土（10YR5/4）と浅黄色ローム（2.5Y7/4）のブロック混土：焼土粒と褐灰色粘質土（10YR5/1）小ブロック混入／4：明黄褐色ローム（10YR6/6）：にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）と若干の焼土ブロック・粒混入／5：褐色粘質土（7.5YR4/3）：浅黄色ローム（2.5Y7/4）と焼土（5YR5/5）小ブロック混入／6：灰黄褐色粘質土（10YR5/2）：浅黄色ローム（2.5Y7/4）ブロック・粒と若干の焼土粒混入／7：黄褐色粘質土（2.5Y5/6）とにぶい黄褐色粘質土（10YR5/4）：弱い焼土化見る。焼土小ブロックと若干の炭化物・浅黄色ローム（2.5Y7/4）粒混入／8：褐灰色粘質土（7.5YR4/1）：弱い焼土化見る。焼土粒・にぶい黄色粘質土（2.5Y6/3）粒混入／9：灰黄褐色粘質土（10YR4/2）：浅黄色ローム（2.5Y7/4）と焼土粒（5YR5/8）混入
（煙道部天井）
10：にぶい黄橙色粘質土（10YR6/3）：焼土粒・土器含む。煙道上位は弱く焼土化／11：明赤褐色焼土（5YR5/6）：粘質土（地山）の焼土化したもの／12：灰褐色粘質土（7.5YR6/2）／13：灰褐色粘質土（7.5YR5/2）／14：灰赤色粘質土（2.5YR6/2）／15：橙色焼土（2.5YR6/6）：14層土の焼土化したもの

第41図　7号住居竈掘り方（左：A竈　右：B竈）と住居出土遺物（その2）



（1号床下土坑覆土）
1：灰褐色(7.5YR4/2)・灰黄褐色(10YR4/2)粘質土と浅黄色ローム(2.5Y7/4)のブロック混土：やや粗。少量の焼土粒含む／2：にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3)と浅黄色ローム(2.5Y7/4)のブロック混土：中程中心に焼土粒混入／3：暗灰黄褐色粘質土(2.5Y5/2)と浅黄色ローム(2.5Y7/4)に焼土の入るブロック混土：黒褐色粘質土(10YR3/1)の小ブロック少量混入

（掘り方覆土）
4：黒褐色粘質土(10YR3/1)：にぶい黄色ロームブロック(2.5Y6/4)混入／5：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)とにぶい黄色(2.5Y6/3)と浅黄色(2.5Y7/4)のロームの小ブロック層／6：にぶい黄橙色粘質土(10YR6/3)：灰褐色粘質土(7.5YR4/2)のブロックやや多く混入／7：オリーブ褐色粘質土(2.5Y4/3)：灰黄褐色粘質土ブロック(10YR4/2)混入

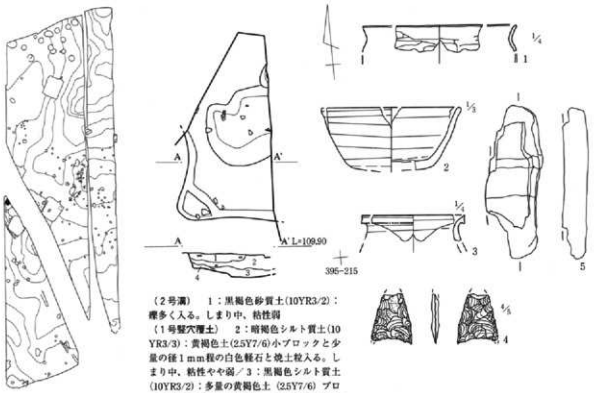
（2号床下土坑覆土）
8：黒褐色粘質土(10YR3/1)とにぶい黄色ローム(2.5Y6/4)のブロック混土／9：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)と黒褐色粘質土(7.5YR3/1)のブロック混土：焼土(5Y1/8)の小ブロックと浅黄色ローム(2.5Y7/3)粒と少量の炭化物粒混入／10：灰オリーブ色土(7.5Y5/2)に褐灰色(10YR4/1)の入る小ブロックの混土：焼土(5Y1/8)粒と浅黄色ローム(2.5Y7/4)の小ブロック混入／11：灰黄褐色(10YR6/2・5/2)・褐灰色(10YR4/1)粘質土とにぶい黄色ローム(2.5Y6/4)のブロック混土：黒褐色粘質土(10YR3/1)と明オリーブ灰色ローム(2.5GY7/1)と焼土の小ブロック若干混入

第42図　7号住居掘り方と住居出土遺物（その3）

2基の床下土坑は共に竈築造に伴う床下粘土坑と認識されるが、北東の床下土坑1は住居の床形成後に掘削され、南西の床下土坑2は埋め戻し後に住居の床が貼られている。

床面に於いては北東部の柱穴1基を確認したが、調査範囲が限定的だったこともあって貯蔵穴は特定できなかった。尚、柱穴断面に残る柱痕は径20cm程を測るものであった。

竈は東壁に設けられ、二つの竈が接続して作られている。設置箇所は調査区の南の際に位置し、明確ではないが、上述の本住居の推定規模に照らすとやや南寄りに位置していることになる。左（北）側のA竈の右袖と右（南）側のB竈の左袖は共有するもので、両竈は同時に使用されたものと判断される。しかし前述の床下土坑の掘削時期の違いから築造の時期には時間差があったものと認識されるものの、何れが古く作られたものかは特定できなかった。A・B竈は共に壁面を跨ぐ前後に長い隅丸長方形プランの掘り方を有し、これを粘質土で埋め戻して燃焼面を作り出し、共に燃焼部は方形のプランを呈している。袖は主に掘り残しで形成されているが天井部の形態は詳らかでない。煙道はA・B竈共に緩やかに上るトンネル構造であるが、A竈は70cm付近で垂直方向に立ち上がり、この付近には土師器甕が設



（２号溝）　１：黒褐色砂質土(10YR3/2)：炭多く入る。しまり中、粘性弱
（１号竪穴覆土）　２：暗褐色シルト質土(10YR3/3)：黄褐色土(2.5Y7/6)小ブロックと少量の径１mm程の白色軽石と焼土粒入る。しまり中、粘性やや弱／３：黒褐色シルト質土(10YR3/2)：多量の黄褐色土（2.5Y7/6）ブロックと少量の焼土粒子入る。しまり中、粘性やや弱

第43図　上大塚遺跡

設置されていた形跡が窺われる。またＢ竈の煙道は先方が失われて先端の状況は確認できなかった。両竈とも燃焼部上半部は強く焼土化し、Ｂ竈煙道の天井部の焼土化も顕著であった。

9　１号竪穴（第39・42図、PL14・23）

概要　１号竪穴は谷地形西部の遺構集中域の一角に在り、後述する２号溝に切られる。東側と西・北側が調査区外に出ていて全体は調査できなかった。竪穴住居とは異なるため竪穴遺構としたが、竪穴住居の掘り方である可能性は残る。

遺物　本遺構からは土師器片を中心に若干の出土遺物を得たが、この中には土師器甕（１）、須恵器坏（２）、壺（３）、こも編み石（４）が見られた他、碗形鉄滓（５）の出土も見られた。

時期　本遺構の時期は明瞭ではないが８世紀後半に前後する時期の所産と認識される。

規模　径：300×152cm　深さ：43cm

構造　本遺構の全容はつまびらかでないが、概ね隅丸方形様のプランを呈する。

掘削形態は竪穴住居掘り方に似ており、調査範囲中央に径114×(128)cm、深さ20cmを測る土坑状の掘り込みを持つなど、底面には凹凸が見られる。

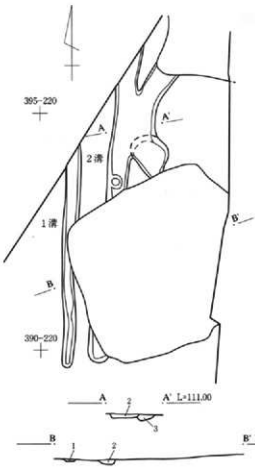
10　２面（Ⅱ区）の溝群（PL10航空写真参照）

概要　２面ではⅡ区で北部に２条、中東部に１条、南東部で２条の溝を調査した。このうち１・２号溝は北側、５号溝は南側が調査区外に伸びている。

また２号溝は北部で北方向と北東方向に分岐する２条の溝から成るが、北東に分岐する溝の方が古い。加えて１・２号溝は１号住居或いは１号竪穴と重複するが何れも溝遺構の方が新しい。

尚、各溝の掘削意図は特定できなかった。

遺物　各溝からの出土遺物は認められなかったが、２号溝の１号竪穴重複部分では礫が集中的に出土している。



〔A－A′セクション〕
（新2号溝覆土）
1：黒褐色砂質土(10YR3/2)：径1mm程の白色軽石、黄褐色土(10YR7/6)粒入る。しまりやや弱、粘性弱
（旧2号溝覆土）
2：灰黄褐色砂質土：黄褐色土(10YR7/6)小ブロックと少量の径1mm程の白色軽石入る。しまり中、粘性弱

〔B－B′セクション〕
（1号溝）
1：褐灰色砂質土(10YR4/1)：黄褐色土(10YR7/6)ブロック入る。しまりやや弱、粘性弱
（2号溝）
2：A－A′－1層に同じ

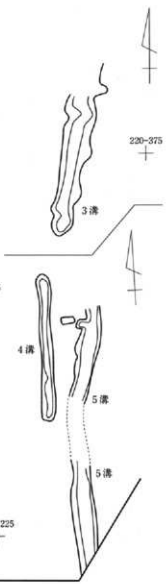
号溝は途中で途切れており、また上述のように1・2（新）・5号溝は調査区外に出るため全容を把握できなかった。

走行は5号溝がく字状に屈曲する以外は直線的で、走行の方向はN－Eで1号溝は2°、2号溝（旧）は32°、2号溝（新）は6°、3号溝は13°、4号溝は1°、5号溝は南部

時期　出土遺物もなく本溝群の時期は特定できなかったが、1・2号溝は重複関係から凡そ平安時代以降の所産であることは確認できた。また確認面及び覆土の状態に照らしてこれらの溝は律令期以降の所産と認識され、中世に下る可能性も残している。

規模　1号溝　長さ：4.7m　幅：31cm　深さ：5cm
2号溝　長さ：6.7m　幅：48cm　深さ：11cm
（旧2号溝）　長さ：1.4m　幅：55cm　深さ：12cm
3号溝　長さ：3.7m　幅：69cm　深さ：—cm
4号溝　長さ：3.1m　幅：31cm　深さ：—cm
5号溝　長さ：5.7m　幅：49cm　深さ：—cm

構造　Ⅱ区2面の各溝は全体的に浅いもので特に5



第44図　2面（Ⅱ区）溝群

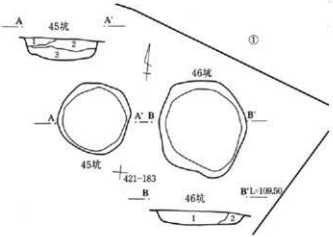
で０°、北部で12°を向くものであった。

各溝は浅かったため、特に３・５号溝の側のラインに揺れが見られたが、全体としてその掘削形態は箱堀状を呈していた。

11　２面の土坑・ピット群

（第45～49図、PL15・16）

概要　２面に於いては66基の土坑と80基のピットを確認、調査した。分布については　（54頁に続く）



〔60号土坑〕

（60号土坑覆土）

1：下記16号土坑－1層に同じ

（近・現代耕作痕覆土）

2：黒褐色砂質土（10YR2/2）：径1mm程の白色軽石、黄褐色土（2.5Y7/6）小ブロック入る。しまり中、粘性弱

3：黒褐色砂質土：（10YR2/2）：径１mm程の白色軽石と多くの黄褐色土（2.5Y7/6）ブロック及び同色の砂入る。しまり中、粘性弱

〔16号土坑〕

（近・現代耕作痕覆土）

1：灰黄褐色砂質土（10YR5/2）：径5mm以下の白色軽石入る。

（16号土坑覆土）

2：黒褐色シルト質土（10YR3/2）：黄褐色土（2.5Y7/6）ブロック多く入る。しまり中、粘性中

〔14・15号土坑〕

（14号土坑覆土）

1：黒褐色砂質土（10YR3/2）：径１mm程の白色軽石と少量の黄褐色土（2.5Y7/6）ブロック入る。しまり中、粘性弱

（15号土坑覆土）

2：黒褐色砂質土（10YR3/2）：黄褐色土（2.5Y7/6）ブロック多量に入る。しまり中、粘性弱

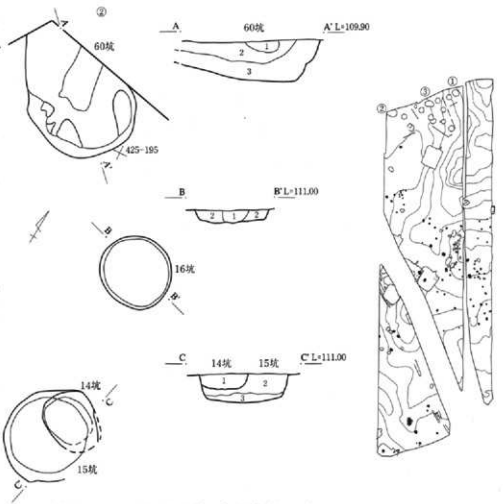
3：黒褐色砂質土（10YR3/1）：黄褐色土（2.5Y7/6）粒入る。しまり中、粘性弱

〔45号土坑覆土〕

1：黒褐色土（10YR3/2）：層（10YR3/2）、砂質に近いシルト質。径１mm程の白色軽石、黄褐色土（2.5Y7/6）ブロックが入る／２：黒褐色土（10YR3/1）：粘質に近いシルト質。黄褐色土（2.5Y7/6）粒入る。しまりやや強、粘性中／３：黒褐色土（10YR3/2）：砂質に近いシルト質土、黄褐色土（2.5Y7/6）ブロック多量に入る。しまり中、粘性やや弱

〔46号土坑〕

1：黒褐色砂質土（10YR3/2）：黄褐色土（2.5Y7/6～6/6）ブロックが多く入る。しまり中、粘性弱／２：に近い黄褐色シルト質土（10YR4/3）：黄褐色土（2.5Y7/6）ブロック入る。しまり中、粘性中



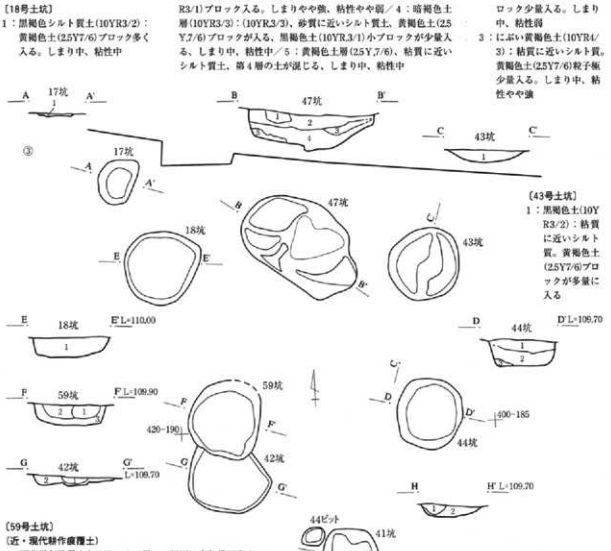
第45図の１　Ⅰ区２面の土坑・ピット群（その１）

〔17号土坑〕
1：黒褐色粘質土(10YR3/2)：径１mm程の白色軽石、少量の黄褐色土(2.5Y6/6)ブロックが入る。しまりやや強、粘性強

〔18号土坑〕
1：黒褐色シルト質土(10YR3/2)：黄褐色土(2.5Y7/6)ブロック多く入る。しまり中、粘性中

〔44号土坑〕
(近・現代耕作痕覆土)
1：灰黄褐色砂質土(10YR5/2)：径５mm以下の白色軽石入る。
(47号土坑覆土)
2：暗褐色シルト質土(10YR3/4)：径１mm程の白色軽石、黄褐色土(2.5Y7/6)粒子入る。しまり中、粘性やや弱／３：にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3)：黄褐色土(2.5Y7/6)粒、少量の黒褐色土(10YR3/1)ブロック入る。しまりやや強、粘性やや弱／４：暗褐色土層(10YR3/3)：(10YR3/3)、砂質に近いシルト質土、黄褐色土(2.5Y.7/6)ブロックが入る、黒褐色土(10YR.3/1)小ブロックが少量入る、しまり中、粘性中／５：黄褐色土層(2.5Y.7/6)、粘質に近いシルト質土、第４層の土が混じる、しまり中、粘性中

〔44号土坑〕
1：黒褐色土(10YR3/2)：砂質に近いシルト質。径１mm程の白色軽石、黄褐色土(2.5Y7/6)ブロック入る
2：黒褐色砂質土(10YR3/1)：黄褐色土(2.5Y7/6)ブロック少量入る。しまり中、粘性弱
3：にぶい黄褐色土(10YR4/3)：粘質に近いシルト質。黄褐色土(2.5Y7/6)粒子極少量入る。しまり中、粘性やや強



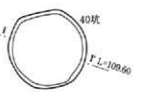
〔43号土坑〕
1：黒褐色土(10YR3/2)：粘質に近いシルト質。黄褐色土(2.5Y7/6)ブロックが多量に入る

〔59号土坑〕
(近・現代耕作痕覆土)
1：灰黄褐色砂質土(10YR5/2)：径５mm以下の白色軽石入る。
(59号土坑覆土)
1：黒褐色砂質土：径１mmの白色軽石と多くの黄褐色土(2.5Y7/6～6/6)ブロック入る。しまり中、粘性弱
2：黒褐色土(10YR3/2)：砂質に近いシルト質土。黄褐色土(2.5Y7/6)ブロックが多量に入る。しまり中、粘性やや弱

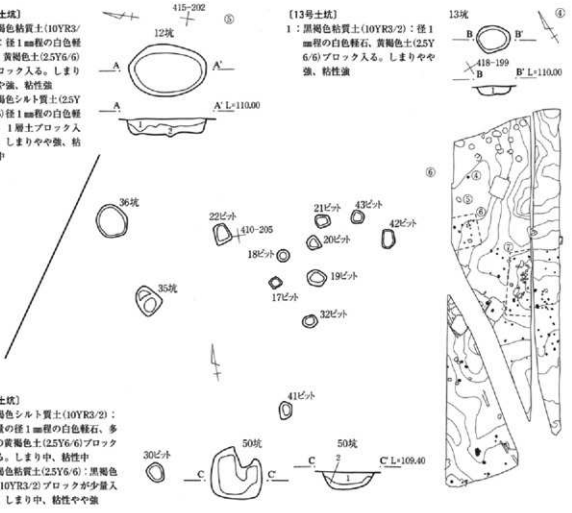
〔41号土坑〕
(近・現代耕作痕覆土)
1：灰黄褐色砂質土(10YR5/2)：径５mm以下の白色軽石入る。
(41号土坑覆土)
2：40号土坑－1層に同じ

〔42号土坑〕
(近・現代耕作痕覆土)
1：59号土坑－１層に同じ
(42号土坑覆土)
2：暗褐色土(10YR3/3)：粘質に近いシルト質土。径１mm程の白色軽石、黄褐色土(2.5Y7/6)ブロックが入る。しまりやや強、粘性中

〔40号土坑覆土〕
1：黒褐色砂質土(10YR3/2)：黄褐色土(2.5Y7/6～6/6)ブロックが多く入る。しまり中、粘性弱



第45図の２　Ⅰ区２面の土坑・ピット群（その１）

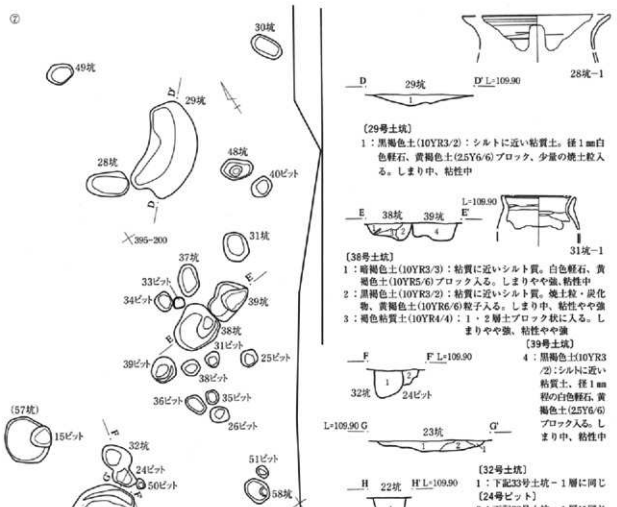


第46図の１　Ⅰ区２面の土坑・ピット群（その２）

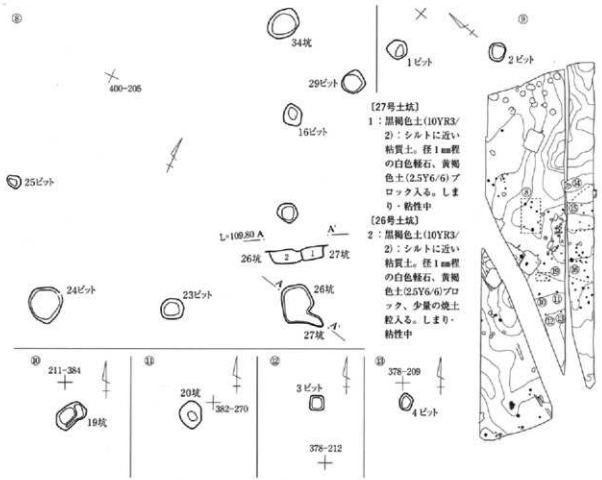
表２　Ⅰ・Ⅱ区土坑・ピット土層観察記録一覧（断面図掲載分を除く）

土層Ａ：黒褐色土(10YR3/2)：シルトに近い粘質土。径１mm程の軽石入り黄褐色土(2.5Y6/6)ブロック入る。締まり、粘性中
土層Ｂ：黒褐色土(10YR3/2)：シルトに近い粘質土。径１mm程の軽石と黄褐色土ブロック、少量の焼土粒入る。締まり・粘性中
土層Ｃ：黒褐色土(10YR2/2)：砂質に近いシルト質。黄褐色土(10YR6/6)小ブロック入る・しまり・粘性やや弱
―　：土層記録なし

遺構	番号	土層型	遺構	番号	土層型	遺構	番号	土層型	遺構	番号	土層型	遺構	番号	土層型	遺構	番号	土層型
Ⅰ区土坑	19	B	Ⅰ区土坑	66	A	Ⅰ区ピット	6	B	Ⅰ区ピット	35	B	Ⅰ区ピット	56	A	Ⅰ区ピット	72	A
	20	A		1	B		7	B		36	B		57	A		75	A
	21	B		2	B		8	A		37	A		58	A		76	A
	24	B	Ⅰ区ピット	3	A		10	A		38	A		59	A		77	A
	25	0		4	A		11	A		39	B		60	A		78	A
	28	A		5	A		12	A		40	B		61	A		79	A
	30	A		25	―		13	A		41	A		62	B		80	A
	31	B		26	―		15	C		42	A		63	A		81	C
	34	A		27	B		16	B		43	A		64	A		82	A
	35	A		28	A		17	A		44	A		65	A			
	36	A		29	B		18	A		50	A		66	A			
	37	A		30	A		19	A		51	―		67	A	Ⅱ区ピット	45	A
	48	A		31	―		20	A		52	B		68	B		46	A
	49	A		32	A		21	B		53	A		69	A		47	A
	57	A		33	A		22	A		54	A		70	B		48	A
	65	A		34	B		23	B		55	A		71	A		49	A



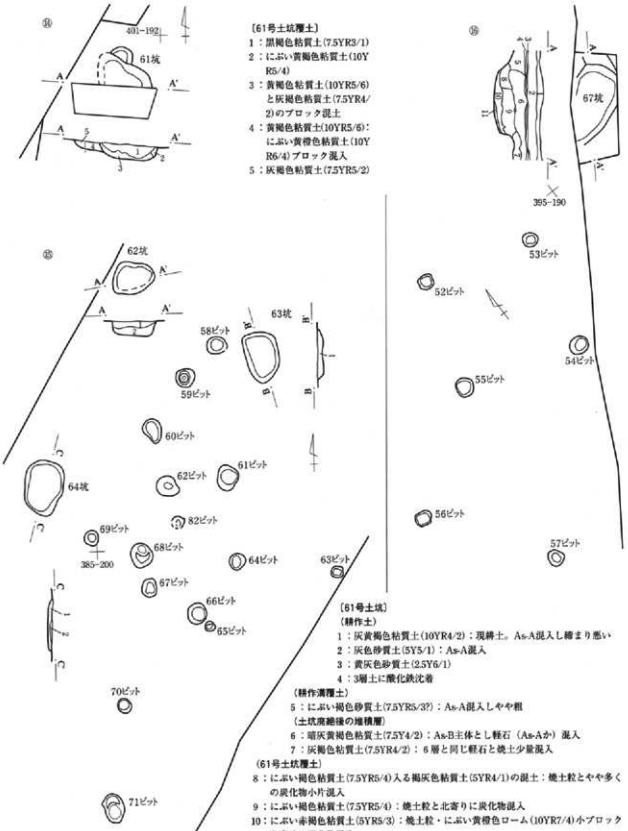
第46図の２　Ⅰ区２面の土坑・ピット群（その２）と出土遺物



第47図の１　Ⅰ区２面の土坑・ピット群（その３）

表３　Ⅰ区２面土坑一覧

No	径	深さ	平面形	底形	所在区域・備考	No	径	深さ	平面形	底形	所在区域・備考
11	97×76	12	卵	丸	中南、２住切る	37	50×32	5	楕円	平	中央部
12	123×82	25	卵	平	中西部	38	74×64	23	隅丸台	尖	中央部
13	53×42	9	楕円	平	北西部	39	68×50	28	長方	丸	中央部
14	(102)×80	22	隅丸台	平	北西部	40	126×122	20	円	平	中北部
15	160×139	49	円	丸	北西部	41	94×86	18	五角	平	中北部
16	118×110	22	円	平	北西部	42	(134)×(100)	17	隅丸三角	平	中北部
17	72×64	8	隅丸台	平	北西部	43	112×110	57	円	片刃	中北部
18	164×156	33	円	平	北西部	44	110×106	19	円	平	中北部
19	52×30	19	長六角	丸	中南部	45	112×110	27	円	丸	中北部
20	38×36	19	台	尖	中南部	46	151×140	26	楕円	平	中北部
21	32×20	9	船	平	中央部	47	202×128	74	不定楕円	尖状	中北部
22	52×42	46	楕円	丸	中央部	48	51×34	23	船形	尖	中央部
23	180×98	34	楕円	丸	中央部	49	40×32	20	隅丸台	平	中央部
24	55×52	23	円	丸	中央部	50	(82)×82	28	隅丸方	平	中西部
25	23×18	6	楕円	丸	中央部	56					
26	59×51	23	長方	平	中央部	(57)	72×(70)	7	円	平	中央部
27	(33)×27	20	溝	平	中央部	58	43×34	13	楕円	平	中南部
28	68×40	17	楕円	平	中央部	59	(124)×114	31	円	平	中北部
29	154×90	22	幅広弧	船底	中央部	60	231×171	60	楕円	船底	北西、側風水か
30	50×30	18	長円	平	中央部	61	(62)×(81)	18	不整	平	中東部
31	47×38	24	楕円	平	中央部	62	66×52	16	隅丸三角	平	中東部
32	75×42	44	瓢箪	丸	中央部	63	80×53	9	横長台	平	中東部
33	128×70	21	楕円	船底	中央部	64	88×64	8	隅丸長方	平	中東部
34	53×42	30	楕円	平	中央部	65	48×28	26	瓢箪	両尖	南東部
35	43×36	26	隅丸台	丸	中西部	66	53×42	3	水滴	平	南東部
36	52×49	19	楕円	平	中西部	67	127×77	28	隅丸長方	平	中東部、焼成痕



〔61号土坑覆土〕
1：黒褐色粘質土(7.5YR3/1)
2：にぶい黄褐色粘質土(10YR5/4)
3：黄褐色粘質土(10YR5/6)と灰褐色粘質土(7.5YR4/2)のブロック混土
4：黄褐色粘質土(10YR5/6)：にぶい黄橙色粘質土(10YR6/4)ブロック混入
5：灰褐色粘質土(7.5YR5/2)

〔61号土坑〕
（耕作土）
1：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)：現耕土。As-A混入し締まり悪い
2：灰色砂質土(5Y5/1)：As-A混入
3：黄灰色砂質土(2.5Y6/1)
4：3層土に酸化鉄沈着
（耕作溝覆土）
5：にぶい褐色砂質土(7.5YR5/3?)：As-A混入しやや粗
（土坑廃絶後の堆積層）
6：暗灰黄褐色粘質土(7.5Y4/2)：As-B主体とし軽石（As-Aか）混入
7：灰褐色粘質土(7.5YR4/2)：6層と同じ軽石と焼土少量混入

〔61号土坑覆土〕
8：にぶい褐色粘質土(7.5YR5/4)入る褐灰色粘質土(5YR4/1)の混土：焼土粒とやや多くの炭化物小片混入
9：にぶい褐色粘質土(7.5YR5/4)：焼土粒と北斎りに炭化物混入
10：にぶい赤褐色粘質土(5YR5/3)：焼土粒・にぶい黄橙色ローム(10YR7/4)小ブロックと多くの炭化物混入
11：灰褐色粘質土(5YR4/2)：焼土・炭化物・にぶい黄橙色ローム(10YR7/4)小ブロック多く入る

第47図の２　Ⅰ区２面の土坑・ピット群（その３）

表4　Ⅰ区２面ピット一覧

No.	径	深さ	平面形	底形	所在区域・備考
1	30×30	20	五角	尖	中南部
2	29×26	9	方	平	中南部
3	23×22	17	方	平	中南部
4	25×20	10	隅丸長方	平	中南部
5	35×33	35	隅丸方	丸	中央部
6	31×29	13	方	丸	中央部
7	24×22	23	台	平	中央部
8	20×18	10	楕円	丸	中央部
9	26×19	19	隅丸長方	丸	中央部
10	20×18	14	台	船底	中央部
11	20×18	6	方	平	中央部
12	30×22	29	長方	平	中央部
13	24×18	12	菱	船底	中央部
14	34×31	34	隅丸長方	丸	中央部
15	34×32	24	隅丸三角	平	中央部
16	32×29	12	方	丸	中央部
17	17×15	9	方	平	中西部
18	20×19	9	円	丸	中西部
19	29×25	8	五角	丸	中西部
20	22×19	12	台	丸	中西部
21	23×20	9	隅丸台	平	中西部
22	31×27	21	台	平	中西部
23	36×32	22	隅丸方	平	中央部
24	55×54	23	楕円	平	中央部
25	27×26	12	隅丸方	丸	中央部
26	29×24	31	長方	尖	中央部
27	欠		番		
28	32×28	22	隅丸方	平	中央部
29	36×32	33	隅丸方	平	中央部
30	30×26	20	楕円	平	中西部
31	24×23	16	隅丸三角	丸	中央部
32	23×19	13	楕円	平	中西部
33	18×17	4	方	平	中央部
34	26×28	14	隅丸方	平	中央部
35	22×20	12	隅丸方	平	中央部
36	35×24	15	隅丸長方	平	中央部
37	27×22	15	長方	平	中央部
38	26×25	28	隅丸方	丸	中央部
39	40×39	47	楕円	尖	中央部
40	36×28	14	隅丸船	平	中央部
41	28×20	12	隅丸台	丸	中西部
42	29×21	6	長方	平	中西部
43	21×20	6	隅丸台	平	中西部
44	36×29	23	楕円状	平	中北部
50	17×13	7	長方	丸	中央部
51	20×16	11	楕円	丸	中央部
52	24×23	21	隅丸方	平	中東部
53	24×22	11	楕円	丸	中東部
54	31×28	19	楕円	丸	中東部
55	30×28	18	隅丸方	平	中東部
56	26×22	16	長方	平	中東部
57	16×14	12	隅丸台	丸	中東部
58	32×26	15	楕円	丸	中東部
59	30×30	38	隅丸台	尖	中東部
60	40×30	15	空豆	平	中東部
61	40×33	60	隅丸台	平	中東部
62	38×32	38	水滴	尖	中東部
63	18×18	11	方	平	中東部
64	26×24	26	隅丸方	丸	中東部
65	16×15	15	隅丸三角	丸	中東部
66	32×30	38	楕円	平	中東部
67	28×24	32	隅丸長方	丸	中東部
68	38×34	33	楕円	尖	中東部
69	22×22	17	円	丸	中東部
70	24×21	18	隅丸長方	平	南東部
71	(22)×33	30	楕円か	平	南東部
72	36×34	15	楕円	平	南東部
73	(24)×20	5	隅丸長方	平	南東部
74	44×36	17	楕円	平	南東部
75	24×24	30	円	丸	南東部
76	欠		番		
77	31×29	22	隅丸三角	尖	南東部
78	23×22	23	隅丸三角	尖	南東部
79	38×(38)	42	隅丸方	尖	南東部
80	(36)×(30)	19	水滴	丸か	南東部、礫入る
81	33×31	76	楕円	平	南東部
82	(19)×(19)	6	隅丸方	丸	中東部

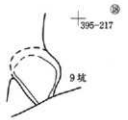
表5　Ⅱ区２面土坑・ピット一覧

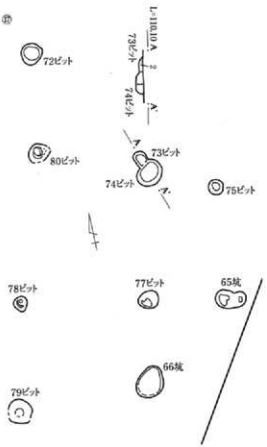
No.	径	深さ	平面形	底形	所在区域・備考
土坑					
1	87×64	37	隅丸長方	平	中央部
2	79×58	52	楕円	平	中央部
3	49×45	23	方	平	中央部
4	67×44	42	隅丸長方	平	中央部
5	79×58	64	隅丸長方	丸	中央部
6	60×54	22	方	平	中央部
7	63×50	34	隅丸長方	平	中央部
8	78×54	50	楕円	丸	中央部
9	(74)×71	11	水滴か	平	北部
10	(44)×(40)	48	楕円か	丸か	中央部
51	104×61	25	隅丸長方	丸	南東部
52	49×48	23	隅丸方	平	南東部
53	63×57	12	楕円	丸	中南部
54	55×41	27	楕円	船底	中南部
55	168×120	19	凸	平	中南、84cm長凸
ピット					
45	28×14	4	長方	平	南東部
46	30×28	10	隅丸方	平	南東部
47	22×22	14	隅丸方	丸	中南部
48	15×14	8	方	平	中南部
49	38×35	13	楕円	丸	南東部

22頁に述べたので詳細は繰り返さないが、凡そ北・中・南の３群に分かれる。

２面の土坑・ピット群の掘削意図等は、60・61号土坑が風倒木痕と認識される他は特定できず、ピットから建物を想定することもできなかった。尚、67号土坑は壁面が焼け、長時間に亘り燃焼行為が行わ

れたことが認められるが、燃焼行為の目的は特定できなかった。また北部の円形状プランの大型坑群は集中してあることや形態が近似していること、その規模から推して貯蔵に関係するものである可能性が考えられる。





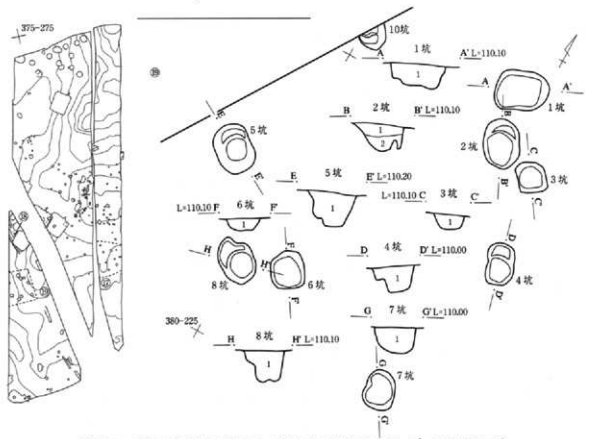
〔73・74号ピット〕
〔74号ピット覆土〕
1：黒褐色土（10YR3/2）：シルトに近い粘質土。径1mm程の白色軽石、黄褐色土(2.5Y6/6)ブロック入る。しまり・粘性中
〔73号ピット覆土〕
2：1層に同じだが1層に比し黄褐色土ブロック多く締まりやや弱い

〔1号土坑〕
1：黒褐色粘質土層(10YR3/2)：黄褐色粘質土(10YR6/6)ブロック入る。しまり・粘性やや強

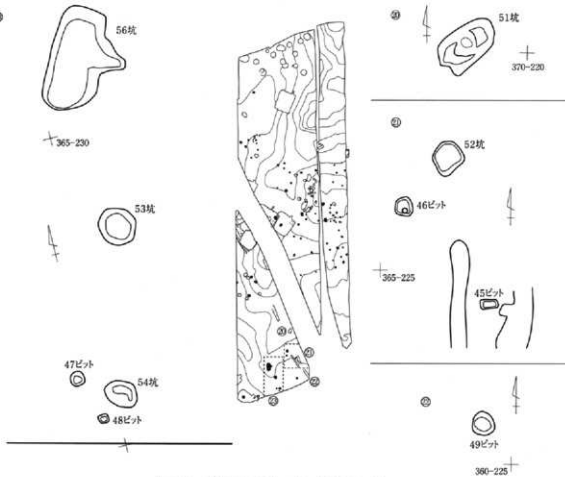
〔2号土坑〕
1：1号土坑－1層に同じ
2：基本的に1層に同じだが黄褐色粘質土ブロックの量多い

〔3・4・5・6・8・(10)号土坑〕
1：1号土坑－1層に同じ

〔7号土坑〕
1：1号土坑－1層に同じだが焼土粒少量入る



第48図　Ⅰ区２面の土坑群（その４、左上）とⅡ区２面の土坑・ピット群（その１）



第49図　Ⅱ区２面の土坑・ピット群（その２）

遺物　土坑・ピット群のうち。区の11・15・17・19・22・24・25・27・28・29～32・36～40・48・50・59・67号土坑及び５・11・22・23・39・40号ピット、Ⅱ区の１～３・７・８・25号土坑からは28・31号土坑出土土師器甕（28坑－１・31坑－１）に代表されるような土師器甕片を中心とする種類の遺物の出土が見られた。

時期　土坑・ピット群各遺構の時期は確認面等の関係から概ね律令期の所産とできるだけで、時期特定には至らなかった。

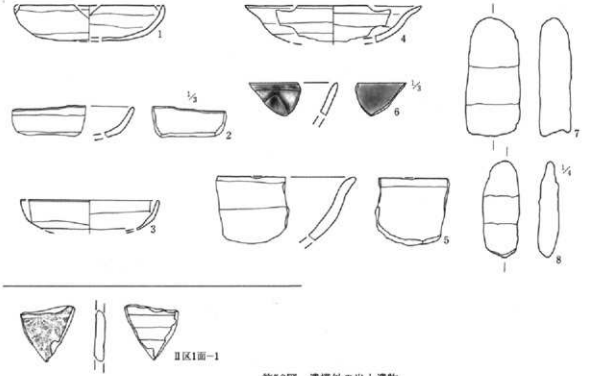
規模　個々の土坑、ピットの規模については表３～５を参照願いたい。

土坑、ピットは凡その大きさで分けたため明確に区分されるものではないが、土坑に分類したものの径は23～231㎝、平均88.0㎝、深さは３～74㎝、平均30.4㎝、ピットに分類したものの径は15～55㎝、平均26.2㎝、深さは４～76㎝、平均19.4㎝を測った。

構造　土坑のうち長径、短径双方が測定できたものについてみると、径50㎝未満の小型ものは21基、凡そ１ｍを超える大型のものは21基あり、中型の中ものが25基あった。またピットは径30㎝未満の小型のもの51基、径40㎝以上の大型のもの２基、中型のものが22基であった。

プランは土坑では円形に近いもの13基、楕円形に近いもの28基、方形に近いもの６基、長方形に近いもの20基、その他が13基であり、ピットでは円形３基、楕円形17基、方形に近いもの24基、長方形に近いもの25基、その他が11基であった。

底形は土坑では平底48基、丸底24基、船底状７基、尖底７基であり、ピットでは平底41基、丸底28基、船底状２基、尖底９基であった。



第50図　遺構外の出土遺物

12　遺構外の出土遺物（第50図、PL23）

概要　2面に於いても遺構外の遺物の出土を見た。これらは前節（第2節）に述べた遺物包含層に含まれるものとも思われるが、遺物包含層下面から遺構確認が明瞭な下位の確認面までの間に出土した遺物であるため本節に掲載した。

これらの出土遺物は土師器片を中心としたものであったが、この中には土師器坏（1～5）があり、上位層から混入した遺物として青磁碗の破片（6）も見られた。

また層位不明の遺物としてこも編み石2点（7・8）を得ている。

第４章　鮎川藤ノ木遺跡で発見された遺構と遺物

第１節　１面の遺構と遺物

１　概要

鮎川藤ノ木遺跡の１面は北半と南半に別れ、前後者の間には調査前の区画境に起因する50cm程の段差があって北側の方が低くなっている。

確認面が浅いこともあって、確認した遺構は道路２条と北半部で確認した若干の小型ピット及び畠のサクに留まった。後２者の多くは現代のものと判断されたため調査対象としなかった。

また出土遺物は僅かであったが、この中には下に図示した陶器擂鉢片（１面－１）が見られた。

２　道路遺構　（第52図　図版24・29）

概要　１面では２条の道路跡を確認、調査した。前述の段差の北には１号道、南には２号道がそれぞれ在って、両者は10.5～11.25m隔たる平行に近い位置関係にあった。また１号道の西側と２号道の東側は調査区外に出ており、１号道の東寄りと２号道の西寄りが耕作等によって削ら取られていた。

両道共に硬化面が調査の発端となったが、２号道は硬化面確認後周囲を含め建設機械による掘削深度を弱めて表出し、１号道は遺構確認段階に確認した。

昭和16年の地籍図に照らすと１号道はこれには記載されず、２号道は大字鮎川字藤木地内のほぼ中程を東西に横切る圃場整備前の道路位置に概ね一致する。両者がほぼ並行にあることから１号道から２号道への変遷が考慮される。

遺物　土師器片等僅かな遺物が得られたが、図示すべきものはなかった。

時期　上述の地図との照合や覆土の観察から両溝は共に近世後期以降の所産と判断され、特に２号道は戦後直ぐまでの使用が確認される

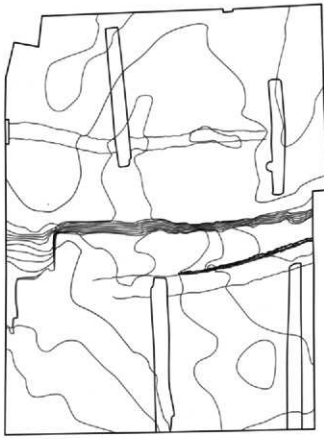
規模　１号道　長さ：20.7m　幅：140cm

２号道　長さ：18.0m　幅：164cm

側溝　幅：39cm　深さ：10cm

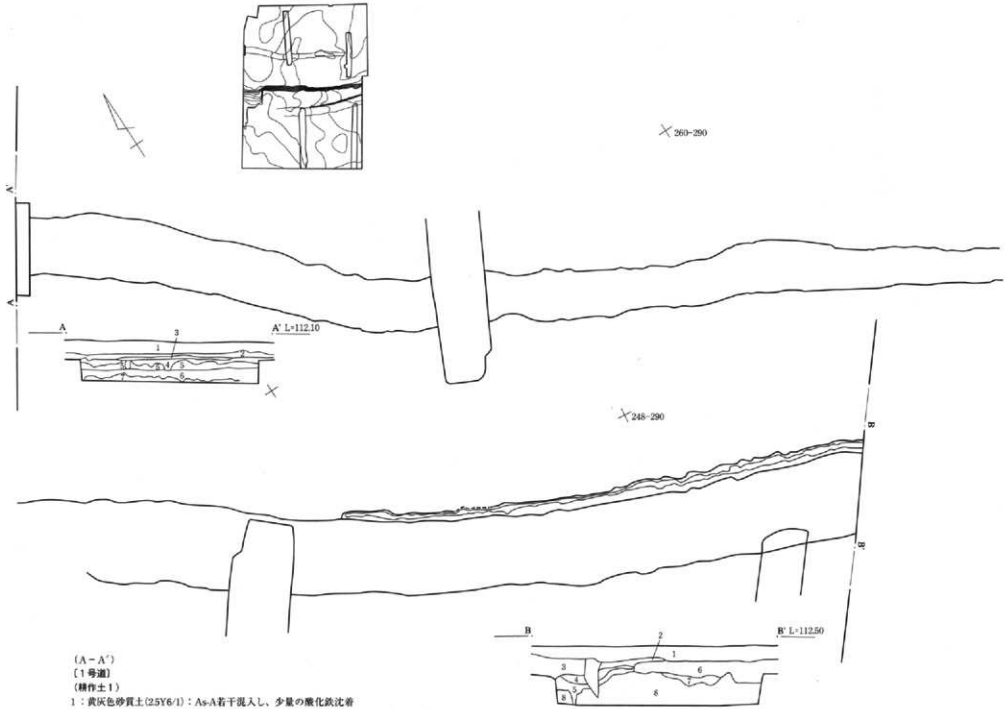
構造　両道共に東南東－西北西方向（北に対して平均で１号道は120°、２号道は110°）を向いており、その走行は南に極く緩やかに張る弧状を呈しているが、２号道では西端で走行が若干南に振れている。

両道共に確認された硬化面は平らであった。２号道は北側に浅い側溝を伴っていたが、１号道では側溝を確認することはできなかった。



1面－1

第52図　１面全体図（S=1/100）と出土遺物



（A－A'）
〔１号道〕
（耕作土１）
１：黄灰色砂質土（2.5Y6/1）：As-A若干混入し、少量の酸化鉄沈着
２：褐灰色砂質土（7.5YR5/1）：As-Aと若干の地山砂混入
（１号道硬化面）
３：褐灰色砂質土（10YR5/1）：若干のAs-A混入し、締まりあり
（耕作土２）
４：黄灰色砂質土（2.5Y5/1）：若干のAs-A混入（部分的に多し）
（地山）
５：黒褐色土（10YR3/1）：やや粘性あり。As-A少量混入するが元々は伴わない
６：黒褐色粘質土（10YR3/2）と７層土ブロックの混土：As-A少量混入するが元々は伴わない
７：にぶい黄橙色粘質土（10YR6/4）：明黄褐色に近いローム

（B－B'）
〔２号道〕
（耕作土）
１：表土、耕作土
２：褐灰色土（10YR6/1）：シルトに近い砂質土。褐色化した部分あり。しまり強い
３：褐灰色砂質土（10YR5/1）：１層に似るが、にぶい黄橙色土多く混じり白色軽石小粒含む。しまり中
（側溝覆土）
４：褐灰色砂質土（10YR5/1）：径２mm以下の白色軽石少量入る。しまりやや強い
５：褐灰色砂質土（10YR4/1）：径２mm以下の白色軽石少量入る。しまりやや弱
７：黒褐色粘質土（10YR3/1）：ごく少量の径３mm以下の白色軽石と黄褐色土ブロック少量入る。しまり強く粘性あり
（２号道硬化面）
６：灰黄褐色土（10YR4/2）：径３mm以下の白色軽石多く入る。上位層との境が赤褐色化する。しまりやや強い
（地山）
７：黒褐色粘質土（10YR3/1）：ごく少量の径３mm以下の白色軽石と黄褐色土ブロック少量入る。しまり強く粘性あり

第52図　上大塚遺跡

第２節　２面の遺構と遺物

１　概要

鮎川藤ノ木遺跡の２面では南東隅から北西隅部やや南寄りに北に張り出すように弧を描きながら抜けていく谷地形が在り、その両側南西部と北東部には微高地が認められた。微高地は南西側の方が北東側よりも高く下位層の砂礫層が表出していたが、律令期に於いても表土層が薄かったことが窺われる。建設機械での掘削を含め南西側の遺構確認は比較的容易であったが、特に谷地形部分は黒色土の中に遺構を検出することとなったため当該作業に苦慮した。

２面で確認された遺構には竪穴住居２軒、溝３条、土坑20基であった。このうち竪穴住居は調査区中央部の谷地形中に在り、北側の２号住居は微高地に掛かるように位置していた。溝は北半部に在った。土坑は全域に広がっていたが、主には南西側微高地と谷地形の境に集中域が見られた。

第51図　１面全体図と出土遺物

２　１号住居（第21～25図、PL25・26・28）

概要　本住居は調査区中央、谷地形中に位置する。２号溝、20号土坑と重複するが、２号溝に切られるものの、20号土坑との新旧関係は特定できなかった。

本住居は黒色土中に在ったためプラン確認等に苦慮し、また床面がやや不明瞭であったためサブトレンチを設定して床面の確認を行った。

住居覆度中に炭化物の混入が見られることから本住居は（焼却処分された）焼失家屋の可能性が考えられる。また竈左側の床面壁際には黒褐色粘質と土焼土の混土の塊やロームの塊が見られた。これらについては焼失住居に伴うものである可能性も有するが、その遺存が一つの区域に限定されて他にこうしたものが見られず、また焼失家屋に見られる土葺き材の遺存状況と異なるため竈の修築材と認識される。

遺物　土師器片を中心とした出土遺物を見たが土師器の甕（１～６）や小型台付甕（７）、須恵器の蓋（９）や坏（８）、或いはこも編み石(10)などが見られた。

時期　本住居は出土遺物から推して概ね８世紀前半頃の所産と認識される。

規模　径：485×314cm　深さ：52cm

竈　幅：(106)cm　奥行き：(68)cm

右袖　幅：45cm　長さ：20cm以上

掘り方　径：51×96cm　深さ：9c

貯蔵穴　径：49×55cm　深さ：16cm

床下ピット１　径：32×37cm
深さ：28cm

床下ピット２　径：46×48cm
深さ：50cm

床下ピット３　径：23×28cm
深さ：18cm

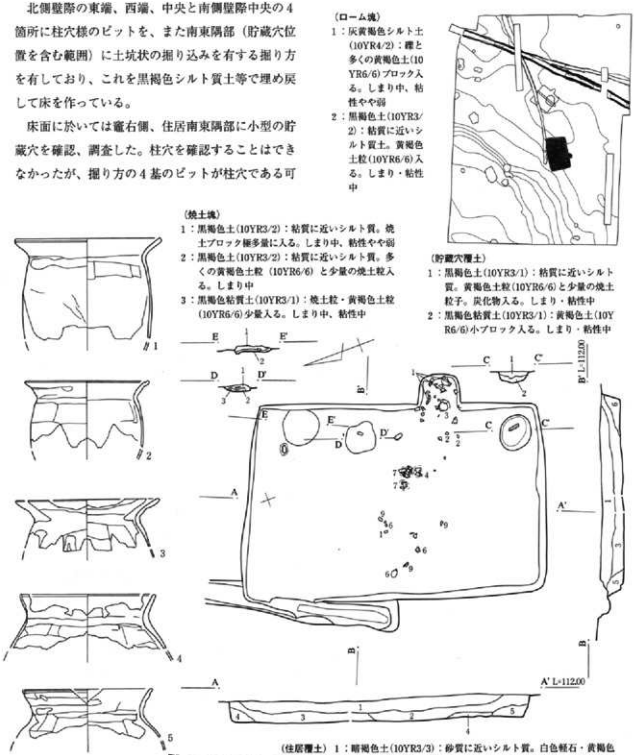
床下ピット４　径：50×44cm
深さ：25cm

貯蔵穴部掘り方　径：79×90cm
深さ：16cm

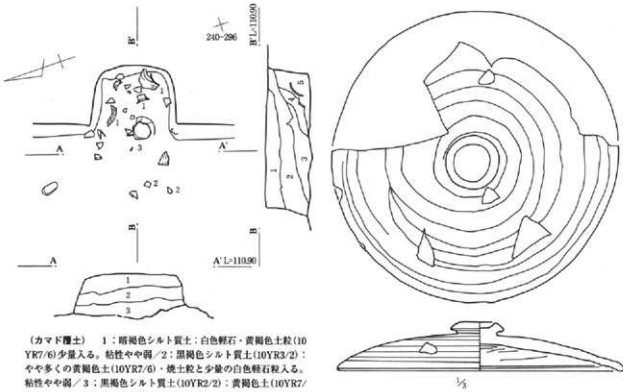
構造　本住居のプランは横長の長方形を呈する。

北側壁際の東端、西端、中央と南側壁際中央の４箇所に柱穴様のピットを、また南東隅部（貯蔵穴位置を含む範囲）に土坑状の掘り込みを有する掘り方を有しており、これを黒褐色シルト質土等で埋め戻して床を作っている。

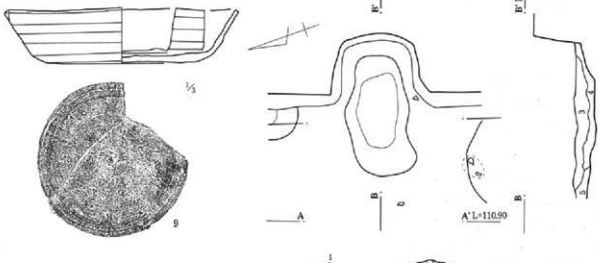
床面に於いては竈右側、住居南東隅部に小型の貯蔵穴を確認、調査した。柱穴を確認することはできなかったが、掘り方の４基のピットが柱穴である可能性が低くないと思われるが、床下のピット２・４

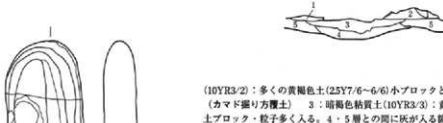


第54図　１号住居床上と住居出土遺物（その１）



（カマド覆土）　1：暗褐色シルト質土：白色軽石・黄褐色土粒(10YR7/6)少量入る。粘性やや弱／2：黒褐色シルト質土(10YR3/2)：やや多くの黄褐色土(10YR7/6)・焼土粒と少量の白色軽石粒入る。粘性やや弱／3：黒褐色シルト質土(10YR2/2)：黄褐色土(10YR7/6)小ブロックと少量の白色軽石粒、焼土ブロック入る。しまりやや強／4：暗褐色粘質土(10YR3/3)：多くの黄褐色土(2.5Y7/6～6/6)小ブロックと少量の焼土粒入る。／5：暗褐色粘質土(10YR3/3)：焼土粒少量入る。しまり・粘性中

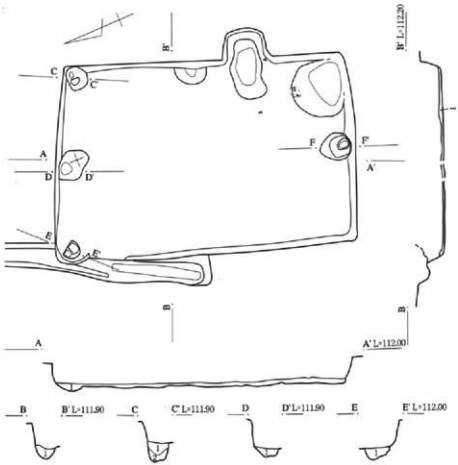




（袖材）　1：黒褐色シルト質土(10YR3/2)：黄褐色土(2.5Y7/6～6/6)粒と少量の焼土小ブロック・粒入る／2：黒褐色シルト質土(10YR3/2)：多くの黄褐色土(2.5Y7/6～6/6)小ブロックと少量の焼土粒入る

（カマド掘り方覆土）　3：暗褐色粘質土(10YR3/3)：黄褐色土(10YR7/6)ブロックと焼土ブロック・粒子多く入る。4・5層との間に灰が入る箇所あり／4：暗褐色粘質土(10YR3/3)：黄褐色土(10YR7/6)ブロックと、東側に多く焼土ブロックが、また少量の炭化物入る／5：黒褐色粘質土(10YR3/2)：白色軽石、黄褐色土(10YR7/6)ブロックと少量の焼土粒入る

第55図　1号住居竈（上）・竈掘り方（下）と住居出土遺物（その2）



第56図　１号住居掘り方

が南北壁際中央に相対して位置するため、これが棟持ち柱の柱穴であったものと解釈でき、この場合棟方向は竈を正面にした場合の垂直方向、即ち南北方向を向くことになる。

竈は東壁やや南寄りに位置している。壁面を跨いで浅い不整楕円形プランの掘り方を掘削し、これを暗褐色粘質土等で埋め戻して燃焼面を作っている。袖形を呈する燃焼部の壁面には焼土化が認められ、住居内両側には焼土等を含む黒褐色シルトを盛り上げて袖を作った痕跡が残っているが天井の構造や煙道部の状況は確認できなかった。

3　２号住居（第21～25図、PL26・28）

概要　本住居は調査区中央やや北寄りの谷地形の北東際に在り、竈を微高地側に削りこむようにして造られていた。南西隅部で２号溝、北東部で１９号土坑と重複していたのであるが、何れの遺構にも本住居は切られていた。

また本住居も１号住居同様に黒色土中に在ったためプラン確認など当初調査に苦慮し、一部記録化に不備も生じた。しかし竈付近を中心に残存状況は比較的良好であり、一定の成果を得ることができた。

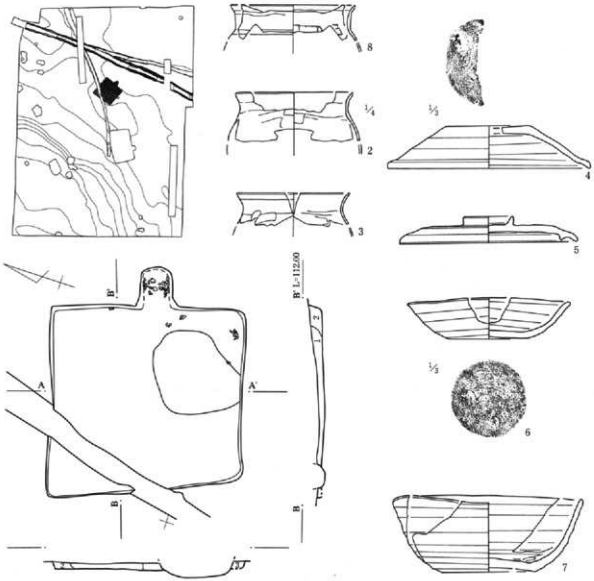
遺物　本住居からは量的にはさして多くはなかったが、土師器片を中心とした遺物の出土が見られたが、この中には土師器甕（１～３）、須恵器の蓋（４・５）・坏（６）・碗（７）も見られた。

時期　本住居は出土遺物から推して概ね９世紀前半頃の所産と認識される。

規模　径：315×304cm　深さ：25cm

竈　幅：(106)cm　奥行き：(68)cm

構造　プランはやや西壁南寄りが狭くなっているも



（住居覆土）
1：黒褐色シルト質土(10YR3/2)：径1mm程の白色軽石と少量の焼土粒入る。しまり中、粘性やや弱
2：黒褐色シルト質土(10YR3/1)：にぶい黄褐色土(10YR5/4)小ブロックと少量の径1mm程の白色軽石入る。しまり中、粘性中
3：暗褐色土（10YR3/3）：粘質に近いシルト質。径1mm程の白色軽石入る。しまり中、粘性やや弱

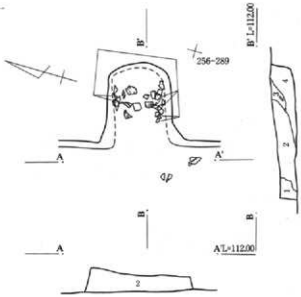
第57図　2号住居床上と住居出土遺物（その1）

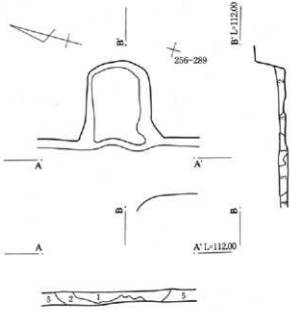
のの、概ね方形を呈するものであった。

本住居は余り凹凸の見られない掘り方を有しており、これをにぶい黄褐色粘質土等で埋め戻して床を作り出している。

柱穴、貯蔵穴は床面に於いても掘り方面に於いても確認することはできなかった。

竈は東壁中央に設けられている。住居の壁面を跨いで浅い掘り方を掘削し、これを褐灰色粘質土等で埋め戻して燃焼面を作っている。燃焼部は箱形を呈しており、中位から上位にかけては強い焼土化が認められ、壁面は堅いものとなっていた。袖は住居廃棄時に破壊したものか痕跡も確認できなかったが、燃焼部が壁面を大きく越えて作られているため、短かいものであったものと考えられる。また上位が削られ失われていたこともあって天井も煙道も確認できなかった





（竈覆土）

1：黒褐色シルト質土(10YR3/2)：径１mm程の白色軽石入る。しまり中。粘性やや弱／２：暗褐色シルト質土(10YR3/3)：径10mm以下の焼土粒多く入る。しまり中。粘性やや弱／３：暗褐色粘質土(10YR3/4)：径20mm大の焼土ブロック入る。しまりやや強。粘性中／４：注記不備：

（竈掘り方覆土）

1：褐灰色粘質土(5YR5/1)：弱い焼土化見られ明赤褐色焼土(2.5YR5/8)小ブロック少量混入／２：黒褐色粘質土(10YR3/2)：１層土混入のブロック層。明赤褐色焼土(2.5YR5/8)小ブロック少量混入／３：１・４層土のブロック混土

（住居掘り方覆土）

4：褐灰色粘質土(7.5YR4/1)：５層土ブロックと若干の焼土粒含む／５：住居掘り方－３層土に同じ

（住居掘り方覆土）

1：褐灰色粘質土(7.5YR5/1)：住居中央で僅かに焼土・３層土粒含む

2：１・３層土のブロック混土

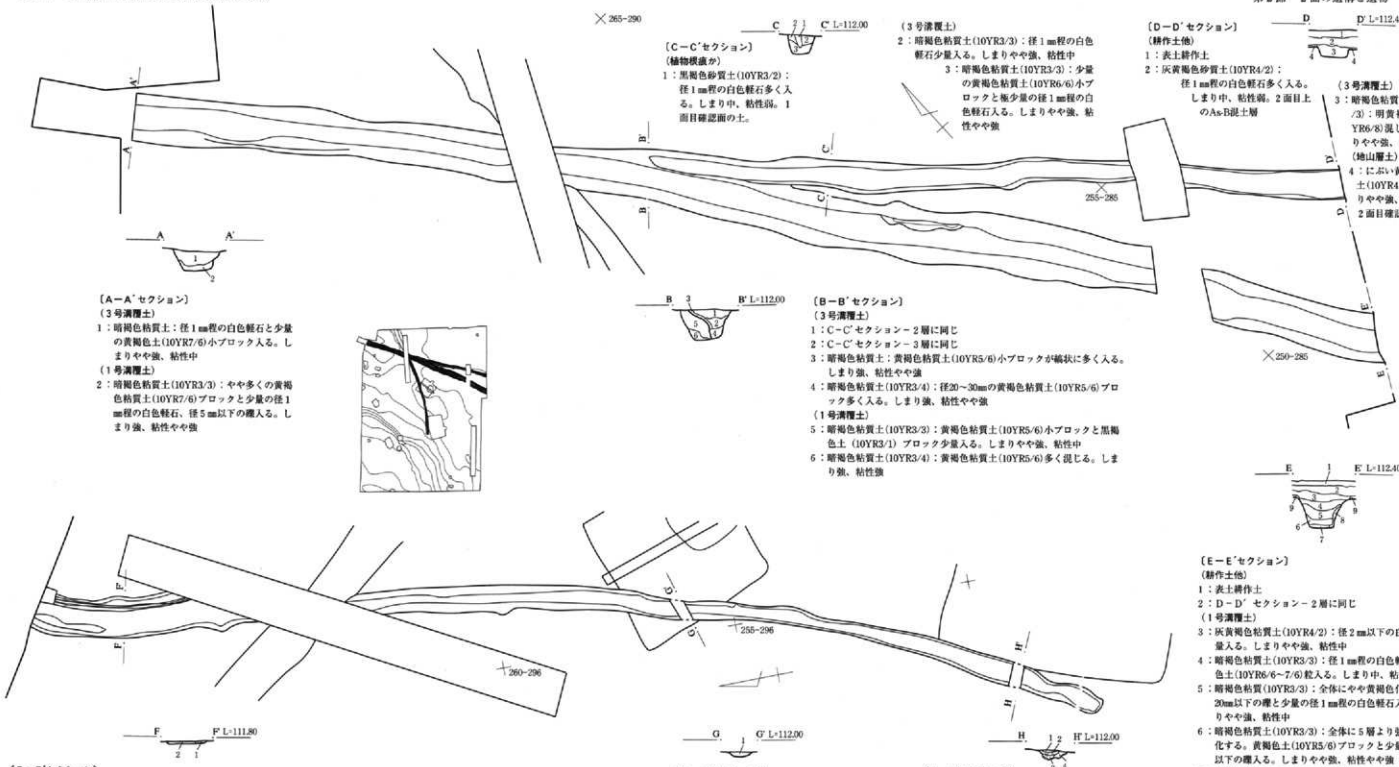
3：にぶい黄橙色粘質土(10YR6/3)：部分的に少量の１層土・焼土粒や白色軽石（As-Cか）含む

第58図　２号住居竈(左上)・竈掘り方(右上)・住居掘り方(下)

4　１・３号溝（第59図、PL26・27）

概要　１・３号溝は谷地形北端から北東の微高地部分にかけて掘削されるしっかりした掘り込みの溝遺構であった。両溝とも東西両側が調査区外に伸びており、或いは２本の試掘トレンチが両溝を断ち割っていたため全容を把握することはできなかった。

両溝は中程で合流し、西に流下しているが、３号溝が１号溝を切っていて前者の方が新しい。また完全に重なる西端部分では第59図Ａ－Ａ'セクションの１層が３号溝に当る層であろうと解釈している。また１・３号溝は後述する２号溝と重複していたのであるが、残念乍ら双方の溝の交差地点が試掘トレンチに重なっていたため新旧を特定することはできなかった。しかし２号溝の項で後述する理由から２号溝の方が新しいものと認識している。


265-290
C C' L=112.00
〔C－C'セクション〕
（植物根痕か）
1：黒褐色砂質土(10YR3/2)：径１mm程の白色軽石多く入る。しまり中、粘性弱。１面目確認面の土。
（３号溝覆土）
2：暗褐色粘質土(10YR3/3)：径１mm程の白色軽石少量入る。しまりやや強、粘性中
3：暗褐色粘質土(10YR3/3)：少量の黄褐色粘質土(10YR6/6)小ブロックと極少量の径１mm程の白色軽石入る。しまりやや強、粘性やや強
〔D－D'セクション〕
（耕作土他）
1：表土耕作土
2：灰黄褐色砂質土(10YR4/2)：径１mm程の白色軽石多く入る。しまり中、粘性弱。２面目上のAs-B混土層
D D' L=112.40
（３号溝覆土）
3：暗褐色粘質土(10YR3/3)：明黄褐色砂(10YR6/8)混じる。しまりやや強、粘性中
（地山層土）
4：にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)：しまりやや強、粘性中。２面目確認面土層
255-285
A A'
〔A－A'セクション〕
（３号溝覆土）
1：暗褐色粘質土：径１mm程の白色軽石と少量の黄褐色土(10YR7/6)小ブロック入る。しまりやや強、粘性中
（１号溝覆土）
2：暗褐色粘質土(10YR3/3)：やや多くの黄褐色粘質土(10YR7/6)ブロックと少量の径１mm程の白色軽石、径５mm以下の礫入る。しまり強、粘性やや強
B B' L=112.00
〔B－B'セクション〕
（３号溝覆土）
1：C－C'セクション－２層に同じ
2：C－C'セクション－３層に同じ
3：暗褐色粘質土：黄褐色粘質土(10YR5/6)小ブロックが縞状に多く入る。しまり強、粘性やや強
4：暗褐色粘質土(10YR3/4)：径20～30mmの黄褐色粘質土(10YR5/6)ブロック多く入る。しまり強、粘性やや強
（１号溝覆土）
5：暗褐色粘質土(10YR3/3)：黄褐色粘質土(10YR5/6)小ブロックと黒褐色土（10YR3/1）ブロック少量入る。しまりやや強、粘性中
6：暗褐色粘質土(10YR3/4)：黄褐色粘質土(10YR5/6)多く混じる。しまり強、粘性強
250-285
E E' L=112.40
〔E－E'セクション〕
（耕作土他）
1：表土耕作土
2：D－D'セクション－２層に同じ
（１号溝覆土）
3：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)：径２mm以下の白色軽石少量入る。しまりやや強、粘性中
4：暗褐色粘質土(10YR3/3)：径１mm程の白色軽石、黄褐色土(10YR6/6～7/6)粒入る。しまり中、粘性中
5：暗褐色粘質(10YR3/3)：全体にやや黄褐色化する。径20mm以下の礫と少量の径１mm程の白色軽石入る。しまりやや強、粘性中
6：暗褐色粘質土(10YR3/3)：全体に５層より強く黄褐色化する。黄褐色土(10YR5/6)ブロックと少量の径20mm以下の礫入る。しまりやや強、粘性やや強
7：黄褐色土(10YR6/6)：砂質に近いシルト質。径30mm以下の礫が南側に集中し多量に入る。しまり中、粘性中
（掘り直し前の１号溝覆土）
8：黄褐色シルト質土(10YR5/6)：暗褐色粘質土(10YR3/3)ブロックと少量の径１mm程の白色軽石入る。しまりやや強、粘性中
（地山層土）
9：D－D'セクション－４層に同じ
255-296
260-296
F F' L=111.80
〔F－F'セクション〕
（２号溝覆土）
1：褐灰色砂質土(10YR4/1)：白色軽石(As-Bか)非常に多く入り、黄橙色砂(10YR7/3)が縞状に入る。しまり中、粘性弱
2：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)：シルトに近い砂質土。径１mm程の白色軽石少量入る。しまり中、粘性やや弱り中、粘性中
G G' L=112.00
〔G－G'セクション〕
（２号溝覆土）
1：F－F'セクション－２層に同じ
H H' L=112.00
〔H－H'セクション〕
（２号溝覆土）
1：灰黄褐色土(10YR4/2)：シルトに近い砂質土。径１mm程の白色軽石入る。しまり中、粘性弱
2：黒褐色土(10YR3/2)：シルトに近い砂質土。径1mm程の白色軽石と直径50mm以下の礫入る。しまり中、粘性弱
3：黒褐色砂質土(10YR3/2)：直径2mm程の白色軽石やや多く入る。しまり中、粘性弱

第59図　１・２・３号溝

また両溝は比較的長い距離を掘削したものと想定されるが掘削意図は特定できなかった。また、壁・底面にも流水の痕跡は認められなかったため、こうした溝に想定される水路の可能性も積極的に肯定するには至らなかった。尚、1号溝は東端の断面観察から掘り直しのあったことが確認されている。

遺物　土師器片など僅かな出土遺物が出土したが、図示すべきものはなかった。

時期　本溝の時期は特定時なかったが、覆土の状態などから推して律令期の所産と判断される。

規模　1号溝　長さ：29.2m　上幅：120cm
下幅：58cm　深さ：64cm
3号溝　長さ：28.0m　上幅：69cm　下幅：32cm
深さ：61cm

構造　1・3号溝は凡そ南東－北西方向に直線的な走行を取り北西方向に流下しているが、その方位は北に対して1号溝は東部で150°、中・西部で140°を示し、3号溝は全域で140°を示している。

両溝の掘削形態は整った箱堀状を呈していた。共に壁面は若干傾斜するものの、底面は平らであったが、3号溝は1号溝との重複する地点で一度底面が下がっている。

5　2号溝（第59図、PL27）

概要　2号溝谷地形中程の2号住居付近から谷地形の中を北方に抜けている。

さて本溝は1条の溝遺構として調査したのであるが、北側で本溝の中心より若干東にずれて遺存する溝部分（以下「2b溝」とする）が残されていた。この2b溝は位置的に見て2号溝の掘り直しと認識されるものであるが、As－Bと思われる軽石を多く混入していた。

一方、本溝は1・3号住居と重複するが上述のように両溝との交点に試掘トレンチが掘削れていたため、新旧関係を特定することはできなかった。しかし、1・3号溝の覆土が粘質土を中心としているのに対し、2号溝の覆土がより上位層に近い砂質土を主体としていること。また掘り直しと認識される2b溝にAs－Bが多く含まれることから本溝の方が新しい時期のものと想定している。

遺物　本溝からは土師器片等僅かな出土遺物を得たのであるが、図示すべきものは見られなかった。

時期　本溝は出土遺物が僅かであったこともあって時期を特定することはできなかった。しかし2b溝はAs－B降下後の所産と認識されるので、概ね古代末～中世前期頃の所産として把握できるのではないかと思慮している。

規模　長さ：22.8m　幅：59cm　深さ：18cm

構造　本溝は凡そ北方向に流下するが、その方位は北に対して10°前後を示し大きく蛇行するラインを取っている。

本溝の掘削形態は箱堀状を呈するが、横断面形は丸底気味である。

6　2面の土坑群（第60・61図、PL27）

概要　2面では20基の土坑を確認、調査した。その分布は61頁の2面の概要で述べたように南西側微高地と谷地形の境、即ち調査区の北西隅と南端中央部を結ぶライン上、北部から南部北寄りにかけて集中域が見られ、東南部にも小さな集中域が見られた。この他の土坑は北東、中央、南西部に単独で在った。

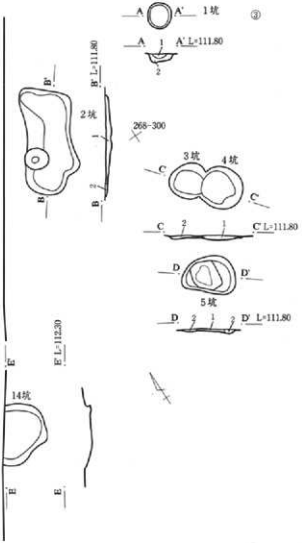
本土坑群の各土坑の掘削意図は把握できなかったが、集中域の土坑群、特に大型で長方形様の2・6・10号土坑は直線的に配置しているので意図的な配置が窺われる。また19号土坑は底面に炭化物が多く有った。

遺物　本土坑群のうち17号土坑からは若干の土師器片、19号土坑からは大型の須恵器甕片の出土があったものの図示すべきものは見られなかった。

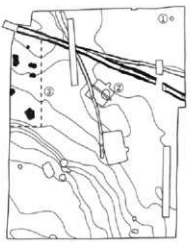
時期　本土坑群各土坑の時期は特定できなかったが、確認面及び覆土の観察等から概ね律令期の所産と想定される。

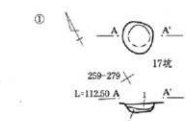
規模　個々の土坑の規模については72頁表6を参照されたい。

土坑全体としては、径は38～220cm、平均64.8cm、深さは5～49cm、平均23.2cmを測った。



〔１号土坑覆土〕
１：黒褐色土(10YR3/2)：シルトに近い粘質土。径２mm以下の白色軽石極少量入る。しまり中、粘性やや弱
２：暗褐色粘質土(10YR3/3)：少量の黄橙色土(10YR6/4)小ブロックと極少量の明褐色土(7.5YR5/6)粒子入る。しまりやや強、粘性やや強

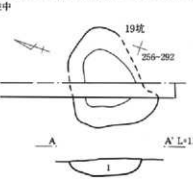




〔17号土坑覆土〕
１：黒褐色砂質土(10YR3/2)：多くの径２mm程の白色軽石と極少量の橙色土(7.5YR6/6)粒入る。しまりやや強、粘性弱
２：にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)：１層土小ブロック少量入る。しまり強、粘性中

〔２号土坑覆土〕
１：１号土坑－１層に同じ
２：暗褐色粘質土(10YR3/3)：黄橙色粘質土(10YR6/4)ブロック多量に入る。しまり・粘性やや強

〔３・４号土坑覆土〕
（３号土坑覆土）
１：１号土坑－２層に同じだが、明褐色土粒入らない
（４号土坑覆土）
２：暗褐色粘質土(10YR3/3)：黄橙色粘質土(10YR6/4)ブロックと少量の径１mm程の白色軽石入る。しまり・粘性やや強

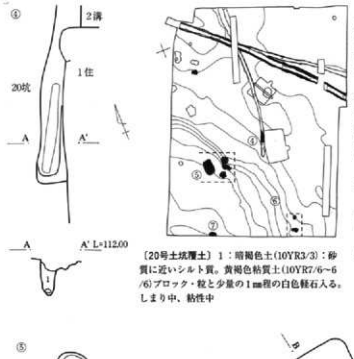


〔19号土坑覆土〕
１：黒褐色土層(10YR3/2)：シルトに近い砂質土。焼土粒と径１mm程の白色軽石子入る。底部近くに炭化物集中。しまり中、粘性やや弱

〔５号土坑覆土〕
１：黒褐色粘質土(10YR3/2)：径１mm程の白色軽石と黄橙色土(10YR6/4)小ブロック少量入る
２：４号土坑－２層に同じ

〔６号土坑覆土〕
１：黒褐色砂質土(10YR3/1)：キメ細かい。明黄褐色土(10YR6/6)(10YR6/6)粒と径20mmの礫入る。しまり中、粘性やや弱
２：黒褐色砂質土：キメ細かい。明黄褐色砂(10YR6/6)多く混じる。しまり中、粘性弱

第60図　２面の土坑群（その１）



〔20号土坑覆土〕１：暗褐色土(10YR3/3)：砂質に近いシルト質。黄褐色粘質土(10YR7/6～6/6)ブロック・粒と少量の１mm程の白色軽石入る。しまり中、粘性中

〔7号土坑覆土〕１：黒褐色砂質土(10YR3/2)：キメ細かく径30mm以下の礫、黄橙色砂(10YR7/4)混入。しまりやや弱、粘性弱

〔8号土坑覆土〕１：黒褐色砂質土(10YR3/2)：キメ細かく径30mm以下の礫、黄橙色砂(10YR7/4)混入。7号土坑より礫多くしまりやや弱、粘性弱

〔9号土坑覆土〕１：7号土坑覆土に同じ

〔10号土坑覆土〕１：8号土坑に同じ／２：１層と同じキメ少し粗い

〔11号土坑覆土〕１：黒褐色土(10YR3/1)：砂質に近い粘質土。明黄褐色土(10YR7/6)粒子が少量入る。しまりやや弱、粘性中／２：黒褐色土(10YR3/1)：砂質に近い粘質土。明黄褐色粘質土(10YR7/6)ブロックが入る。しまり中、粘性中

〔12号土坑覆土〕１：11号土坑覆土に同じ

〔15号土坑覆土〕１：黒褐色土砂質(10YR3/2)：少量の径１mm程の白色軽石と極少量の礫入る。しまりやや弱、粘性弱

〔16号土坑覆土〕１：7号土坑覆土に似るが、礫少量でしまり中

〔耕作土〕１：黒褐色土(10YR3/2)：現耕土／２：黒褐色砂質土(10YR3/2)：白色軽石と小礫入る

〔18号土坑覆土〕３：黒褐色土砂質：キメ細かい。径１mm程の白色軽石と黄橙色土(10YR8/6)小ブロックが入る。しまり中、粘性弱

第61図　２面の土坑群（その２）

表６　２面土坑一覧

No.	径	深さ	平面形	底形	所在区域・備考	No.	径	深さ	平面形	底形	所在区域・備考
1	40×38	24	楕円	平	北西部	11	60×45	34	楕円	丸	南東部
2	169×88	12	隅丸長方	平	北西部	12	41×(36)	24	楕円	丸	南東部
3	(53)×58	5	楕円	平	北西部	13	(62)×54	12	楕円	丸	南東部
4	(66)×66	6	円	平	北西部	14	(80)×(97)	8	楕円	平	北西部
5	86×60	26	半月	尖	北西部	15	62×52	7	楕円	丸	中西部南寄り
6	160×126	26	不正長方	丸	中西部	16	(88)×(55)	35	隅丸方	丸	中西部南寄り
7	(95)×45	21	隅丸長方	船底	中西部南寄り	17	50×48	14	円	平	北東部
8	(103)×107	34	楕円	平	中西部南寄り	18	103×(58)	33	隅丸方か	丸	南西部
9	96×103	23	隅丸台	尖	中西部南寄り	19	155×(132)	26	隅丸三角	平	中央部
10	220×132	49	隅丸長方	丸	中西部南寄り	20	194×33	45	隅丸短冊	船底	中央部

第62図　２面南東部遺構外の出土遺物

構造　本遺跡２面の土坑のうち長・短径双方が測定できたものは20基中10基にしか過ぎなかったが、径50cm未満の小型のもの２基、凡そ１ｍを超えるもの５基、中型のものは３基を数えた。

プランは円形２基、楕円形８基、方形に類するもの２基、長方形に類するもの６基、三角形或いは半円形状のものが各１基であった。

底面形態は平底８基、丸底８基、船底２基、尖底２基であった。

7　遺構外の出土遺物（第62図、PL28）

概要・遺物　本遺跡２面に於いても若干ではあったが土師器片等の出土遺物を得た。この中には東部から出土したこも編み石２点（２面東部－１・２）が見られた。

また出土区域や出土した面は特定できなかったが遺構外出土遺物として鉄滓（遺構外－１）の出土も確認している。

第5章 考 察

上大塚南原遺跡出土漆紙文書について

高島 英之

1．形　状 ： 径約11.2㎝の円形状を呈し、中心部分が欠失している。

外縁の弧は、漆液を容れて保存していた桶状の曲げ物のような容器の口縁の大きさをほぼ示している。中心部分の欠失は、蓋紙にした際に、中央部分の漆液の付着・浸透が十分でなく、漆液による紙質のコーティングが満足になされずに、結果として紙が腐食してしまったことによるものと考えられる。

2．出土状況 ： 埋土中の須恵器杯の内面に付着していたが、出土時点では剥離した状態で出土した。

元来、桶状の漆液貯蔵器の蓋紙としての使用されたものを外して、杯・碗型の容器に移して保管されていたものと考えられる。

3．年　代 ： 伴出遺物等から9世紀初頭。

4．内　容

(1) 凹状の外側を裏、凹んだ面を表とすると、裏面は全く漆の皮膜のみであり、紙質の残存は現状では確認しがたい。赤外線装置を使用しても裏面には全く文字は確認できない

(2) 表面 「

□

□ □　　〔女ヵ〕

□ □ □

(欠　失)

」

表面の右半分に6文字分の墨痕が確認できる。文字の大きさは小振りであり、授受関係にある狭義の文書であるというよりも、帳簿・記録類とみたほうが良さそうである。

5．その他

(1) 高崎市下小鳥遺跡（上越新幹線）、玉村町福島曲戸遺跡（県道藤岡大胡線）、玉村町福島飯塚遺跡（国道354号線、報告書未刊）、太田市矢部遺跡（北関東自動車道、報告書未刊）、太田市東今泉鹿島遺跡（国道122号線、報告書未刊）などの例に続いて、県内で6例目の漆紙文書である。

県内出土の漆紙文書は、現在の所、すべて当事業団の調査による出土である。

(2) 文字が全く判読できない漆紙の出土例としては、県内では、太田市鹿島浦遺跡（当事業団調査、報告書未刊）、太田市六地蔵遺跡（藪塚本町(当時）教育委員会調査）、太田市新田中江田遺跡（新田町(当時)教育委員会調査）、前橋市粕川字通廃寺（粕川村(当時)教育委員会調査）、藤岡市上栗須寺前遺跡（当事業団調査）などがある。

当時、紙が極めて貴重であったことから考えれば、これらのような例が、全く文字を記していない白紙を漆液容器の蓋紙として用いたとは考えにくい。風化や剥落によって文字が全く滅失してしまったものと考えるべきである。

(3) ちなみに、正倉院文書中の天平宝字4年(760)12月30日付の、法華寺阿弥陀浄土院金堂の造営にかかわる「造金堂所解」(『大日本古文書』16－301）には、

（前略）

「三　弐　六　　五七　五十六」

三貫九百七十文買凡紙六千九百四張

「三　　四　　五十六」

八十一文々別三張

二貫八百七十四文買凡紙五千八百廿九張直

二貫七百九十三文別二張

六百二文買麻紙八十六張直　張別七文

四百九十四文買古紙九百八十九張直　文別二張

（後略）

とあり、「凡紙」・「麻紙」・「古紙」を役所で購入した際の値段が記入されている。

そこから一枚あたりの単価を換算してみると、「凡紙」（普通紙）が「張別」（1枚あたり）0.6ないし0.5文。「麻紙」（高級紙）が「張別」7文。「古紙」（反故紙）が「張別」0.5文となる。反故紙と普通紙とがほぼ同等の値である。

当時、白米1升が5文ないし6文。作業員の一日あたりの日当が10ないし14文であるところからみれば、紙がいかに貴重品であったかがわかるというものである。

(参考文献)

平川　南『漆紙文書の研究』　吉川弘文館　1989年

同　『よみがえる古代文書　漆に封じ込まれた古代社会』　岩波新書　1994　奈良文化財研究所

飛鳥資料館『うずもれた古文書－みやこの漆紙文書の世界－』　2006

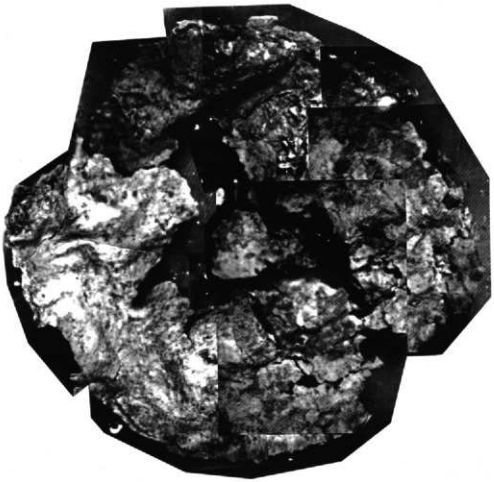


写真1　漆紙文書赤外線写真

おわりに

本書では群馬県藤岡市に所在する上大塚南原遺跡と鮎川藤ノ木遺跡で実施した発掘調査で得られた出土文化財等を記してきた。編者（石守）の能力不足から発掘調査ではバイパスの予定路線範囲に在り乍ら時間切れで1号住居竈や3号住居の過半が市道下に残る結果となり、本報告も満足いくようなレベルにできなかったことは慙愧に耐えない。

しかし詳細はくり返さないが両遺跡の調査範囲は決して大きなものではなかったものの、大塚南原遺跡では主に奈良・平安時代の竪穴住居、溝、土坑、ピット或いは天明3年（1783）の浅間山噴火後の耕作地復旧溝群などを、鮎川藤ノ木遺跡ではやはり主に奈良・平安時代の竪穴住居、溝、土坑。そしてこれらの遺構から出土した遺物の最低限度の報告は行ってきたのである。こうした遺構の中で特徴的だったのは各竪穴住居の竈の遺存状態の良さと特には上大塚南原遺跡7号住居が並存する2つの竈を持っていたことであり、遺物の中では破片ではあったが2号住居出土の双耳杯であり、遺物包含層から出土した漆紙文書があった。このうち漆紙文書は遺存状態が悪かったものの第5章に掲載した高島英之氏による鑑定所見から、帳簿・記録の類のものとして認定された。尚、本書にはっきりと掲載できた以外にも遺構に関する記録や出土遺物があることも、また記しておきたい。

本報告書の作製に当っては多くの同僚諸氏の協力があり、整理補助員各員の奮闘があった。その働き無くして本書は上梓できなかったのであり、心からの感謝を伝えたい。また発掘調査は厳寒の時期、特にその冬の例年にない寒波の中にあって身を隠すところも限られる発掘現場で猛烈な寒さに耐え。発掘調査に奮闘して戴いた発掘作業員各位にもまた心よりの感謝を申し上げたいと思う。

そして最後になるが発掘調査、整理事業を支えて下さった県土整備局、藤岡土木事務所、群馬県教育委員会文化課、藤岡市教育委員会文化財保護課、工事関係者を始め関係各位に心よりの御礼を申し上げ、稿を閉じたいと思う。

〔参考文献〕

（第2章第1節）

群馬県地質図作製委員会（新井房夫監修）「群馬県10万分の1地質図」1999　内外地図株式会社

（第2章第2節）

（1）　藤岡市教育委員会『緑埜地区遺跡群Ⅱ』1987

（2）　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団『白石大御堂遺跡』1991

（3）　藤岡市教育委員会『F2緑埜地区遺跡群Ⅰ』1985

（4）　藤岡市教育委員会『年報14』1999

（5）　藤岡市教育委員会『年報9』1994

（6）　藤岡市史編さん委員会『藤岡市史　資料編　原始・古代・中世』1993

（7）　藤岡市教育委員会『F15藤岡平地区遺跡群』1669

（8）　藤岡市教育委員会『栗塚B・南出口B・大歩B・東平井古墳群』1997

（9）　藤岡市教育委員会『年報12』1996

（10）　藤岡市教育委員会『年報13』1997

（11）　藤岡市教育委員会『F12藤岡平地区遺跡群』1994

（12）　藤岡市教育委員会『藤岡平地区遺跡群Ⅱ』1995

（13）　藤岡市教育委員会『F21・F22藤岡平地区遺跡群』1997

（14）　藤岡市教育委員会『F28東平井中道B遺跡・F28b栗郷遺跡』1998

（15）　藤岡市教育委員会『藤岡市遺跡詳細分布調査（Ⅲ）』

（第3・4章）

群馬県地質図作製委員会（新井房夫監修）「群馬県10万分の1地質図」1999　内外地図株式会社

中沢　悟編　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「矢田遺跡Ⅵ」1997

石守　晃「竪穴住居と竪穴住居遺構について」「研究紀要17」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　1999

表7　上大塚南原遺跡出土遺物観察表（その1）

第1面

Ⅱ区1面

No.	資料名称（資料番号）	測定値（cm）（残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	軟質陶器火鉢（10－000001）	残存5.4×6.0　厚1.1（体部破片）	内外面鈍黄。胎土に片岩含む。横位の施で。表面に竹などの痕刷	中世	第7図	図版23

遺物包含層

Ⅰ区遺物包含層

No.	資料名称（資料番号）	測定値（cm）（残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	土師器甕（10－000002）	口径(復)15　残高10.3（口縁～胴部1/6）	橙色。器面取上げ時の調整のためか著しく荒れ、外面の整形痕観察は不能。口縁横撫で。肩部内面横位の撫撫で	8世紀前半	第12図	図版4
2	須恵器壺（10－000003）	残存8.0×5.9　脚径4.5　残高1.6（頭部破片）	淡い灰色。右回転轆轤整形。頭部に輪状の線貼付け	8世紀	第12図	図版4
3	須恵器坏（漆紙付）（10－000004）	口径12.8　底径9.2　器高3.2（ほぼ完形）	灰色。胎土に片岩含む。若干左右に圧平。右回転轆轤整形。底面回転糸切り。内面に漆紙文書入る	9世紀前半	第12図	図版4
4	須恵器坏（10－000005）	口径(復)15.4　底径(復)9.5　器高3.7(1/3)	灰色。胎土に片岩含む。右回転轆轤整形。底面切り離し後撫無り	7世紀後半	第12図	図版4
Ⅰ区遺物包含層						
5	須恵器甕（10－000006）	口縁突帯径(復)15　残高3.5(1/2)	灰色。焼成良好。胎土に片岩含む。右回転轆轤整形。頭部外面切り離し後右回りの回転撫削り後、白状の線貼付け	8世紀後半か	第12図	図版4
Ⅰ区遺物包含層						
6	土師器坏（10－000007）	口径(復)20　残高3.8（1/3）	橙色。胎土に片岩含む。内外面荒れる。口縁横撫で。体～底部内面撫撫で、外面撫削り	8世紀前半	第12図	図版4
7	土師器坏（10－000008）	口径(復)13　残高2.5（1/4）	橙色。胎土に片岩含む。内外面荒れ観察難。口縁横撫で。体～底部内面撫撫で、体部外面撫で、底面撫削り	9世紀前半	第12図	図版4
8	土師器坏（10－000009）	口径(復)15　残高4.0（口縁～底部上位1/4）	にぶい橙色。器面やや荒れる。口縁横撫で。体～底部内面撫撫で、外面撫削り後体部撫で	8世紀前半	第12図	図版4
9	土師器坏（10－000010）	口径(復)14　残高3.0（1/4）	橙色。外面中心に器面やや荒れる。口縁横撫で。体～底部内面撫撫で、外面撫削り後体部撫で	8世紀後半	第12図	図版4
10	土師器坏（10－000011）	口径(復)12　残高2.7（1/4）	橙色。器面荒れ観察難。口縁横撫で。体～底部内面撫撫で、外面撫削りで体部撫で	8世紀後半	第12図	図版4
11	土師器坏（10－000012）	口径(復)15　残高2.5（口縁～底部上位1/3）	橙色。胎土に片岩含む。器面やや荒れ。口縁横撫で。体～底部内面撫撫で、外面体部撫で、底面撫削り	9世紀前半	第12図	図版4
12	土師器坏（10－000013）	口径(復)15　残高3.4（口縁～底部上半1/4）	橙色。胎土に片岩含む。内面やや荒れ。口縁横撫で。体～底部内面撫撫で、体部外面体部撫撫で。底面撫削り	9世紀前半	第13図	図版4
13	土師器坏（10－000014）	口径(復)14.9　残高4.7（口縁～底部上位1/6）	橙色。胎土に粒径大きい片岩含む。軟質。内外面荒れ顕著で観察ほぼ不能。口縁横撫で。底面撫削り	8世紀後半	第13図	図版4
14	土師器坏（10－000015）	口径(復)10　器高3.0（1/4）	にぶい黄橙色。内面多少荒れる。口縁横撫で。体～底部内面撫撫で、外面撫削り後体部撫で	8世紀後半	第13図	図版4
15	土師器坏（10－000016）	口径(復)13　残高3.4（口縁～底部上半1/4）	橙色。内面やや荒れる。口縁横撫で。体～底部内面撫撫でか、外面撫削り後体部撫で	8世紀前半	第13図	図版4
16	土師器坏（10－000017）	口径(復)12　器高3.0（1/4）	にぶい橙色。内面中心に器面やや荒れる。口縁横撫で。体～底部内面撫撫で、外面撫削り後体部撫で	8世紀後半	第13図	図版4
17	土師器高坏（10－000018）	脚部径4.2　残高3.8（坏底部～脚部上位）	にぶい橙色。外面磨滅。坏底部内面荒れ観察不能、外面撫で。脚部内面撫撫で、外面撫調整	7世紀後半	第13図	図版5
18	土師器甕（10－000019）	口径23.1　残高13.2（口縁～体部1/3）	橙色。胎土に片岩含む。内外面荒れ、観察ほぼ不能。口縁横撫でか。体部内面撫撫で、外面撫削りか	8世紀前半	第13図	図版5
19	土師器甕（10－000020）	口径(復)27　残高5.5（口縁～肩部1/3）	橙色。胎土に片岩含む。内外面荒れ、整形痕の観察は不能	8世紀後半	第13図	図版5
20	土師器甕（10－000021）	口径(復)27　残高5.9（口縁～肩部1/4）	橙色。胎土に片岩含む。口縁横撫で。肩部内面撫撫で、外面撫削り	8世紀前半	第13図	図版5
21	土師器甕（10－000022）	口径(復)21　残高5.6（口縁～肩部1/4）	橙色。胎土に片岩含む。内外面荒れ、内面の観察ははぼ不能。口縁横撫で。体部外面撫削り	8世紀前半	—	図版5

表８　上大塚南原遺跡出土遺物観察表（その２）

No.	資料名称 （資料番号）	測定値（cm） （残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備　考	図版号	図版番号
22	土師器甕 （10－000023）	口径(推)26　残高5.2 （口縁～胴部破片）	橙色。表裏面一部に取上げ時の調整のためか荒れ。口縁横撫で。胴部内面横撫でか、外面観察不能	８世紀後半	第14図	図版５
23	土師器甕 （10－000024）	口径(推)24　残高7.4 （口縁～胴部破片）	橙色。表裏面取上げ時の調整のためか著しく荒れ、整形痕の観察不能	８世紀前半	第14図	図版５
24	土師器甕 （10－000025）	口径(推)21　残高6.2 （口縁～胴部破片）	にぶい橙色。胎土にやや粒径の大きい片岩含む。口縁横撫で。胴部内面斜撫で、外面荒削り	７世紀後半	第14図	図版５
25	土師器甕 （10－000026）	口径(推)18　残高5.1 （口縁部1/4）	橙色。胎土に片岩含む。口縁横撫で	８・９世紀	第14図	図版５
26	土師器甕 （10－000027）	底径5.8　残高2.1 （腰～底部1/2）	橙色。底外面欠け。腰部内面斜撫で、外面荒削り。底面斜撫り後中央撫で	８世紀後半か	第14図	図版５
27	土師器小型甕 （10－000028）	口径(推)10.8　残高5.6 （口縁～胴部1/6）	橙色。器面やや荒れる。胎土に片岩含む。口縁横撫で。胴部内面斜撫で、外面荒削り	８世紀後半	第14図	図版５
28	須恵器甕 （10－000029）	底径(推)8　残高1.9 （腰～底部1/4）	暗灰色。焼成堅い。胎土に片岩含む。回転糸切撫整形後、底面回転撫調整	８世紀前半	第14図	図版５
29	須恵器坏 （10－000030）	底径(推)8　残高1.4 （腰～底部1/4）	暗灰色。焼成堅い。内外面吸炭。胎土に片岩含む。回転糸切撫整形後、底面回転撫調整	８世紀	第14図	図版５
30	須恵器高台付坏 （10－000031）	底径(推)10　残高1.4 （底部1/4）	淡橙色。胎土に片岩含み、焼成甘い。酸化焔焼成。回転糸切撫整形。底面回転撫調整後高台貼付け	８世紀前半	第14図	図版５
31	須恵器坏17－1 （10－000032）	底径(推)8.2　残高1.8 （口縁～胴部破片）	灰白色。胎土に片岩含む。焼成やや甘い。右回転糸切撫整形。底面回転糸切後、外周右回りの回転撫調り	９世紀前半	第14図	図版５
32	須恵器甕 （10－000033）	口径(推)19　残高3.9 （口縁～体部1/4）	暗灰色。焼成堅い。胎土に片岩含む。回転糸切撫整形	９世紀前半	第14図	図版５
33	須恵器甕 （10－000034）	口径(推)19　残高3.5 （1/4、縁欠損）	薄い灰色。焼成やや軟。口縁内側に陵線。右回転糸切撫整形。頸部切離し後石状の粘土貼付け	８世紀前半	第14図	図版５
34	須恵器甕 （10－000035）	残存7.0×6.2　底径3.2 残高2.2（頸部1/4）	やや濃い灰色。焼成やや良。回転糸切撫整形。頸部左回りの回転撫調り後宝珠形の粘土貼付け。内面に指撫で痕残る	７世紀後半	第14図	図版５
35	須恵器甕 （10－000036）	口径(推)15　残高2.7 （頸部欠く1/4）	灰色。胎土に片岩含む。不焼成良好。口縁内面に陵線。回転糸切撫整形	８世紀前半	第14図	図版６
36	須恵器甕 （10－000037）	残存幅16.9　残高7.2 （口縁部破片）	灰白色。口縁端部上下に引く。内面横位の指撫で痕、外面波状の陵撫き		第14図	図版６
Ⅰ区南部包含層下位層						
37	土師器坏 （10－000038）	口径(推)18　残高4.1 （1/3）	にぶい黄橙色。胎土に片岩含む。。内面荒れ観察難。口縁横撫で。体～底部内面斜撫でか、外面荒削り後中位撫で	８世紀後半	第14図	図版６
38	土師器甕 （10－000039）	口径(推)23　残高5.5 （口縁～胴部破片）	橙色。胎土に片岩含む。内外面著しく荒れ、観察難。胴部外面荒削り	８世紀か	第14図	図版６
39	土師器甕 （10－000040）	口径(推)14　残高5.5 （口縁～胴部破片）	橙色。胎土に片岩含む。内外面荒れ、観察難。口縁横撫で。胴部内面斜撫で、外面荒削り	古付墨か、 ８世紀後半	第14図	図版６
40	土師器台付甕 （10－000041）	受底部径6.6　残高3.6 （要部近～脚上位破片）	明赤褐色。胎土に片岩含む。内外面荒れ、部分的に観察不可。内面要脚部筒撫で、底面指押さえ、脚部指撫で、外面荒削り	８・９世紀	第14図	図版６
41	須恵器蓋 （10－000042）	口径13.6　器径4.2 器高2.0（3/4）	灰白色。胎土片岩含む。右回転糸切撫整形。頂部左回りの回転撫調り後口状の粘土貼付け。内面に貼付け時の指頭痕	８世紀後半	第14図	図版６
Ⅰ区中部包含層下位層						
42	土師器坏 （10－000043）	口径12.8　器高4.0 （3/4）	橙色。胎土に片岩含む。内外面やや荒れる。口縁横撫で。体～底部内面斜撫で、外面荒削り後体部撫で	７世紀後半	第15図	図版６
43	土師器坏 （10－000044）	口径(推)11　残高3.2 （1/3）	橙色。胎土に片岩若干含む。内外面やや荒れる。口縁横撫で。体～底部内面斜撫で、外面荒削り後体部撫で	８世紀前半	第15図	図版６
44	土師器坏 （10－000045）	口径(推)11　残高2.6 （口縁～底部破片）	橙色。内外面荒れ、多くは整形痕確認不能。口縁横撫で。体部外面荒削り	８世紀後半	第15図	図版６
45	土師器坏 （10－000046）	口径(推)11.9　残高3.2 （口縁～胴部破片）	橙色。胎土に片岩若干含む。内面中心に荒れる。口縁横撫で。体部外面～底面荒削り	８世紀前半	第15図	図版６
46	土師器甕 （10－000047）	口径(推)21　残高6.7 （口縁～胴部1/4）	橙色。胎土に片岩含む。体部肉薄。器面荒れ、観察難。口縁横撫。胴部内面斜撫で、外面荒削り	７世紀後半	第15図	図版６
47	土師器甕 （10－000048）	口径(推)21　残高5.4 （口縁～胴部1/3）	橙色。胎土に片岩含む。肉厚。器面やや荒れる。口縁横撫。胴部内面斜撫で、外面荒削り	７世紀後半	第15図	図版６
48	土師器甕 （10－000049）	口径(推)22　残高4.5 （口縁～胴部1/6）	橙色。胎土に片岩含む。やや肉厚。器面多少荒れる。口縁横撫。胴部内面斜撫で、外面荒削り	７世紀後半	第15図	図版６
49	土師器甕 （10－000050）	口径(推)30.6　残高8.0 （口縁～胴部破片）	橙色。胎土に片岩含む。器面やや荒れ、外面観察やや難。口縁横撫。胴部内面斜撫で、外面荒削り	７世紀後半	第15図	図版６

表9　上大塚南原遺跡出土遺物観察表（その3）

No.	資料名称 (資料番号)	測定値 (残存状況)	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
50	土師器甕 (10－000051)	口径(推)15.2　残高4.2 (口縁～肩部破片)	橙色。器面一部剥離。口縁横撫。肩部内面篦撫で、外面篦削り 橙色。胎土に片岩含む。内厚。器面荒れ、整形痕観察困難。口	8世紀後半	第15図	図版6
51	土師器甕 (10－000052)	口径(推)22　残高8.3 (口縁～頸部1/6)	緑横撫。肩部内面篦撫で 橙色。胎土に片岩含む。器面やや荒れる。体部から底部内面指	8世紀後半	第15図	図版6
52	土師器甕 (10－000053)	底径5.1　残高3.8 (腰～底部2/3)	撫で、外面篦削り 橙色。胎土に片岩含む。器面一部荒れ、観察やや難。口縁横撫。	8・9世紀	第15図	図版7
53	土師器小型甕 (10－000054)	口径(推)13　残高5.5 (口縁～肩部1/3)	肩部内面篦撫で赤、外面篦削り 灰白色。胎土に片岩含む。焼成やや甘い。右回転糸切痕整形。底	8世紀後半	第15図	図版7
54	須恵器坏 (10－000055)	底径(推)7.6　残高3.1 (腰～底部1/4)	面回転篦起しか。腰下端部外面回転篦削り。 灰色。胎土に片岩含む。口縁斜めに引く。右回転糸切痕整形。	8世紀前半	第15図	図版7
55	須恵器壺 (10－000056)	口径(推)19　残高3.3 底径4.8(1/4)	頂部切離し後左回りの篦削り施し糸状の跡残付 淡い灰色。胎土に粒径やや大きい片岩含む。右回転糸切痕整形	7世紀後半	第15図	図版7
56	須恵器壺 (10－000057)	口径14.8　残高1.9 (頂部欠く1/2)	灰色。胎土にやや粒径大きい片岩含む。口縁部斜方向上下に引 く。内外面横位の撫で	8世紀後半	第15図	図版7
57	須恵器甕 (10－000058)	残存幅8.3　残高2.7 (口縁破片)	灰白色。胎土に片岩含む。焼成やや甘い。内面に青海波文、外 面に平行叩き目	他に2片あり	第15図	図版7
58	須恵器甕 (10－000059)	胴部最大径(推)34 残高12.3　(胴部破片)	灰白色。胎土に片岩含む。内外面横位の撫で後、内面下位青海 波文、外部不明瞭な平行叩き目		第15図	図版7
59	須恵器甕 (10－000060)	胴部最大径(推)24.2 残高10.6　(胴部破片)	濃い灰色。胎土に片岩含む。内外面横位の撫で後、内面に青海 波文、外面に平行叩き目文		第15図	図版7
60	須恵器甕 (10－000061)	胴部最大径(推)22 残高12.5　(胴部破片)	灰色。胎土片岩含む。輪積み。内外面横位の撫で後、腰下端外 面篦削り。底面指押さえ後外周回転篦削り		第15図	図版7
61	須恵器甕 (10－000062)	底径9.3残高10.2 (腰～底部1/2)	灰白色。胎土に片岩含む。輪積み。内面（指）撫で後青海波文、 外面並行叩き目痕		第15図	図版7
62	須恵器甕 (10－000063)	残存幅25.8　残高21.0 (胴～底部1/4)	暗灰色。胎土に片岩含む。内外面横位の撫で。底面回転による 撫で	他に4片あり	第15図	図版8
63	須恵器甕 (10－000064)	底径(推)15　残高3.7 (腰～底部1/6)	灰色。胎土に片岩含む。焼成良好。内外面に自然釉。口端等に 金雲母が付着。内外面横位の撫で		第15図	図版7
64	須恵器甕 (10－000065)	口径12.3　残高8.1 (口縁2/3)	灰色。胎土に片岩含む。焼成良好。表面に輪状痕残る。内外面 横位の撫で後、外面下位に平行叩き目	9世紀	第15図	図版7
65	須恵器甕 (10－000066)	残存幅8.5　残高9.8 (口縁破片)	淡い灰色。焼成良好。外面口端付近に自然釉。表面に輪状痕残 る。内外面横位の撫で	9世紀か	第15図	図版7
66	須恵器甕 (10－000067)	残存幅5.1　残高7.6 (口縁破片)	断面方形。上下で径の違いは認められない 断面方形。先端欠損。先端面がる	9世紀か	第15図	図版7
67	角釘 (40－000001)	残長6.4　径0.5、×0.5 (上下脚欠損)		5寸釘か	第15図	図版8
68	角釘 (40－000002)	残長2.5　径0.4 (先端破片)		2・3寸釘か	第15図	図版8
I区包含層下位層						
69	土師器坏 (10－000068)	口径(推)14　残高3.7 (1/3)	橙色。胎土に片岩含む。内面中心に器面荒れ、観察難。口縁横 撫で赤。外面体部撫で、体部～底部外面篦削り	8世紀前半	第15図	図版8
70	土師器坏 (10－000069)	口径(推)16　残高2.6 (1/4)	橙色。胎土に片岩含む。内外面荒れ著しく、観察難。口縁横 撫で。体部～底部内面篦撫で赤、外面篦削り	8世紀後半	第15図	図版8
71	土師器坏 (10－000070)	口径(推)12　残高2.4 (1/6)	にぶい橙色。内外面荒れ、観察難。口縁横撫で。体部～底部内 面撫で、外面篦削り赤	8世紀後半	第15図	図版8
72	土師器坏 (10－000071)	口径(推)11.9　残高2.7 (1/6)	橙色。取り上げ時の影響か内外面剥離し荒れ顕著。観察一部除 き不能。口縁横撫で赤。体部～底部外面篦削りか	8世紀後半	第15図	図版8
73	土師器坏 (10－000072)	口径(推)12.0　残高3.5 (口縁～頂部破片)	橙色。取り上げ時の影響か内外面荒れ顕著。観察一部除き難。 口縁横撫で赤。外面体部撫で赤、底面篦削りか	8世紀後半	第15図	図版8
74	土師器坏 (10－000073)	口径(推)20　残高6.2 (口縁～腰部1/4)	橙色。取り上げ時の剥離か内外面荒れ顕著なため、観察不能。 口縁横撫で赤。	8世紀前半	第15図	図版8
75	土師器甕 (10－000074)	口径14.0　残高5.6 (口縁～肩部1/2)	橙色。胎土に片岩含む。内外面やや荒れる。口縁横撫で。肩部 内面篦撫で。外面篦削りか	8世紀前半	第16図	図版8
76	土師器甕 (10－000075)	口径(推)2　残高5.3 (口縁～体部破片)	にぶい橙色。胎土に片岩含む。焼成良好。口縁横撫で。体部内 面篦撫で、外面篦削りで口縁直下に指撫で	8世紀後半	第16図	図版8
77	須恵器蓋 (10－000076)	口径(推)16.7　残高2.8 径15.0　(口縁欠損)	薄い灰色。胎土に片岩含む。。右回転糸切痕整形。頂部回転篦 削り。輪状の跡貼付け	8世紀か	第16図	図版8
78	須恵器蓋 (10－000077)	口径17.9　径16.5 器高4.3(2/3)	灰白色。片岩含む。焼成やや甘く、内部酸化焼成。右回転糸切 痕整形。頂部外面糸状の跡貼付け。内面に指撫で痕	8世紀前半	第16図	図版8

表10　上大塚南原遺跡出土遺物観察表（その４）

№	資料名称 （資料番号）	測定値（cm） （残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
79	須恵器坏 （10～000078）	口径(推)13.5　底径(推)9 器高3.7(1/6)	濃い灰色。焼成堅い。右回転横撫整形。底面回転糸切。	7世紀後半	第16図	図版８
80	須恵器坏 （10～000079）	口径(推)13　残高3.4 （口縁～体部1/3）	灰白色。胎土に片岩含む。焼成甘く、表面粗い。回転横撫整形	8世紀か	第16図	図版９
81	須恵器甕 （10～000080）	残存幅26.1　残高20.7 （体部破片）	灰色。胎土に片岩含む。焼成堅い。内面上位青海波文。下位自然釉点状に付着。外面上位横位の撫で、下部叩き行明	8世紀か	第16図	図版９
82	須恵器甕 （10～000081）	底径(推)15.0　残高10.1 （胴～底部2/3）	灰色。胎土に片岩含む。横位の撫で。腰・底部境内面に指押さえ、指撫で痕。底面回転篦削り後高台貼付け	8世紀か	第16図	図版９
83	須恵器甕 （10～000082）	底径4.4　残高7.8 （胴～底部1/2）	灰色。胎土に片岩含む。焼成堅い。腰部上位内面青海波文。腰下位～底部内面指撫で。外面並行叩き目文	8世紀か	第16図	図版９
Ⅱ区遺物包含層						
84	土師器甕 （10～000083）	口径(推)23　残高10.5 （口縁～胴部1/3）	にぶい黄色。胎土に若干の片岩含む。内外面荒れひどく、始ど箇所で観察不能。口縁横撫で。体部内面撫で、外面篦削り	8世紀前半	第17図	図版９
85	土師器甕 （10～000084）	口径(推)24.4　残高25.0 （口縁～頸部破片）	橙色。胎土に片岩含み器肉厚。口縁外面に輪積み痕。内外面部分的に荒れ。口縁横撫で。体部内面篦撫で、外面篦削り	8世紀前半	第17図	図版９
86	須恵器甕 （10～000085）	残幅11.6　残高3.9 （肩部破片）	淡黄色。胎土に片岩含むが混入物微量。焼成悪く軟質。内外面横位の撫で		第17図	図版９
Ⅱ区南部包含層						
87	須恵器坏 （10～000086）	口径(推)8.4　底径(推)6.6 器高1.8(1/4)	灰白色。焼成良好。回転横撫整形後底面回転篦調整	8世紀前半	第17図	図版９
88	須恵器甕 （10～000087）	残幅7.7　残高5.8 （口縁破片）	灰白色。焼成良好。内外面横位の撫でで、一部に自然釉薬付着		第17図	図版９
89	須恵器甕 （10～000088）	残存11.6×8.5　厚1.3 （胴部破片）	灰色。胎土に赤褐色夜鉄混る。内面に青海波文、外面格子状の叩き目文		第17図	図版９
Ⅱ区中部包含層						
90	土師器坏 （10～000089）	口径(推)17　残高3.2 (1/6)	淡黄橙色。胎土に片岩含み軟質。内外面荒れ、横撫耀。口縁横撫で、体～底部内面篦撫で、外面篦削り後体部撫で	8世紀前半	第17図	図版９
91	土師器坏 （10～000090）	残存5.3×4.1　厚0.8 （口縁～体部破片）	橙色。外面下位若干荒れる。胎土に片岩含む。口縁横撫で。体部内面撫撫で、外面篦削り	8世紀後半	第17図	図版９
92	土師器甕 （10～000091）	口径(推)24　残高4.1 （口縁破片）	橙色。胎土に片岩や赤チャ含む。内外面やや荒れる。横撫で		第17図	図版９
93	須恵器台付坏 （10～000092）	高台径(推)10.5　残高2.0 （腰部～部～高台）	灰色。胎土に片岩含む。右回転横撫整形。底面回転篦起し後、断面台形の高台貼付け	8世紀	第17図	図版９
Ⅱ区北部包含層						
94	須恵器坏 （10～000094）	口径(推)13.7　底径(推)8 器高4.7(底片)	灰色。胎土に片岩含む。焼成堅く、底面含む外面に自然有付着。回転横撫整形後底面回転篦調整	8世紀後半	第17図	図版９
Ⅱ区下位包含層						
95	須恵器高台付坏 （10～000093）	口径11.3　高台径7.6 器高3.5　（一部欠損）	灰色。胎土に片岩含む。焼成良好。右回転横撫整形。底面篦起し後高台貼付け	9世紀前半	第17図	図版９

第２面

１号住居

№	資料名称 （資料番号）	測定値（cm） （残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	土師器坏 （10～000094）	口径(推)14.6　底径(推) 9.0　器高3.7(1/4)	にぶい橙色。口縁上位中心に器面荒れる。内面に黒斑付着。口縁横撫で。体～底部内面篦削り、内面撫でか	9世紀前半	第20図	図版17
2	土師器坏 （10～000095）	底部径(推)14.8　残高4.3 （口縁下部～底部1/3）	橙色。焼成甘く、内外面荒れる。口縁横撫でか。体～底部外面篦削り。内面撫撫で	8世紀後半	第20図	図版17
3	土師器甕 （10～000096）	残存幅7.4　残高3.7 （口縁破片）	橙色。焼成甘く、内外面荒れる。口縁横撫でか。肩部内外面整形痕無し	8世紀後半か	第20図	図版17
4	土師器甕 （10～000097）	口径(推)20.8　残高13.4 （口縁～体部破片）	にぶい橙色。外面と口縁内面荒れる。外面は取上げ時に剥落か。口縁横撫で。体部外面篦削り、内面撫撫で	8世紀後半	第20図	図版17
5	須恵器蓋 （10～000098）	径(推)4.7　残高1.6 （鈕～蓋部破片）	明るい灰色。蓋部回転横撫整形。輪状の鈕貼り付け	8世紀後半	第20図	図版17

表11　上大塚南原遺跡出土遺物観察表（その5）

No.	資料名称 （資料番号）	測定値（cm） （残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
6	須恵器蓋 （10－000099）	口径(推)15　残高2.1 （口縁一蓋部1/3）	明るい灰色。頂部に段状落痕。回転糸切痕。回転糸切痕。口縁部下方に引かれる。外面天井部に回転の筆圧り、内面に擦痕で痕	8世紀	第20図	図版17
7	須恵器蓋 （10－000100）	口径(推)15　残高2.0 （口縁一蓋部破片）	灰色。口縁部灰釉付着。回転糸切痕。口縁部下方に引かれる。外面天井部右回転の筆圧り	8世紀後半	第20図	図版17
8	須恵器壺 （10－000101）	残存幅5.4　残高4.2 （口縁破片）	明るい灰色。焼成堅い。口縁部上端に自然釉。口縁外反し、端部上下に引く。内外面横位の撫で		第20図	図版17
9	こも編み石 （20－000003）	長12.2　幅3.7 厚2.1　（一部剥落）	川床礫使用。右側の段差利用し、中位に幅3.5cm程の磨耗痕一周	片岩 144g	第21図	図版17
10	こも編み石 （20－000004）	長17.3　幅6.2 厚3.4　（裏面下位欠損）	川床礫使用。中位に幅2.8cm程の磨耗痕一周	片岩 462g	第21図	図版17
11	亀天井石か （20－000005）	残長9.6　残幅4.4 厚4.7　（欠損品）	全体に被熱し、一面熱土化著しく、煤吸着	片岩 137g	第21図	図版17
12	磨石 （20－000006）	残長6.0幅5.7 厚4.1　（上端欠損）	楕円球状の河床石使用。裏面に研磨面形成	二ッ岳軽石 83g	第21図	図版17
13	鎌 （60－000033）	残長15.0　幅4.2 厚0.6　（尖端部欠損）	身は直線的で刃や中内湾曲。柄装着部1cm程折るが、折面湾曲する	64g	第21図	図版17

2号住跡

No.	資料名称 （資料番号）	測定値（cm） （残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	土師器甕 （10－000103）	口径(推)23　残高18.9 （口縁一体部破片）	橙色。器面荒れる。造物取上げ時にかなり剥離か。器面薄い。口縁横撫で。体部外面筆削り、内面筆撫で	8世紀後半	第22図	図版17
2	土師器甕 （10－000104）	残存幅12.0　残高9.2 （口縁下部～胴部破片）	橙色。外面中心に取上げ時に器面剥落。口縁横撫で。体部外面筆削りか、内面筆撫で	8世紀後半～9世紀前半	第22図	図版17
3	須恵器蓋 （10－000105）	口径(推)18.2　残高1.6 （口縁一蓋部1/4）	淡黄色。酸化焼成。焼成甘く軟質。片岩混入。器面やや荒れる。回転糸切痕整形。口縁端部下方に引かれる	8世紀	第22図	図版18
4	須恵器蓋 （10－000106）	口径(推)17　残高2.8 （蓋～口縁部1/4）	灰白色。焼成軟質。回転糸切痕整形。口縁部下方に引く。頂部左回りの筆削り	8世紀後半	第23図	図版18
5	須恵器坏 （10－000107）	口径13.3　底径5.8 器高4.2(2/3)	明るい灰色。器面荒れる。口縁除き内外面現現。片岩混入。右回転糸切痕整形。底面回転糸切り	8世紀後半	第23図	図版18
6	須恵器坏 （10－000108）	口径(推)13　底径7.4 器高4.2(1/3)	灰白色。焼成甘い。外面吸油。右回転糸切痕整形。底面回転糸切。腰部外面下位筆撫調整	8世紀後半	第23図	図版18
7	須恵器坏 （10－000109）	口径(推)14.2　底径8.1 器高4.7(2/5)	灰白色。焼成やや甘い。右回転糸切痕整形。底面糸切後回転筆撫調整	8世紀後半	第23図	図版18
8	須恵器坏 （10－000110）	口径(推)12.8　底径(推) 7.0　器高4.0(1/4)	濃い灰色。焼成堅い。左右に圧平。右回転糸切痕整形。底面回転糸切り	8世紀後半	第23図	図版18
9	須恵器坏 （10－000111）	底径6.4　残高1.9 （腰部1/3と底部）	黄色釉かる灰色。焼成やや甘い。片岩混入。右回転糸切痕整形。底面回転糸切り	8世紀後半	第23図	図版18
10	須恵器坏 （10－000112）	底径6.7　残高3.0 （腰～底部3/4）	灰色。胎土に片岩混入。右回転糸切痕整形。底面回転糸切り	8世紀後半	第23図	図版18
11	須恵器双耳坏 （10－000113）	口径(推)11.4　底径(推) 5.8　器高4.3(1/4)	褐灰色。酸化焼成。石英・雲母混入。耳2方に付く。胴り出し高台。回転糸切痕整形後把手貼付け	8世紀後半	第24図	図版18
12	須恵器甕 （10－000114）	肩部径(推)23.8　残高7.2 （口縁一頸部破片）	やや濃い灰色。内外面横位の撫で。外面筆の当り痕残る	9世紀	第24図	図版18
13	須恵器甕 （10－000115）	残存幅11.5　残高4.8 （口縁破片）	灰色。内外面自然釉付着。口縁部下方に引く。内外面横位の撫で	9世紀前半	第24図	図版18
14	須恵器平瓶 （10－000116）	底径(推)19.4　残高6.2 （4片、肩～底部1/4）	灰色。口縁・頸部欠損。器高低い。内外面横位の撫で。肩部上面に斜方並行の列点圧痕痕文。底面擦撫で	9世紀	第24図	図版18
15	須恵器壺 （10－000117）	底径(推)12　残高10.2 （体～底部1/3）	濃い灰色。焼成部分的に甘い。片岩多く含有。高台剥離。内外面横位の撫で。内面体部に擦痕痕、底部に擦撫で		第24図	図版19
16	石製紡錘車 （20－000007）	径推3.6　孔径0.9 厚2.2　（側面3/4欠損）	表面外周角落し、裏面平坦。中央に孔穿つ。表裏・側面丁寧な研磨	牛伏砂岩 180g	第24図	図版18
17	台石 （20－000008）	長18.1　幅9.6 厚5.6　（完品）	川床礫使用。右側縁と左側縁の一部に敲打痕。上面に研磨面残る	片岩 939g	第25図	図版18
18	台石 （20－000009）	長14.5　幅15.2 残厚3.3	川床礫使用。上端中央一部欠損。上面に研磨面形成	片岩 10971g	第25図	図版18
19	こも編み石 （20－000010）	長18.9　幅7.0 厚3.5　（一部欠損）	川床礫使用。中位やや下寄りに幅8.4cm程の磨耗痕一周	片岩 817g	第25図	図版19

表12　上大塚南原遺跡出土遺物観察表（その６）

No	資料名称 （資料番号）	測定値（cm） （残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
20	こも編み石 （20－000011）	長15.4　幅5.0 厚2.4　（完品）	用床禮使用。左右両側やや下寄りを欠いて歪みを作り、この位置に幅5.9cm程の磨耗痕一周	片岩 278g	第25図	図版19
21	こも編み石 （20－000012）	長14.0　幅5.2 厚1.7　（裏面剥落）	用床禮使用。中位やや上寄りに幅3.7cm程の磨耗痕一周	片岩 221g	第25図	図版19
22	こも編み石 （20－000013）	長12.7　幅6.5 厚2.2　（完品）	用床禮使用。中位に幅4.5cm程の磨耗痕一周	片岩 253g	第25図	図版19
23	こも編み石 （20－000014）	残長12.6　幅3.8 厚2.9　（完品）	用床禮使用。中位に幅3.1cm程の磨耗痕一周	片岩 213g	第25図	図版19
24	こも編み石 （20－000015）	長12.4　幅5.8 厚2.2　（完品）	用床禮使用。中位に幅4.2cm程の磨耗痕一周	片岩 200g	第25図	図版19
25	こも編み石 （20－000016）	長11.6　幅4.7 厚2.7　（完品）	用床禮使用。中位に2.9cm程の磨耗痕一周	片岩 207g	第26図	図版19
26	こも編み石 （20－000017）	残長11.3　幅7.2 厚2.7　（一部欠損）	用床禮使用。下位、上端中央欠損。中位に幅4.4cmの磨耗痕一周	片岩 330g	第26図	図版19
27	こも編み石 （20－000018）	長11.0　幅4.5 残厚3.4　（完品）	裏面剥離の用床禮使用。左側の自然の歪みを使用し、中位に幅3.6cmの磨耗痕一周	片岩 242g	第26図	図版19
28	こも編み石 （20－000019）	長10.4　幅5.5 厚2.2　（完品）	用床禮使用。中位やや下寄りに幅3.9cm程の磨耗痕一周	片岩 197g	第26図	図版19
29	こも編み石 （20－000020）	長10.2　幅4.9 厚2.5　（完品）	用床禮使用。左側の剥離による段差を使用して、中位やや下寄りに幅2.9cm程の磨耗痕一周	片岩 213g	第26図	図版19
30	こも編み石 （20－000021）	長9.9　幅5.1 厚2.0　（完品）	用床禮使用。左右側面の嚙い違った位置を剥離して歪みを作り、これをつなぐように調めに幅2.5cm程の磨耗痕一周	片岩 163g	第26図	図版19
31	こも編み石 （20－000022）	長9.3　幅5.9 厚3.1　（一部剥落）	用床禮使用。中位に幅3.1cm程の磨耗痕一周し、側面に一部磨耗に伴う調整見る	片岩片岩 234g	第26図	図版19
32	天井石 （20－000023）	長37.6　幅14.0 厚6.0　（完全品）	用床禮使用。表出部分（奥側幅24cm、手前側幅28cm）のうち悉焼面と電正面被熱し煤付着の痕跡あり	片岩 4979g	—	図版19
33	石鏃 （20－000024）	残長2.3　残幅1.45 厚0.35	有茎鏃。茎と片側の翼欠損。二等辺三角形を呈するが側縁やや内湾。表裏から細かい調整調整	チャート 1g	第26図	図版19
34	石核 （20－000025）	長3.3　幅2.9 厚2.25	一面に礫位方向の3回の調整痕跡残る	黒曜石 24g	—	図版19
35	剥片 （20－000026）	長1.9　幅1.3 厚0.3	上面に数回、裏面に0回の調整跡残る	黒曜石 1g	—	図版19
36	刀子 （40－000004）	残長7.4　幅0.6 厚1.4　（中位）	実端と茎部端部欠損。肉厚の小型品	7g	第26図	図版19

３号住居

No	資料名称 （資料番号）	測定値（cm） （残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	師器坏 （10－000118）	口径（推）14　器高3.6 （1/2）	淡い橙色。内面一部吸炭。胎土片岩混入。器面やや荒れ。口縁横撫で。体～底部内面撫撫で、外面筆開り後体部撫で	８世紀後半	第28図	図版19
2	土師器坏 （10－000119）	口径（推）13.5　底径（推）8.0　器高3.9　（1/3）	橙色。内面中心に器面荒れる。胎土に片岩含む。口縁横撫で、体～底部内面筆撫で中、外面筆開り後体部上位指撫で	８世紀後半	第28図	図版19
3	土師器坏 （10－000120）	口径（推）13　残高3.2 （口縁～頂部破片）	橙色。内面中心に器面荒れる。胎土に片岩含む。口縁横撫で。体～底部内面筆撫で中、外面筆開り	８世紀後半	第28図	図版19
4	土師器坏 （10－000121）	口径（推）11　残高3.2 （1/4）	橙色。胎土に片岩混入。内面多少荒れる。口縁横撫で。体～底部内面筆撫で、外面筆開り後体部撫で	８世紀前半	第28図	図版19
5	土師器甕 （10－000122）	口径（推）12.9　残高16.0 （口縁～体部破片）	橙色。体部内外面取上げ時に剥離か、荒れる。胎土に片岩若干含む。口縁横撫で。体部内面筆撫で中、外面筆開り	８世紀後半	第28図	図版20
6	土師器甕 （10－000123）	口径（推）15.6　残高5.5 （口縁～肩部破片）	橙色。体部内外面取上げ時に剥離か、荒れる。胎土に片岩若干含む。口縁横撫で。体部外面筆開り	８世紀後半	第28図	図版19
7	土師器甕 （10－000124）	底径（推）14　残高18.1 （体部～底部1/6）	橙色。胴部内面中心に荒れる。下位内外面吸炭。腰～底部内面指撫で。体外面から底面筆開り	８世紀	第28図	図版20
8	須恵器蓋 （10－000125）	口径（推）14.5　頂部8.0 器高2.4　（2/3）	灰色。右回転糸切り整形。頂部面筆起し。鈕なし	８世紀後半	第28図	図版20
9	須恵器蓋 （10－000126）	口径（推）15　鈕径（推）4.8 器高2.6　（1/3）	灰色。頂部外面全体に自然釉。（左）回転糸切り整形。頂部切り離し後輪状の鈕貼付け	８世紀後半	第29図	図版20

表13　上大塚南原遺跡出土遺物観察表（その7）

No.	資料名称（資料番号）	測定値（cm）（残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
10	須恵器壺（10－000127）	残存4.7×3.9　胴径4.7　残高1.1（頸部破片）	灰色。鉢状を呈す。回転糸切整形	8世紀	第29図	図版20
11	須恵器壺（10－000128）	残存4.8×3.2　胴径（推）4　残高1.7（頸部破片）	灰白色。鉢状を呈す。回転糸切整形	8世紀	第29図	図版20
12	須恵器坏（10－000129）	口径（推）12.6　底径（推）9　器高3.6（1/4）	明るい灰色。胎土に片岩含む。右回転糸切整形。底面回転覚起	8世紀後半	第29図	図版20
13	須恵器坏（10－000130）	口径（復）12.2　残高2.5（腰～底部破片）	明るい灰色。多少軟質。回転糸切整形。底面回転覚起し	8世紀後半	第29図	図版20
14	須恵器高台付椀（10－000131）	口径（復）16.0　残高7.6（口縁～胴部1/4）	淡い灰色。焼成やや軟質。回転糸切整形。底面高台貼付け	8世紀後半	第29図	図版20
15	須恵器甕（10－000132）	残存15.2　残高12.3（頸～肩部1/4）	灰色。焼成堅い。口縁外反し、端部上下に引く。内面青海波の叩き痕、外面横位の施で		第29図	図版20
16	須恵器甕（10－000133）	底径（推）15　残高9.4（腰～底部1/6）	暗い灰色。表面剥落甚。底面磨耗。内外部横位の施で。底部内面回転しが年の指施で顕著		第29図	図版20
17	こも編み石（20－000027）	長12.6　幅4.5　厚3.9　（完品）	川原礫使用。左右側面を調整して平面面作り、この位置に幅3.9cm程の磨耗痕一周	片岩	第29図	図版20

4号住跡

No.	資料名称（資料番号）	測定値（cm）（残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	土師器坏（10－000134）	口径（復）12.8　器高3.2（2/3）	橙色。器面取上げ時の調整のためか荒れ、内面顕著。口縁撫で。外面箆削り後体部撫で。内面箆面痕残るが痕跡不能	8世紀後半	第32図	図版20
2	土師器坏（10－000135）	口径（復）12.6　器高3.6（1/3）	橙色。器面取上げ時の調整のためか荒れる。口縁撫で。体部外面箆削り。内面整形痕確認不能	8世紀後半	第32図	図版20
3	土師器坏（10－000136）	口径（復）17　残高4.1（1/4）	橙色。器面取上げ時の調整のためか荒れ、内面顕著。口縁撫で。外面箆削り後体部撫で。内面痕跡不能	8世紀後半	第32図	図版20
4	土師器坏（10－000137）	口径（復）13　残高2.8（1/4）	橙色。器面取上げ時の調整のためか荒れる。口縁撫で。体～底部内面箆撫で、外面箆削り後体部撫で	8世紀後半	第32図	図版20
5	土師器坏（10－000138）	口径（復）13　残高2.8（1/4）	橙色。器面取上げ時の調整のためか荒れ、内面顕著。口縁撫で。体～底部内面箆撫で、外面箆削り後体部撫で	8世紀後半	第32図	図版20
6	土師器甕1（10－000139）	口径（推）22.6　残高111.7（口縁～胴部1/3）	淡い橙色。胎土に片岩含む。内外面取上げ時の調整のためか荒れ顕著で整形痕確認不能	8世紀後半	第34図	図版21
7	土師器甕（10－000140）	口径（復）19　残高6.1（口縁～肩部1/3）	橙色。器面取上げ時の調整のためか荒れる。口縁撫で。肩部内面箆撫で、外面箆削り	8世紀後半	第34図	図版21
8	土師器甕（10－000141）	口径（復）24.0　残高10.3（口縁～頸部1/6）	淡い橙色。胎土に片岩含む。内外面取上げ時の調整のためか荒れ顕著。口縁横撫で。外面箆削り	8世紀後半	第34図	図版21
9	土師器胴張甕（10－000142）	胴部径32.6　残高16.6（胴部1/4）	におい黄橙色。胎土に片岩含む。内外面取上げ時の調整のためか荒れ顕著。頸部撫で。体部内面箆撫で、外面箆削り	8世紀	第34図	図版21
10	須恵器坏（10－000143）	底径（復）10　残高1.3（腰部下位～底部1/3）	灰色。回転糸切整形。底面回転覚調整	8世紀前半	第34図	図版21
11	須恵器坏（10－000144）	底径（推）6.8　残高2.8（腰～底部1/4）	灰白色。焼成やや軟質。回転糸切整形後、底面回転覚調整、底部内面箆撫で痕残る	8世紀前半	第34図	図版21
12	須恵器坏（10－000145）	底径（推）9　残高3.2（体～底部破片）	濃い灰色。焼成堅い。回転糸切整形。底面回転覚調整。	8世紀後半	第34図	図版21

5号住跡

No.	資料名称（資料番号）	測定値（cm）（残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	土師器坏（10－000146）	口径16.7×16.0　底径6.0　8.0器高5.7(5/6)	橙色。器面荒れる。片岩混入。口縁横撫で。体～底部内面左回りの箆撫で、外面左廻りの箆削り	8世紀前半	第35図	図版21
2	土師器甕（10－000147）	口径（復）19　残高5.7（口縁～肩部1/4）	橙色。器面外面を中心に荒れる。片岩混入。口縁横撫で。体内面箆撫で、外面箆削り	8世紀前半	第35図	図版21
3	須恵器坏（10－000148）	口径14.1　底径8.5　器高3.8(2/3)	灰白色。焼成やや甘い。片岩混入。右回転糸切整形。底面切り離し後回転覚調整	8世紀前半	第35図	図版21
4	須恵器坏（10－000149）	口径（推）13.9　底径7.5　器高4.8(1/3)	灰白色。焼成甘い。雲母・石英混入。右回転糸切整形。底面回転糸切り	8世紀前半	第35図	図版21

表13　上大塚南原遺跡出土遺物観察表（その７）

No	資料名称 （資料番号）	測定値（cm） （残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
5	台石 （20－000028）	長22.3　幅12.9 厚4.2　（一部欠損）	川床礫使用。上面に敲打痕残る。一部敲打痕に伴う剥離あり 川床礫使用。左右側面上位に敲打により平坦面作り、これより	片岩 1926g	第38図	図版21 図版21
6	こも編み石 （20－000029）	長19.4　幅5.6 厚4.0　（完品）	下位に幅8、2cm程の磨耗痕一周	片岩 659g		

6号住居

No	資料名称 （資料番号）	測定値（cm） （残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	須恵器高台付椀 （10－000150）	高台径（推）12.0　残高6.8 （体～底部1/3）	灰白色。焼成軟質。胎土に片岩含む。回転糸切整形。底部回転 箆調整後高台貼り付け	8世紀後半	第38図	図版21
2	須恵器甕 （10－000151）	口径（復）30.0　残高13.0 （口縁1/4弱）	暗灰色。土縁上下に引く。口縁上部中心に自然釉付着、胴域付 着。内外面横位の撫で	8世紀か	第38図	図版21
3	須恵器蓋1 （10－000152）	口径（復）20.8　残高2.1 （頂部中心・鈕欠損）	灰色。胎土に片岩含む。口縁端部下方に引く。回転糸切整形後、 頂部回転箆調整	8世紀前半か	第38図	図版21
4	須恵器椀 （10－000153）	底径（推）14.6　残高14.0 （腰～底部1/6）	灰色。焼成堅い。内面自然有付着。底部に残1箇所残る。外面 横位の並行叩き	8世紀か	第38図	図版22
5	こも編み石 （20－000030）	残長16.2　残幅3.5 残厚2.1　（破片）	川床礫使用。残存部に幅6.3cm程の磨耗痕残る	片岩 152g	第38図	図版22

7号住居

No	資料名称 （資料番号）	測定値（cm） （残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	土師器坏 （10－000154）	口径（復）13.5　残高2.4 （口縁～体部1/4）	橙色。器面取上げ時の調整のためか荒れ、内面調著。口縁撫で。 体～底部外面箆削りで、体部撫で	8世紀後半	第40図	図版22
2	土師器坏 （10－000155）	口径（復）17.0　残高2.7 （口縁～体部破片）	橙色。器面取上げ時の調整のためか荒れる。口縁撫で。体～底 部内面箆撫でか、外面箆削り後、体部撫で	8世紀前半	第40図	図版22
3	土師器坏 （10－000156）	口径（復）16.0　残高3.4 （口縁～体部破片）	橙色。器面取上げ時の調整のためか荒れ、内面調著。口縁撫で。 体～底部内面撫でか、外面箆削り	8世紀前半	第40図	図版22
4	土師器甕 （10－000157）	口径（復）21.4　残高22.7 （口縁～体部1/3）	橙色。外面多少荒れる。胎土に片岩含む。口縁横撫で。体部内 面箆撫で、外面箆削り	8世紀後半	第40図	図版22
5	土師器甕 （10－000158）	口径（復）23.0　残高13.6 （口縁～体部1/6）	橙色。外表面と内表面の一部取上げ時に剥落。器面薄い。口縁 横撫で。体部内面撫で、外面箆削り	8世紀後半	第40図	図版22
6	土師器甕 （10－000159）	口径（復）24.0　残高6.1 （口縁～肩部1/6）	橙色。内外表面取上げ時に剥落。器面薄い。口縁横撫で。体部 内面撫で、外面箆削り	8世紀前半か	第40図	図版22
7	土師器甕 （10－000160）	口径（復）23.0　残高14.3 （口縁～体部1/6）	明赤褐色。外表面一部と内表面取上げ時に剥落。器面薄い。口 縁横撫で。体部内面撫で、外面箆削り	8世紀前半	第40図	図版22
8	土師器甕 （10－000161）	口径（推）22　残高8.7 （口縁～体部1/8）	橙色。内外表面取上げ時に剥落。器面薄い。口縁横撫でで指頭 痕残る。体部内面撫でか、体部外面箆削りか	8世紀前半	第40図	図版22
9	土師器甕 （10－000162）	口径19.0　残高5.9 （口縁～肩部破片）	褐灰色。器面薄め。口縁横撫で。体部左廻りの内面撫で。体部 外面左回りの箆削り	8世紀前半	第42図	図版22
10	須恵器蓋 （10－000163）	口径（推）19　残高3.1 （口縁～蓋部1/4）	灰白色。（左）回転糸切整形。片岩含む。口縁部下方に折れる	8世紀後半	第42図	図版22
11	須恵器坏 （10－000164）	口径（推）14.0　底径（推） 8.7　器高3.7（1/3）	外面黄灰色、内面橙色。片岩含む。左回転糸切整形。底面左回 りの回転箆削り	8世紀前半	第42図	図版22
12	須恵器坏 （10－000165）	底径（推）8.0　残高2.7 （腰～底部1/3）	外面黄灰色、内面橙色。片岩含む。（左）回転糸切整形。底面左 回りの回転箆削り	8世紀後半	第42図	図版22
13	須恵器甕 （10－000166）	口径（推）21.0　残高8.1 （口縁～肩部1/4）	灰色。焼成やや甘い。口縁が造反し端部下方に引く。内外面横 位の撫で調整		第42図	図版22
14	須恵器甕 （10－000167）	底径（推）9　残高4.7 （腰～高台部1/4）	灰色。片岩含む。腰外面に自然釉。焼成堅い。左回転糸切整形。 高台貼り付け		第42図	図版22
15	こも編み石 （20－000001）	長15.0　幅6.5 厚2.9　（完品）	川床礫使用。中位に幅4、6cm程の磨耗痕一周	片岩 509g	第43図	図版23
16	こも編み石 （20－000002）	長15.0　幅6.5 厚2.2　（完品）	川床礫使用。中位両側を欠いて抉りを入れ分銅形打製のような 形にし、この抉れ部分に幅4、1cm程の磨耗痕一周	片岩 322g	第43図	図版23

表14　上大塚南原遺跡出土遺物観察表（その8）

1号竪穴

No.	資料名称（資料番号）	測定値（cm）（残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	土師器甕（10－000168）	口径(推)25　残高4.2（口縁～肩部破片）	橙色。内外表面取上げ時に剥落。器面やや薄い。口縁横撫で。体部内面撫で。体部外面篦削りか	8世紀後半	第44図	図版23
2	須恵器坏（10－000169）	口径(推)11　底径(推)6.4　器高5.0(1/6)	灰白色。焼成甘く、内外面風化。回転横轆整形。底面篦調整か	8世紀後半	第44図	図版23
3	須恵器壺（10－000030）	口径(推)16.4　残高4.0（口縁～頸部破片）	濃い灰色。焼成堅い。口縁外反し、端部上下に引く。内外面横位の撫で		第44図	図版23
4	石臼（20－000031）	残長1.7　残幅1.35　厚0.3（完備等欠損）	無茎鏃。下位2/3残存。抉り浅く、一方の脚端欠損。表裏から細かい剥離調整	黄岩 1g	第44図	図版23
5	こも編み石（20－000032）	長16.1　幅5.9　厚2.7（左側上下欠損）	川床礫使用。両側縁を欠いて浅い抉りを作り、この部分に上位に幅3.7cm以上、中位に幅3．4cm程の磨耗痕一周	片岩 321g	第44図	図版23
6	鍛冶鉄滓（40－000005）	径8.5　幅8.9　厚5.5	全体に粗だが、鉄含有量多い	423g	—	図版23

28号土坑（2面）

No.	資料名称（資料番号）	測定値（cm）（残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	土師器甕（10－000171）	口径(推)24.0　残高5.5（口縁～肩部破片）	橙色。胎土に片岩含む。内外面荒れ、観察難。口縁横撫で。肩部内面撫で、外面篦削りか	8世紀前半	第46図	—

31号土坑（2面）

No.	資料名称（資料番号）	測定値（cm）（残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	土師器甕（10－000172）	口径(推)12　残高5.2（口縁～肩部破片）	にぶい橙色。外面と口縁内面荒れ、観察不能。外面口縁下端に沈線。肩部内面篦撫で	8世紀後半	第46図	—

その他遺構外出土遺物

その他遺物

No.	資料名称（資料番号）	測定値（cm）（残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
8区南部						
1	土師器坏（10－000173）	口径(推)11.6　残高2.9（1/3）	橙色。胎土に片岩含む。器面荒れ、一部を除き整形痕観察不能。口縁横撫で。外面体部指押さえか。底面篦削り	8世紀後半	第50図	図版23
2	土師器坏（10－000174）	口径(推)12　残高2.5（口縁～腰部破片）	橙色。胎土に片岩含む。器面取上げ時の調査のためか著しく荒れ、整形痕観察はほぼ不能。口縁横撫で	8世紀前半	第50図	図版23
3	土師器坏（10－000175）	口径(推)11　残高2.3（口縁～腰部1/6）	橙色。胎土に片岩含む。器面取上げ時の調査のためか著しく荒れ、整形痕観察不能	8世紀後半	第50図	図版23
4	土師器坏（10－000176）	口径(推)14.0　残高2.8（口縁～腰部破片）	橙色。胎土に片岩含む。器面取上げ時の調査のためか著しく荒れ、整形痕観察不能		第50図	図版23
5	土師器坏（10－000177）	口径(推)20　残高5.4（口縁～腰部破片）	橙色。胎土に片岩含む。器面取上げ時の調査のためか著しく荒れ、整形痕観察不能		第50図	図版23
6	青磁碗（10－000178）	口径(推)15　残高2.1（口縁破片）	灰オリーブ色。釉内気泡中位。しのぎやや だれる	元代	第50図	図版23
遺構外出土遺物一括						
7	こも編み石（20－000033）	長12.4　幅5.7　厚5.6（完品）	下端欠損の川床礫使用。中位やや下寄りに幅3．8cm程の磨耗痕一周	片岩 441g	第50図	図版23
8	こも編み石（20－000034）	長10.1　幅3.9　厚2.3（完品）	川床礫使用。中位に幅3.0cm程の磨耗痕一周	片岩 114g	第50図	図版23

表15　鮎川藤ノ木遺跡出土遺物観察表（その１）

第１面

１面

No	資料名称 （資料番号）	測　定　値（cm） （残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備　考	図版号	図版番号
1	陶器破片 （10－000179）	底口径16　残高1.9 （底部破片）	にぶい橙色。底部内面縁かい抑し目。腰部～底部外面撫で		第51図	図版29

第２面

１号住居

No.	資料名称 （資料番号）	測　定　値（cm） （残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備　考	図版号	図版番号
1	土師器甕 （10－#REF!）	口径23.0　残高16.0 （口縁～胴部）	にぶい黄褐色。胎土片岩含む。内外面荒れ、観察困難。口縁横撫で か。肩部内面箆撫で か、外面箆削りか	８世紀前半	第54図	図版28
2	土師器甕 （10－#REF!）	口径20.0　残高10.7 （口縁～胴部）	橙色。胎土片岩含む。内外面外面中心に荒れる。口縁横撫で。肩部内面箆撫で、外面箆削り	８世紀前半	第54図	図版28
3	土師器甕 （10－000182）	口径（推）23.0　残高8.3 （口縁～肩部1/3）	にぶい橙色。胎土片岩含む。内外面荒れ、外面過半調整。口縁横撫で。肩部内面箆撫で、外面箆削りか	８世紀前半	第54図	図版28
4	土師器甕 （10－000183）	口径（推）21.7　残高8.7 （口縁～肩部1/6）	にぶい橙色。胎土片岩含む。内外面多少荒れる。口縁横撫で。肩部内面箆撫で、外面箆削り	８世紀前半	第54図	図版28
5	土師器甕 （10－000184）	口径（推）20.8　残高7.9 （口縁～肩部1/6）	橙色。胎土片岩含む。内外面やや荒れる。口縁横撫で。肩部内面箆撫で、外面箆削り	８世紀前半	第54図	図版28
6	土師器甕 （10－000185）	底径（推）2残　高10.3 （腰～底部1/2）	橙色。胎土片岩含む。内外面部分的に荒れる。体～腰部上位内面箆撫で、腰部下位～底部内面箆撫で。外面箆削り	８世紀前半	第54図	図版28
7	土師器小型台付甕 （10－000186）	口径13.8　脚裾径9.1 器高13.5　（一部欠損）	橙色。胎土片岩多く含む。外面荒れ顕著。口縁撫で。体部内面撫で、外面箆削りか。脚部内面撫で、外面箆撫でか	８世紀前半	第54図	図版28
8	須恵器蓋 （10－000187）	口径22.7　鈕径4.2 器高3.9　(5/6)	灰白色。胎土片岩含む。焼成やや軟質。右回転糸切り整形。頂部切離し後回転箆削り。小突帯摘み出し。頂部内面に指跡	８世紀前半	第55図	図版28
9	須恵器坏 （10－000188）	口径18.4　底径12.0 器高4.5　(3/4)	灰色。胎土に片岩含む。焼成良好。右回転糸切り整形。底面切離し後右回りの回転箆調整。底部内面に指箆き痕	８世紀前半	第55図	図版28
10	こも編み石 （20－000035）	残長13.8　幅7.9厚3.5 （下位欠損）	河床礫使用。想定される中位に幅4.2cm程の磨耗痕一周	片岩	第55図	図版28

２号住居

No	資料名称 （資料番号）	測　定　値（cm） （残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備　考	図版号	図版番号
1	土師器甕 （10－000003）	口径（推）20.0　残高5.5 （口縁～肩部1/3）	橙色。胎土片岩含む。内外面荒れ観察難。口縁横撫で。肩部内面箆撫で、外面箆削り	９世紀前半	第57図	図版28
2	土師器甕 （10－000002）	口径（推）19.0　残高7.7 （口縁～肩部1/6）	橙色。胎土片岩含む。内外面荒れ顕著。口縁撫で か。肩部内面箆撫でか、外面箆削りか	９世紀前半	第57図	図版28
3	土師器甕 （10－000001）	口径（推）18.0　残高5.0 （口縁～肩部破片）	橙色。胎土片岩含む。内外面荒れ、観察難。外面一部赤色を成す。口縁横撫でか。肩部内面箆撫でか、外面箆削りか	９世紀前半	第57図	図版28
4	須恵器蓋 （10－000004）	口径（推）16.0　器高3.7 (1/3)	灰色～にぶい橙色。胎土に片岩含む。一部酸化焼成或。右回転糸切り整形。頂部回転糸切離撫撫で	９世紀前半	第57図	図版28
5	須恵器蓋 （10－000007）	口径（推）14　残高2.1 鈕径4.0　(1/3)	灰色。胎土にやや多く片岩含む。上面手ばこに自然釉。右回転糸切り整形。頂部に輪状の鈕貼付け	８世紀前半	第57図	図版28
6	須恵器坏 （10－000006）	口径（推）12.5　底径6.0 器高3.2　(1/2)	にぶい橙色。胎土に片岩含む。酸化焼成或。内面中心に器面荒れ、観察難。右回転糸切り整形。底面切り離し後箆調整か	９世紀前半	第57図	図版28
7	須恵器椀 （10－000005）	口径15.0　底径7.3 器高6.0　(4/3)	濃い灰色。焼成良好。右回転糸切り整形。底面回転糸切り。内面底部に指押さえ痕残る	９世紀前半	第57図	図版29

表16　鮎川藤ノ木遺跡出土遺物観察表（その10）

東部1面

No	資料名称（資料番号）	測定値(cm)（残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	こも編み石（20－000036）	長10.3　幅4.5　厚2.4（裏面剥離）	河床礫使用。中位に幅3、5cm程の磨耗痕一周	片岩	第72図	図版29
2	こも編み石（20－000037）	長13.8　幅4.1　厚2.6（完形）	バナナ形の河床礫使用。中位に幅3、5cm程の磨耗痕一周	片岩	第72図	図版29

東部2面

No	資料名称（資料番号）	測定値(cm)（残存状況）	形状・整形・調整等の特徴	備考	図版号	図版番号
1	鉄滓（40－000005）	3.7×2.9×2.1	粒状の集合体のような形状。鉄含有量はあまり多くない	25g	—	図版29

表17　未掲載遺物一覧（その1）

(1) 上大塚南原遺跡・鮎川藤ノ木遺跡の整理作業に於いては本書掲載以外の遺物（主に破片類）についても、確認面、地区、遺構、地点毎に各器種等に分類を行い、坏・椀・甕等は部位毎の分類も行った。
尚、分類回数は1回のみ実施したものであり、見直しも行なっていない。
(2) 当該作業では岡遺跡出土遺物が土壌の性質上細かく割れてしまう傾向にあったことに鑑みて種類、部位毎の数量カウントは行わなかったが、重量を1g単位で測定した。
(3) 表17と表18に掲載したものは、その分類、計量したものを器種毎にまとめたものである。
(4) 本表掲載遺物のうち土師器・須恵器は主に律令期のものである。また竈構築材としたものは土師質埴であるが、形状が竈構築材と認識されるものと不明瞭なものとがある。

1　上大塚南原遺跡

面	遺構・区域・層	出土遺物
1面	Ⅰ区北部	土師器坏 46g、土師器甕 377g、須恵器坏・椀 4 g、須恵器壺 172g、竈構築材 8 g
	Ⅰ区中部	土師器甕（5g）
	Ⅰ区	縄文土器 17g、土師器甕・壺(古墳前・中期) 79g、土師器坏 27g、土師器甕 269g、須恵器坏・椀 35g、須恵器甕 279g、竈構築材 12g、鉄滓 72g、軟質陶器 15g、陶器 9 g、磁器 12g
	Ⅱ区	土師器甕・壺(古墳前・中期) 18g、土師器坏 2 g、土師器甕 377g、須恵器坏・椀 4 g、須恵器壺 172g、竈構築材 8 g
遺物包含層	Ⅰ区北部上層	土師器坏 52g、土師器甕 65g、須恵器坏・椀 12g、須恵器壺 32g
	Ⅰ区中部上層	土師器坏 105g、土師器甕 456g、須恵器甕 545g
	Ⅰ区南部上層	土師器甕 75g、須恵器坏 15g、須恵器甕 555g
	Ⅰ区上層	土師器坏 79g、土師器甕 769g、須恵器坏・椀 12g、須恵器甕 29g
	Ⅱ区南部上層	土師器坏 17g、土師器甕 417g、須恵器壺蓋 22g、須恵器甕 86g、灰釉陶器椀 2 g
	Ⅰ区中部下層	土師器甕・壺(古墳前・中期) 233g、土師器坏 2,015g、土師器甕 10,619g、須恵器壺 173g、須恵器坏・椀 245 g、須恵器甕 1,760g、須恵器壺 12、竈構築材 9 g、陶器 4 g
	Ⅰ区南部下層	土師器甕・壺(古墳前・中期) 40g、土師器坏 878g、土師器高坏 24、土師器甕 2,260g、須恵器壺 51g、須恵器坏・椀 92g、須恵器甕 1,444g、竈構築材 13g、木片 1 g未満
	Ⅱ区下層	土師器甕・壺(古墳前・中期) 16g、土師器坏 188g、土師器甕 1,079g、須恵器壺 11g、須恵器坏・椀 4 g、須恵器甕 819g、竈構築材 64g、軟質陶器 25g

面	遺構・区域・層	出土遺物
遺物包含層	Ⅰ区中部	縄文土器 9 g、土師器甕・壺(古墳前・中期) 528g、土師器坏 1,904g、土師器高坏 114、土師器甕 12,244g、須恵器壺 152g、須恵器坏・椀 158g、須恵器甕 2,450g、須恵器壺 19g、土錘 3 、竈構築材 86g、土偶 69g、陶器 4 g
2面	1号住居	土師器甕・壺(古墳前・中期) 36g、土師器坏 719g、土師器甕 3,364g、須恵器壺 154g、須恵器坏・椀 123g、須恵器甕 293g、竈構築材 120g
	2号住居	縄文土器 41g、黒曜石 1 g未満、土師器甕・壺(古墳前・中期) 146g、土師器坏 1,393g、土師器高坏 9 g、土師器甕 7,578g、土師器蓋鍔 17g、須恵器壺 299g、須恵器坏・椀 1,046g、須恵器甕 1,894g、男瓦(古代) 163 g、竈構築材 118g
	3号住居	土師器甕・壺(古墳前・中期) 43g、土師器坏 909g、土師器甕 5,396g、須恵器壺 90g、須恵器坏・椀 164g、須恵器甕 114g、須恵器壺 41g、竈構築材 3 g、炭化物 1 g
	4号住居	土師器坏 516g、土師器甕 1,800g、須恵器壺 65g、須恵器坏・椀 21g、須恵器甕 72g、竈構築材 60g
	5号住居	土師器坏 83g、須恵器甕176 g、竈構築材 27g
	6号住居	土師器坏 66g、土師器甕 357g、須恵器坏・椀 46g、須恵器甕 157g、竈構築材 80g
	7号住居	土師器坏 636g、土師器甕 2,109g、須恵器壺 20g、須恵器坏・椀 97g、須恵器甕 505g、竈構築材 81g
	1号竪穴	土師器坏 10g、土師器甕 174g、須恵器壺 38g、須恵器坏・椀 62g、須恵器甕 938g
	1号土坑	土師器甕・壺(古墳前・中期) 40g、土師器坏 17g、土師器甕 36g
	2号土坑	土師器甕　2 g
	3号土坑	土師器甕　11g、陶器椀 1 g

表18　未掲載遺物一覧（その２）

〔上大塚南原遺跡　続き〕

面	遺構・区域・層	出土遺物
2面	3号土坑	土師器甕　11g、陶器碗 1 g
	5号土坑	土師器坏 1 g、土師器甕　19g
	7号土坑	土師器甕 4 g
	8号土坑	土師器甕 9 g
	11号土坑	土師器坏 8 g、土師器甕　34g、竈構築材 7 g、軟質陶器 10g
	15号土坑	土師器甕 7 g
	19号土坑	土師器甕 8 g
	22号土坑	土師器坏 15g、土師器甕 45g
	24号土坑	土師器坏 17g、土師器甕 26g、須恵器蓋 5 g
	25号土坑	土師器坏 15g、土師器坏 21g
	27号土坑	土師器甕 21g、竈構築材 4 g
	28号土坑	土師器坏 3 g、土師器甕 26g
	30号土坑	土師器坏 48g、土師器甕 25g
	31号土坑	土師器坏 19g、土師器甕 11g
	32号土坑・24号ピット	土師器坏 5 g、土師器甕 124g
	36号土坑	土師器甕 26g
	37号土坑	土師器坏 16g、土師器甕 102g
	38号土坑	土師器坏 5 g、土師器甕 82g

面	遺構・区域・層	出土遺物
2面	39号土坑	土師器坏 9 g、土師器甕　13g
	40号土坑	土師器甕 16g
	48号土坑	土師器坏 13g、土師器甕 3 g
	50号土坑	土師器甕 5 g
	59号土坑	土師器坏 20g
	67号土坑	炭化物　(泥付 137g)
	15号ピット	土師器坏 4 g、土師器甕 1 g、竈構築材 10g
	17号ピット	須恵器壺 24g
	22号ピット	土師器甕 3 g
	23号ピット	土師器坏 5 g
	35号ピット	土師器坏 2 g、土師器甕 6 g
	39号ピット	土師器坏 46g、土師器甕 20g
	40号ピット	土師器坏 2 g、土師器甕 34g
	Ⅰ区全体	土師器甕・壺(古墳前・中期) 6 g、土師器坏 874g、土師器甕 2544g、須恵器壺 132g、須恵器坏・椀 80g、須恵器甕 999g、須恵器瓶 47g、竈構築材 35g、炭化物 1 g、陶器 4 g
	Ⅱ区全体	土師器甕 55g、須恵器壺 5 g、須恵器甕 128g
全体	Ⅱ区	土師器坏 33g、土師器甕 23g、須恵器甕 99g
	全域	須恵器甕 83g

鮎川源ノ木遺跡

面	遺構・区域・層	出土遺物
1面	2号道	須恵器甕 12g、内耳鍋 25 g、陶器 28g、泥人形(獅子) 8 g
	南東トレンチ全域	土師器坏 10g、土師器甕 14g
		須恵器甕 161g、羽釜か 12g、陶器鉢鉢 12g、陶器甕 39 g、陶器 40g
2面	1号住居	土師器甕・壺(古墳前・中期)　46g、土師器坏 41g、土師器高杯12g、土師器甕 841g、須恵器壺 7g、竈構築材 26g
	2号住居	土師器坏 39g、土師器甕 401g、須恵器坏・椀 78g、須恵器甕 28g
	住居	竈構築材 13g
	1号溝	土師器甕 14g

面	遺構・区域・層	出土遺物
2面	1・3号溝	縄文土器 12g
	2号溝	土師器甕 33g、須恵器甕 21g
	1号土坑	土師器坏 15g
	17号土坑	土師器甕 9 g
	19号土坑	土師器甕 14g、須恵器甕 391g、竈構築材 13g
	南東部	縄文土器 25g、土師器坏 28g、土師器甕 147g、須恵器甕 32g、竈構築材 1 g、磁器 12g
	全域	縄文土器 9g
全体	表土	土師器甕 6 g、竈構築材 18g
	覆土	土師器坏 17g、土師器甕 14g
	全域	須恵器蓋 24g、須恵器長頸壺 229g

写 真 図 版

上大塚南原遺跡調査区全景（北より）

鮎川藤ノ木遺跡調査区全景（東より）

PL 2
上大塚南原遺跡

上大塚南原遺跡１面全景（北より）

３号土坑全景

As−A復旧溝群断面（西より）

As−A復旧溝群（南より）

Ⅰ区中央部遺物包含層遺物出土状況（南より）

Ⅰ区西部遺物包含層遺物出土状況（南より）

遺物包含層遺物出土状況

遺物包含層遺物出土状況

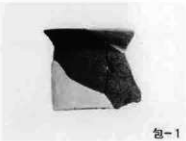
遺物包含層漆紙文書入り須恵器杯（7）出土状況

遺物包含層漆紙文書出土状況

遺物包含層遺物（77）出土状況

遺物包含層燃焼痕断面

PL 4
上大塚南原遺跡


包－1

包－2

包－4

包－5

包－6

包－3

包－7

包－8

包－9

包－10

包－11

包－12

包－13

包－14

包－15

包－16

包−17

包−18

包−19

包−20

包−21

包−22

包−23

包−24

包−25

包−26

包−27

包−28

包−29

包−30

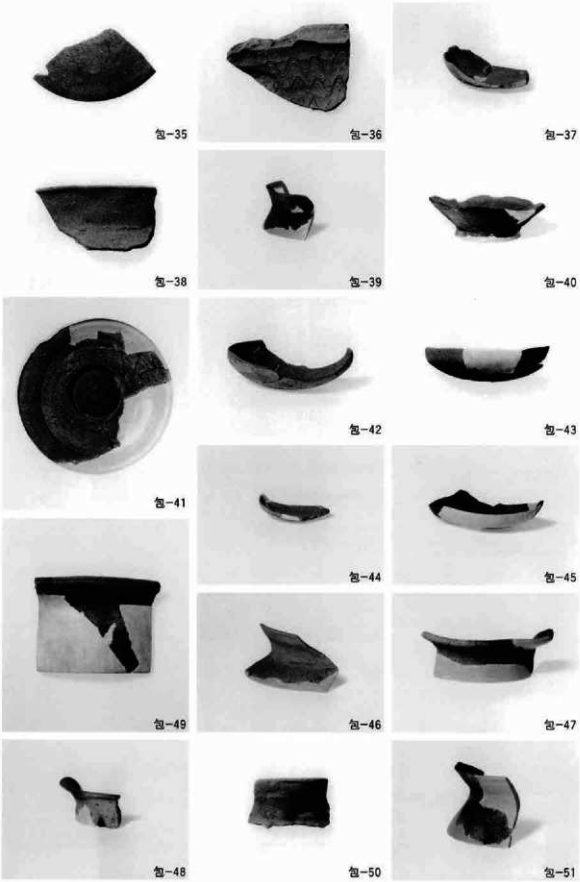
包−31

包−32

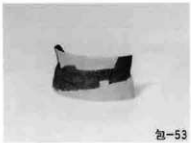
包−33

包−34

PL 6
上大塚南原遺跡


包−35
包−36
包−37
包−38
包−39
包−40
包−41
包−42
包−43
包−44
包−45
包−49
包−46
包−47
包−48
包−50
包−51

包-52


包-53

包-54

包-55

包-57

包-56

包-59

包-58

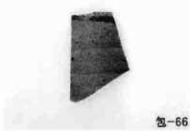
包-60

包-61

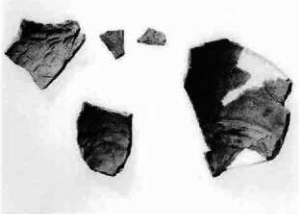
包-63

包-64

包-65


包-66

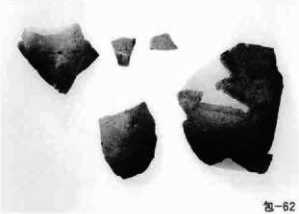
PL 8
上大塚南原遺跡



包−69

包−67

包−70



包−62

包−61

包−71

包−72

包−73

包−77

包−74

包−75

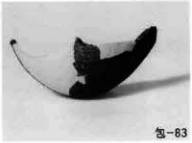
包−76

包−79

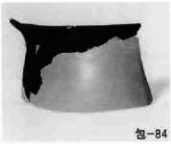
包−78

包-80

包-82


包-83

包-81


包-84

包-86

包-87

包-88

包-85

包-90

包-91

包-92

包-93

包-89

包-94

包-95

PL10
上大塚南原遺跡

2面航空写真

1号住居全景及び出土遺物（南より）

1号住居掘り方全景（南より）

2号住居床上全景及び出土遺物（西より）

2号住居掘り方全景（西より）

2号住居竈遺物出土状況（西より）

2号住居竈掘り方全景（西より）

3号住居床上全景（南より）

3号住居掘り方全景

3号住居竈全景（西より）

3号住居竈掘り方全景（西より）

3号住居竈煙道断割状況（南より）

3号住居貯蔵穴（南より）

PL12
上大塚南原遺跡

4号住居全景及び遺物出土状況

4号住居掘り方

4号住居竈全景及び遺物出土状況（西より）

4号住居竈掘り方（西より）

5号住居全景（西より）

5号住居床面除去状況（西より）

5号住居竈（西より）

5号住居竈掘り方（西より）

6号住居全景及び遺物出土遺物（南東より）

6号住居掘り方全景（南東より）

6号住居竈遺物出土状況（西より）

6号住居竈掘り方（西より）

7号住居全景（北より）

7号住居掘り方全景

7号住居竈（左：A竈　右：B竈、西より）

7号住居柱穴（西より）

PL14
上大塚南原遺跡

7号住居A竈（西より）

7号住居A竈掘り方（西より）

7号住居A竈煙道部分（南より）

7号住居B竈煙道出口部分（東より）

7号住居B竈（西より）

7号住居B竈掘り方（西より）

1号竪穴覆土中礫出土状況（南より）

1号竪穴全景（南東より）

Ⅰ区２面北西部土坑群（南より）

Ⅰ区２面中部２号住居付近土坑群（南より）

Ⅰ区２面南部土坑群（南より）

Ⅰ区２面東部（工事用道路下）土坑群（南より）

Ⅱ区２－１～３土坑分布状況（東より）

２－15土坑全景（西より）

２－16号土坑全景（南西より）

２－41号土坑・２－44号ピット全景（南西より）

PL16
上大塚南原遺跡

2－42・5号土坑全景（南西より）

2－44号土坑全景（南より）

2－45・46号土坑全景（南より）

2－60号土坑全景（東より）

2－61号土坑土層断面（南より）

2－67号土坑土層断面（南より）

Ⅰ区２面作業風景（南より）

Ⅱ区調査区西壁土層断面

1住-?

1住-2

1住-3

1住-?

1住-5

1住-6

1住-7

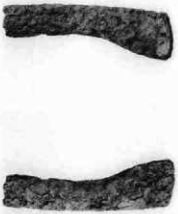
1住-8

1住-4

1住-9

1住-11

2住-1


1住-13

1住-10

1住-12

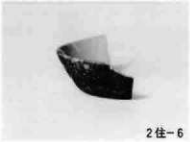
2住-2

PL18
上大塚南原遺跡

2住−3

2住−4

2住−5


2住−6

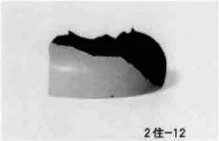
2住−7

2住−8

2住−9

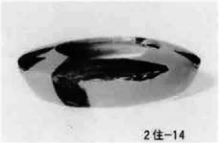
2住−10

2住−11


2住−12

2住−17

2住−13


2住−14

2住−16

2住−18

2住−15

2住−19

2住−20

2住−21

2住−22

2住−23

2住−24

2住−25

2住−26

1住−27

2住−28

2住−29

2住−30

2住−32

2住−31

2住−33

2住−33

2住−34

2住−36

3住−1

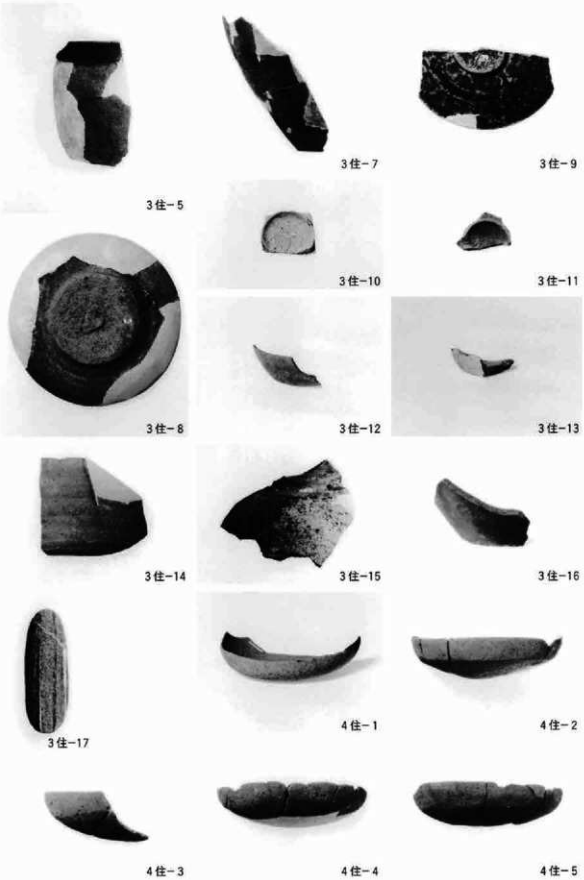
3住−2

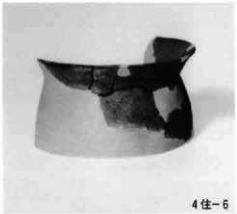
3住−3

3住−4

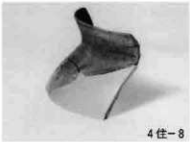
3住−6

PL20
上大塚南原遺跡




4住−6

4住−7


4住−8

4住−10

4住−11

4住−9

4住−12

6住−1

5住−1

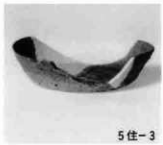
5住−4

6住−2

5住−2

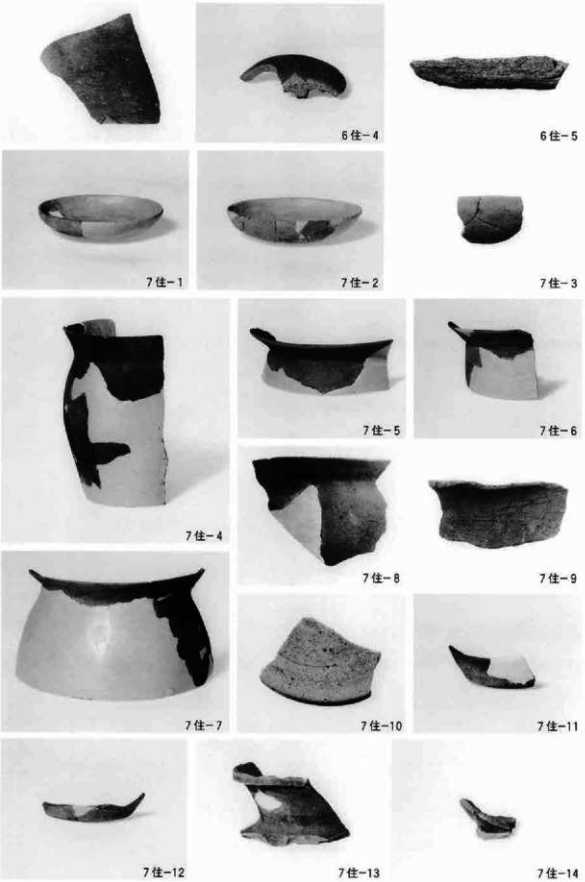
5住−5

6住−3


5住−3

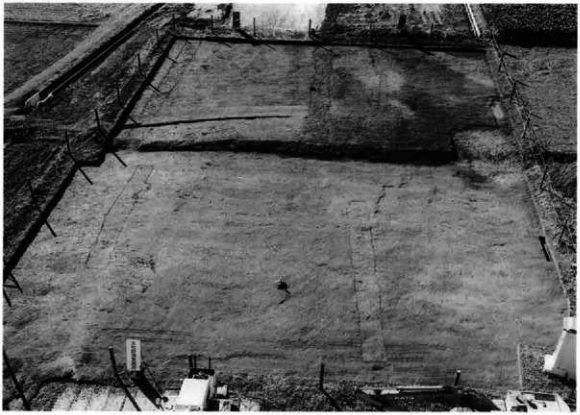
5住−6

PL22
上大塚南原遺跡



7住−15
7住−16
1竪−1
1竪−2
1竪−3
1竪−4
1竪−5
1竪−6
遺構外−1
遺構外−2
遺構外−3
遺構外−4
遺構外−5
遺構外−6
遺構外−7
遺構外−8
II区1面−1

PL24
鮎川藤ノ木原遺跡



1面全景（南より）

1号道全景（東より）

1号道西端土層断面（東より）

2号道全景（西より）

2号道東端土層断面（西より）

2 面航空写真

1 号住居遺物出土状況（西より）

1 号住居全景（西より）

1 号住居竈遺物出土状況（西より）

1 号住居竈掘り方（西より）

PL26
鮎川藤ノ木遺跡

1号住居ローム塊土層断面（西より）

1号住居掘り方全景（西より）

2号住居全景（西より）

2号住居掘り方全景（西より）

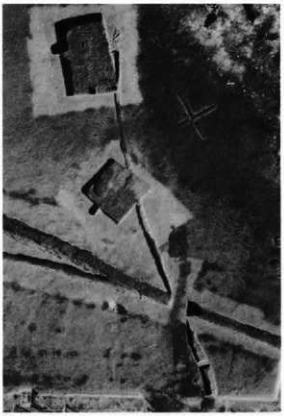
2号住居竈遺物出土状況（西より）

2号住居竈掘り方（西より）

1号住溝全景（東より）

1・3号溝調査風景（北東より）

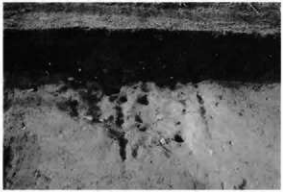
1・3号溝全景（西より）



2号溝全景

3・4号土坑（南より）

7・8・16号土坑（北より）



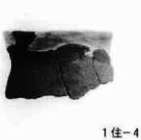
14号土坑（東より）

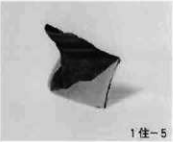
20号土坑（南より）

PL28
鮎川藤ノ木遺跡

1住−1

1住−3


1住−4


1住−5

1住−6

1住−2

1住−8

1住−7

1住−9

1住−10

2住−1

2住−2

2住−3

2住−4

2住−5

2住−6

2住－7

2面E－1

2面E－1

遺構外－1

1面－陶器擂鉢

工事中の鮎川藤ノ木遺跡（南より）

竣工後の上大塚南原遺跡（北より）

発掘調査報告書抄録

書名ふりがな	かみおおつかみなみはらいせき　あゆかわふじのきいせき			
書名	上大塚南原遺跡　鮎川藤ノ木遺跡			
副書名	(主)前橋長瀞線地方道路交付金関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書			
巻次				
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書			
シリーズ番号	392			
編著者名	石守　晃			
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団			
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団			
発行年月日	070110			
作成法人ID	21005			
郵便番号	377－8555			
電話番号	0279－52－2511			
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784－2			
遺跡名ふりがな	かみおおつかみなみはらいせき　あゆかわふじのきいせき			
遺跡名	上大塚南原遺跡　鮎川藤ノ木遺跡			
所在地ふりがな	ぐんまけんふじおかしかみおおつか・あゆかわ			
遺跡所在地	群馬県藤岡市上大塚・鮎川			
市町村コード	10209			
遺跡番号	群馬県：藤岡市－包072 事業団：上大塚南原：10005－01052　鮎川藤ノ木：10005－01053			
北緯(日本測地系)	上大塚南原	361432	鮎川藤ノ木	361436
東経(日本測地系)	上大塚南原	1395357	鮎川藤ノ木	1394359
北緯(世界測地系)	上大塚南原	361403	鮎川藤ノ木	361407
東経(世界測地系)	上大塚南原	1391305	鮎川藤ノ木	1390307
調査期間	20051101－20060131			
調査面積	2,951㎡			
調査原因	(主)前橋長瀞線建設工事			
種別	集落/その他			
主な時代	奈良・平安/近世			
遺跡概要	上大塚南原遺跡 奈良・平安時代－竪穴住居7＋竪穴1＋溝3＋遺物包含層1－土師器・須恵器 江戸時代以降－土坑4＋As－A災害復旧溝群1＋畠1 鮎川藤ノ木遺跡 奈良・平安時代－竪穴住居2＋溝31－土師器・須恵器 江戸時代以降－道路2			
特記事項	遺物包含層出土の須恵器坏に漆紙文書付着			

上大塚南原遺跡
鮎川藤ノ木遺跡
（主）前橋長瀞線地方道路交付金事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2007年1月4日　印　刷
2007年1月10日　発　行

編集／発行　財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555　群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
電話（0279）52－2511（代表）
ホームページアドレス　http://www.gunmaibun.org/

印　刷　所　上毎印刷工業株式会社